

市民文芸

令和4年度
函館市民文芸
第62集



函館市中央図書館
指定管理者 図書館流通センター・
マルエイヘルシーサービス共同事業体

函館市民文芸

第62集

目次

◇随筆(対馬 俊明 選)

【入選】

かがやく大地	山野 みちこ	1
窓辺の物語	元木 いづみ	3
おじいちゃんと一緒にそら豆になった日のこと		

本家の記憶	水 関 清	5
	園 部 敏 恵	7

【佳作】

昭和レトロ	美 作 上 月	9
救急車に乗ったこと	菅 原 節 子	11
ネガイマス	佐 藤 健	13

「SHO・TIME」雑感(二〇二二)

【選評】	高 橋 剛 治	15
		17

◇小説(安東 璋一 選)

【入選】

やくたたず	畠 田 農	19
カノッサ風地政学講座「ロシアのウクライナ侵攻」	外 山 聖 武	32

【佳作】

HD計画	佐 藤 健	47
------	-------	----

◇文芸評論(安東 璋一 選)

【入選】

俵万智の研究		
〔石川啄木という座標軸を置いて〕	水 関 清	63

【佳作】

涙はだれのものか? 誤字か誤解か??		
川口俊和「この嘘がばれないうちに」		
(サンマーク出版2017年発行)をめぐって	外 山 聖 武	78

【選評】

【選評】		83
------	--	----

◇ノンフィクション（竹中 征機 選）

【入選】

ウクライナ戦争と俳句

．．．末永玲子 85

出稼ぎ哀史―層雲峡水路ダム―

．．．齊藤 満 93

ジュール・ブリユネと箱館戦争

．．．木村裕俊 105

【佳作】

林住期の譚．．．小島栄樹 117

【選評】．．． 126

◇詩（鷺谷 みどり 選）

【入選】

眠る街．．．玉掛公恵 128

【佳作】

ある一日が僕にのこしてくれたもの

．．．梅村美保 133

【選評】

．．． 136

◇短歌（山縣 庸美 選）

【入選】菊地利春・清水法雄・開沼京子．．． 138

【佳作】石寄章枝・竹田光彦・柴田泰子・三好滯

清水牧子．．． 138

【選評】

．．． 139

【選者詠】

．．． 140

◇俳句(熊澤 三太郎 選)

【入選】 石岡繁雄・清水法雄・太田満喜子…………… 141

【佳作】 千葉誠一・住吉紀美子・伊藤静子・竹田光彦・
齊藤ふじお…………… 141

【選評】…………… 142

【選者吟】…………… 144

◇川柳(白井 靖孝 選)

【入選】 水関清・水島悦子・鍋倉英諒…………… 145

【佳作】 岩本真穂・犬石恭子・森美紀子・滑川昌子・
本間総子…………… 145

【選評】…………… 146

【選者吟】…………… 148

◇追悼 竹中 征機 先生…………… 149

◇審査員紹介・あとがき…………… 150

かがやく大地

山野 みちこ

二月二十四日、ロシア軍が、隣国ウクラ
イナに侵攻した。だれもがプーチンの暴挙
に驚愕した。戦火にさらされているウクラ
イナのひとたちが、一日も早くもとの暮ら
しに戻れることを祈っている……。

ロシア語を習ったことがある。もう半世
紀も前だ。函館市のどこかの課が主催した
講座だったと思う。週に一度。場所は、松
風町周辺だったはずだが記憶から消えて
いる。十人程度で満室になるような部屋に、
七〜八名の受講生がいたことは臆気に思
い出せる。テキストは何を使ったのか。冊
子だったのか、プリントだったのか……。

ア文学の影響だったのだろうか。なかでもト
ルストイに惹かれた。「戦争と平和」「アン
ナ・カレーニナ」など映画になった作品も
あったから、映画が先か、原作が先か、と
問われたらこれも明確には答えられない
が、「戦争と平和」はダイジェストで読んで
ことは確かである。大長編を読みきるなん
て私には不可能とホンモノは手に取らな
かったはずだから。しかしダイジェストで
あっても、トルストイの核というべきもの
に出合えたような気がした。むしろダイジ
ェストだからこそ、複雑な時代背景や登場
人物や思想が簡潔になっていて投げ出さ
ずにすんだのかもしれない。とにかく私は、
ひとりの登場人物が好きになり、同類のひ
とを「復活」の中にも見つけた。どちらも、
貴族階級に属しぜいたくな暮らしを享受

していたが、そんな自分自身と世の中の中の在
りように疑問をだき、新しい生き方を模索
する。農民と一緒に農作業をして汗をなが
し生の手心えを感じる「戦争と平和」の中
の男は、トルストイの実像に重なる。
週一で通ったロシア語講座。初級クラス
の先生は男性だったが、中級以上を教えて
いる方は銀髪のロシア人女性だった。白系
露人なのだと誰かから聞いたけれど、歴史
に疎い私は白系露人の意味がわからなか
った。たまに見かける彼女はいつも穏やか
に微笑んでいた。
教室で先ず学んだのはロシア語の《アイ
ウエオ》、日常のあいさつ、数の言い方など。
ロシア語は女性名詞や男性名詞などで語
尾が変化するというビックリすることも
知った。だから、アンナはカレーニナで、

夫はカレーニンだという。そして、女性初の宇宙飛行士が言った「ヤー・チャイカ(わたしはカモメ)」のヤー(わたし)はRが反転した文字だった。

十名に満たない受講生だったが、老若男女いり混じっており、私と同年齢の女性がひとりいた。色白の整った顔立ちはロシア映画「ハムレット」でオフエーリアを演じた女優に似ていて、はじめて言葉をかわせたときは嬉しかった。

いつしか、初老の店主の男性がクラスのリーダーのようになり、教室の空気も和やかになっていった。そのひとから、ある日、電話がきた。入港したロシア船の乗組員をお茶に招いたから、いらっしやい、という。何うと、ビールを飲みながら談笑していた。ふたりの船員は日本語をいくらか話せた。覚えてるのは、たがいに理解できないところは画を描いて補ったことだ。私が描いたヒマワリを「分かった、分かった」というように頷きながら、しかしひとり鉛筆を受けとって自分でも描き始めた。大雑把な線の私にくらべ、花びらも種

子も時間をかけて実に細密に仕上げ、うまいでしょう？ こう描かなければダメですよ、とでもいう風にニッコリした。ソ連の絵画教育は写真だけを良しとしているのか、と生意気にも私は思った。

いつ、どうして、ロシア語講座を辞めたのか。一年続いたのだったか……こつこつ勉強しないから付いていけなくなったのだろう。

ゴルバチョフが出てきて、ペレストロイカと言ったとき、もちろん意味がわかるはずはなかった。やがてソ連邦は崩壊した。混乱の極みのなかで、民衆はどんな暮らしをしているかとのルポがあった。みぞれが降るなか、胴長靴をつけたひとが川に入り、夜食べるための魚を釣っているという。「がんばって生き抜きます。未来はきっと良くなるはずだから」と眉にも髭にも雪をのせ笑っていた。民衆は、ソルジェニーツインの「イワン・デニソヴィッチの一日」のイワンのように前向きで逞しいのだ！ ウクライナもそのとき独立したのだと

今回の「プーチンの戦争」で知った私。むかし社会科学で、肥沃な大地のウクライナはソ連の穀倉地帯だと習った。今は「世界のパン籠」といわれ、上半分が青、下半分が黄色の国旗は、青空のもと小麦が実っている風景なのだ——。トルストイは、大地の上で、力強く誇り高く生きる農民を崇めた。ウクライナの大地の輝きが甦ることを信じている。

窓辺の物語

元木 いづみ

窓を開けると、冷涼な風が流れ込む。

右手奥に見えるナナカマドはオレンジ色の実をつけ、幹に直径四センチほどの穴がぽつかりと開いている。

キュツ、キュツ。コツコツコツと今でも遠くから聞こえてくるようだ。

黒い帽子に真一文字の口元、長い嘴、くりつとした眼。白と黒の上衣に赤いスパッツを穿いているかのようなコアカゲラが作った巣穴は、ひっそりとしている。

椿の花がポトンと落ち始めた五月の初めに我が家の庭にやって来た。

せつせつせつと掘り始め、三時間経った頃には体の三分の一が隠れる位になっていた。よく見たら、ツガイで頭頂部が赤いのが雄と知った。働き者の森の大工さんだ。古い双眼鏡と小さなデジカメを用意し、

興奮気味に庭の来客に注目し観察を始めた。

削り屑が根元に広がり、一週間足らずで奥深く削り抜かれた穴にすっぽり入れるようになった。交互に顔を覗かせ首を捻じりながら、キョロキョロと辺りを見回す姿は愛らしい。

縄張りの確認か傍の電線、松や合歡の木に飛び移ったり、お昼頃は交代で近くの森の方へ飛んで行ったりしていた。

警戒心が強いので、巣を放棄しないように庭の草とりや種まきは控えた。巣穴は寝床ではなく子育てのためらしいので、産卵の期待に胸が踊った。

五月二十四日の早朝、ギーギー、ギヤー、ギヤー、バタバタとけたたましさに窓に駆け寄り、網戸まで一気に開けた。そこで目

にしたのは数羽の鳥が入り乱れている光景だった。

初めて見る鳥が二羽、巣穴の前の小枝に悠然と陣取り、巣穴を目がけ執拗に飛んでいた。かたやコアカゲラの雄は追い払うべく懸命に応戦していた。私は、思わず庭に走り出た。

しかし、為す術がないことを悟った。お昼頃、一旦静まったかのように見えたが、終えたのは、夕方の六時半頃だった。

翌朝、七時半頃、再び攻防となった。コアカゲラの羽はやや毛羽立っているように見えた。雌のことも気がかりだった。

朝食のため、しばらく窓から離れた。ふと静けさを感じて窓に近づくと、巣穴から顔を出していたのは、侵入鳥だった。巣は奪われた。先に営巣をしたコアカゲラに情

が移っていたので悲しくなった。その後日、その鳥は、コムドリと分かった。コムドリは交互に出入りして藁のような物も運び入れていた。

その日の四時頃、キュッキュツ、トトトトと聞こえてきた。コムドリは留守だった。コアカゲラの雄は、巣穴に数回出入りして藁らしき物を取り出していたが、十分ほどで飛んで行ってしまった。再び来なかった。

新しい入居者に複雑な思いはあったが、少しづつ馴染んできた。頬に茶褐色斑があり、光沢のある群青色の羽を持つのが雄、雌は頬に斑がなく淡い灰色っぽい体色である。

時々、ヒヨドリやキジバトなどがやって来ると、ギーギーと威嚇する。

六月半ば過ぎ、警戒の音が聞こえたので、窓辺に寄ると、黒猫が巣穴をめがけて登っていた。咄嗟に「駄目だよ」と声に出してしまった。木の根元に白い猫も座っていた。

間もなく、ピーピーともピュルピュルと

もつかない声が幽かに耳に入った。

六月二十日になると、親鳥の巣の出入りが頻繁になり、餌を口に咥えている姿も見えた。巣は、窓から九メートル位離れている。巣の奥の方から、ひっきりなしに聞こえる囀りは幾つも重なって聞こえてきた。二十七日、遂に双眼鏡で黄色い嘴が突き出されるのが見えた。強雨の日もおねだりの囀りが響き心配になる。三十日、朝八時頃、電線に数羽のコムドリが並んでいた。

七月二日の朝も、ほんの一瞬、家族の姿を見ることが出来た。その日を最後に巣穴は静けさに包まれている。お別れは、出来た……。

萌黄色が漂う五月九日に留鳥・コアカゲラを迎え、七月二日にヒヨドリ入鳥 夏鳥・コムドリを見送った五十五日間の内言を通しての対話。もの憂さが忍び寄りがちな齢に、窓辺に寄って、息を潜め、目を凝らし、耳を澄まして、巣立ちまでの育雛を垣間見た。

折り悪しく、冷たいテレビの枠組みから

流されるウクライナの家族の映像は、辛すぎる。

アカゲラに関わるアイヌの人の資料に、アカゲラは、『エソクソキ(頭を打ちつける)と呼ばれ、鮮やかな色の衣服をまとうと、木をつつきます。この鳥をむやみに捕えたり、殺したりすると、一生ボロボロの衣服しか着れなくなる』とあった。鳥たちが羽ばたく大空は、世界中、繋がっている。地球は、ついで衝立で仕切られてはいない。

幸せも、苦しみも、共有したい。

おじいちゃんと一緒にそら豆になった日のこと 水関 清

おじいちゃんの畑は、一人で拓いたもの

だった。まず、自宅裏の斜面の草刈りをし、
 畝で大きな石を掘り起こしてはモッコで
 運んで石垣を築いて、畑の回りを固めた。
 次は土づくりで、遠方の畑から野菜くずの
 漉き込まれた土を一輪車で運んできては、
 こつこつと地ならしをした。秋になると、
 集落の皆が出入りする里山から、落ち葉が
 土に還った腐葉土を少しづつ運んできて
 は、元からある土と混ぜ合わせて耕し、少
 しずつ畑にしていた。

おじいちゃんは畑仕事の名人だった。な
 かでもおじいちゃんが育てたそら豆で、お
 ばあちゃんを作る甘煮は、ほおばった途端
 に、口の中で夏空が広がっていくような味
 がした。
 そんなそら豆料理が楽しみで、子どもの

私も、おじいちゃんのお手伝いをした。ま

ず、秋の畑に撒かれたそら豆の種が、鳩や
 カラスに食べられないように、畝の上にビ
 ニール・フィルム製のトンネルを架けて冬
 越しをさせるお手伝いをした。シワシワに
 ならないよう、他の子と二人がかりで畝の
 あつちとこつちでピンと張って、トンネル
 枠の上にかぶせるようにすると、おじいち
 ゃんに褒められた。春になってフィルムを

取り除くのは簡単そうだったが、冬の間に
 汚れたり傷ついたフィルムを丸めていく
 のは、骨が折れた。青空の下で眩しそうに
 している苗の根元に土を被せると、ぐんぐ
 ん草丈が伸びる。その成長に合わせて株を
 囲うように支柱を立て、テープやひもを張
 って倒れないようにするところは子ども
 には難しく、おじいちゃん一人の仕事にな
 った。
 そのようにして迎えた六月の畑には、そ
 ら豆がたくさん稔った。モコモコした細長
 い実が、緑色の茎から、何本も斜めに伸び
 出している。空を指して実がつくから
 「そら豆」ということ、そして実は、地面
 の方に向けてそつとねじると簡単に取れ
 ることを教えてくれたのは、もちろんおじ
 いちゃんだった。

そら豆の甘煮は、おばあちゃん得意のひ
 と品だった。私が収穫したそら豆を、サヤ
 つきのままで台所まで運ぶと、おばあちゃ
 んは、砂糖を混ぜた出し汁を作って待つて
 いた。私たちがサヤを割ってその中をのぞ
 くと、雲のようにふわふわで、綿のように
 柔らかいベッドに、決まって三つか四つの
 緑色の実が寝そべっている。その実を水で

さつと洗つて、サラダ油を熱した鍋の中で手早く炒める。そら豆の皮がはじけると、さつきの出し汁の中にそら豆を入れて、秘密の隠し味をひと振りする。あとは落し蓋をして、五分待つだけだ。

ある夏のこと、おじいちゃんと一緒に、ひとつのさや豆になったこともある。

夜に行われる花火大会に備えておじいちゃんと二人で、場所取りのためのシートを敷きに、家の近くの河原に出かけた時のことだった。お目当ての場所に大きな黄緑色のシートを敷き終えて、そら豆の甘煮でお昼を済ませ、さあ後はのんびり昼寝でもしながら夜を待とうと、横になって背伸びをしながら空を見上げると、西の空の黒い雲に気づいた。あつという間に大きくなった雲は空一面に広がって、急に辺りは暗くなり、猛烈な雨が降り始めた。

傘を持っていなかった私たち二人は、とつさに、敷いたばかりのシートにくるまつて雨をやり過ごそうとした。二人でシートの端をつかんで真ん中に向かって転がり、背中合わせになった。背の低い私とおじい

ちゃんとは顔の位置が合わず苦勞したが、何とか互いの声が聞こえる位置に落ちていた頃には、雨に加えて雷の音も聞こえ始めた。二人がくるまったシートの中から外をのぞくと、土砂降りの雨に混じって稲妻も見え、河原の人びとは雨宿りの場所を求めて走り回っていた。

シートの上をそのままにしていると、地面にはね返された雨水が首の方に流れ込んでくるし、足もとでも靴下がびしょびしょになってしまふ。背の低い私は頭の方のシートの端を丸める係、背の高いおじいちゃんは足元のシートの端を中に折り畳む係になった。そのようにして二人で、何とか雨を防いだのだ。

夕立が止んでシートから抜け出してみると、自分たちが黄緑色のさや豆になって雨をやり過ごしていたことに気づいた。河原の木々の下で雨宿りをした人たちには、そら豆ではなく、芋虫に見えたのかもしれないね、と言っておじいちゃんと二人で笑ったのだ。

作家・向田邦子は、思い出というものの

本質を、ねずみ花火に託して、こう語っている。

「いったん火をつけると、不意に足許で小さく火を吹き上げ、思いもかけないところへ飛んでいって爆ぜ、人をびっくりさせる。」

そら豆の甘煮は、私にとつてのねずみ花火である。今でもひと口ほおぼると、口中で広がる夏空があり、黙々と畑を耕すおじいちゃんの姿と、姉さん被りで竈に向かうおばあちゃんの姿が見えてくる。そして、雷鳴が響く中を、河原で土砂降りの雨に打たれる、丸まった黄緑色のシート。幼い私を慈しんでくれた、あの時の世界の匂いと音と光が、ありありと浮かんでくるのである。

本家の記憶

園部 敏恵

権兵衛と次郎長というのは、本家と我が家の猫の名前である。本家というとおおきよであるが、私の祖母の実家の事である。

昭和30年代、一家に一匹は猫か当時人気のスピッツが居た家は珍しくなかったのではないだろうか。本家の権兵衛は、猫の本分であるネズミ捕りをするでもなく、ジツとしている事が多いメタボ猫であった。その権兵衛を可愛がっていた本家の隗一郎おじは、よく我が家を訪ねて来た。私を「トチ」と呼び、時折り自転車、「前乗せ椅子」に乗せて近場に行くのである。頻繁に行くのは、市民が憩う千鳥ヶ池のある公園。広くて大きな池の中央には「立ち熊の噴水」が鎮座して、大量の水を勢よく四方に放水している。ボートに乗ってこの噴水の水がかかるギリギリまで近付くの

だが、ボートは揺れ動いて水飛沫が顔にかかり、怖くて立ち上がってしまった、益々揺れて泣き叫ぶ、という何回行っても、毎度恒例の「ボート乗り」になるのであった。

当時の娯楽といえは映画であった。同行した映画は「番町皿屋敷」「四谷怪談」といった凡そ就学前の子供が喜ぶものではなく、怖い場面になると両脚を前席の背に押し付け両手で目を覆い、キツチリ目を瞑るのだが、時折り怖いもの見たさで指の間から垣間見るのが常であった。隗ちゃんには毎回怖い思いをさせられるのだが、何故か誘われると連れ立って旭川の街中へ遊びに出るのだった。

代目、ひとり息子である。私の祖母もその妹のおばも、曾祖父母も皆な同じ芸道家だった。

本家の家長である政輝おじの所にはお弟子さんがよく集まり、正月にはお弟子の神主が烏帽子袴姿で祖霊舎の前にはお弟子の皆な揃って後ろに控え「掛けまくも畏き」と祝詞が始まると、神妙に拝礼するのである。その後の「直会」は神前の御神酒や御膳を戴くのだが、程なく宴会となり皆なよく食べよく笑い、よく飲んで子供ながら楽しい気分になるのだった。小さな子にはジュースかサイダーが相場なのだが、有難い神聖な発酵米飲料の入ったお猪口を舐めても誰も叱る者はなく、大様な親族縁者なのであった。

その居間には白い髭が首の下まである

先代の遺影が部屋を見下ろしており、二代

目の政輝おじは、長い格子窓を背に火鉢の横の定位置に座つて嬉しそうに眺めているのである。傘の付いた電球がオレンジ色に部屋を染めて遠い記憶の正月の情景を照らしていた。

時は同じ晩秋のある日、本家に行こうと思ひ立ち、それには車の往来のある大通りを渡るのだが、無謀にもひとり家を飛び出してしまつた。大通りを渡るまではよかつたが、渡つた先の通りを歩いてても本家は見つからず迷子になり、泣き噓じやくつている私を見かけた通行人の問いかけに益々不安が増して、声は号泣から慟哭じやくに変わった。

その声を二階の稽古場で聞きつけた政輝おじは「トチだ」と私に気付いて救出し、無事何事もなく辿り着いたのだった。

外の寒さで、悴かじんで冷たくなつた手を貞子おばは、洗面器のお湯に手を添えて温め、着物の襟合わせを開いて、やんわりと温かく膨やかな白い胸の中に手を入れて「よく来たね」と膝の上の私に語りかけた。それに安堵していつの間にか寝入つたの

だつた。

政輝おじは、若い頃から詩を書いていた。小説「氷点」に登場する赤レンガ造りの「珈琲亭ろろる」は、昭和14年創業の旭川で最も古い喫茶である。ここに詩文を嗜たもむ文人達が集まり白熱した論議を交わした。

おじは、新聞社で文芸欄を担当していた小熊秀雄、郵便局に勤めながら文芸誌に詩を寄せていた今野大力等と共に同人誌を発表、交流していた。

近年、当地の函館中央図書館におじの詩集「人間啄木」「北海道詩人集」が閉架書庫に眠っていたのを見つけた。後半生の楽しみとしてゆつくり目を通したいと思う。

前出のもう一匹の猫、次郎長が居候していた我が家の二階は祖母の稽古場だつた。就寝時にはそこが寢床になるのだが、時折り布団から見上げた天井では、ドタドタと隅から隅へ走り回るネズミの大運動会が始まるのである。我家の猫は、本家の猫同様「不精猫」であつたのであろう。それでも昼には静寂とした茶室に変わるのだつた。

結局、芸道を継いだのは隗一郎おじひと

りだつた。しかし、次第に人の出入りが途絶えていき、本流は枯れてしまつたのである。おじ達が皆いなくなつて数十年経ち「十一丁目」はもう存在しないが、帰省してその前を通る時、いつも懐しい人達の姿がセピア色の映像となつて甦よみがってくる。

60数年前、家の前では手拭いを頬被りした御者が馬車をひき、乾いた土臭い馬糞風の中で子供達は長幼の差もなく、団子になつて遊んでいた。その中のひとりであつた私のかげがえのない本家の記憶である。

昭和レトロ

美作 上月

「おーい、みんな呼んでいるぞ」

「なんでよ。俺、これ、やりてえーんだ」

彼は、しぶしぶ戻って行った。

私は、射的に凝っていた。港祭り、神社のお祭りや夜店には、焼きそば、アメ煎餅炒り豆、ラムネ、金魚釣り、ヨーヨー、綿アメと、射的などのテント小屋ができた。

空気銃の筒先に、コルクの弾を詰め込み、標的を打ち落とすと、景品が貰えた。

せつかく当たっても、標的が重くて、僅かしか動かない。同じ標的を狙って、ようやく落ちそうになると、店番のねーちゃんに、元へ戻される。ちきしよーと悔しがりまた挑む。

コルクの弾は軽い。弾道が微妙に曲がる。衝撃が少なく、一度や二度では落ちない。いろいろと研究した。重たければ弾みがつ

き、真っ直ぐ飛ぶ。どうすれば重くできるかだ。

そうだ、画鋲を打つか。いやダメだ。画鋲は光って見つか。目付きの悪い、凄みのある用心棒につかまり、袋たたきにされる。

考えたのが、弾に唾を付けることを思いついた。見つからないように、そっと口に含み、ゆっくりと唾を含ませる。時間稼ぎに、銃を構えて、狙いをつけるふりをした。

今度こそ打ち落とせると、狙っているときた。

「おーい、来いとよ」

さっきの奴が、また呼びに来た。

「さっきいったべよ。お前たちだけで行けつてば」

「ダメだって、いうんだは」

「あんな……、お前な、帰ったらみんなに喋るからだつてよ」

「うるせーな」

そのときだった。せつかく、落ちそうになつた標的が、戻されてしまった。

その途端、緊張が緩んでしまった。気が削がれたので、仕方なく奴の後にしたがった。

職場の若い衆、八人で、浅虫温泉に遊びにやってきたのだった。

夕食にタップリ飲むのだろうと思つたら、何人かが、もぞもぞ、しはじめた。

「おーい、なにしてんだ」

「行くぞー」 気合をかけて立ち上がった。「どこによ?」

「いいてば……」

そこへ、給仕の年増のおばちゃんが来た。

「兄さん方、出かけるのけ？」

「うん、ちよいとよ」

「危ないよー。客引きにつかまったら、

ぼったくられるからね」

ぼったくれを聞いたのは、このときがはじめてだった。

「ほーら、玄關の靴箱の上にあるの、あれ持っていつて、見たら、真つすぐ帰っておいでよ」

先に部屋を出た奴が、ひとつかみ取り上げて、先頭を歩き出した。隣の奴がいった。

「そんなに、どうする」

「二枚出せば、二倍安くなるべや」

「バカか、お前」

残りをばらまいた。

私は、一番後ろにいたので、射的を見つけて、やっていたのだった。

台の囲い上で、リーゼントの頭が呼び込みをしていた。ベルが大音響で鳴り続けている。

「いらつしやーい、いらつしやい。まもな

く開演です。さーさ、入った、入った。

ほーら、そこのお兄さんがた、いい席が埋

まっちゃうよ。ほーい、入った、入った」

中は、がらがらだった。せいぜい、四十人くらいの座席だ。三十分も待たされた。

ようやく、室内照明が薄暗くなり、二階の窓からスポットライトが、下手のカーテンに当たり、音楽が鳴り出した。

♪ チャラララタタター チャラララタタター

テンポがいい。スポットライトの先に、美人(らしい)が顔を出した。引つ込んだと思ったら、また、出てきた。長襦袢を着ていた。

音楽に合わせて、左に、右にと腰をくねらせ、妖艶に踊る。帯はしていない。片手で、これ見よがしに、そーっと前を押さええている。

中央に近づいたとき音楽がぴたりと止まった。踊りのねーちゃんも、右手を挙げたまま止まっている。ねーちゃんが、一階の窓に視線を送った。ようやく音楽が鳴り出した。

♪ チャラララタタター チャラララタタター

左手の隅にいつて、ちよこつとかがんだ。襦袢の裾が割れて、膝をのぞかせた。ニコツと客に目配せ。今度は右に行つた。

♪ チャラララタタター チャラララタタター

音楽が続く。みんなの首が、左、右と動く。ねーちゃんが、舞台中央のかぶり席に来た。

客が一斉に、どつと押し寄せた。天井から、頭の芯からキーンと響くような、声が降ってきた。

「おーお客様に申しあげます。舞台の手をさげーて、くださーい。踊り子さんに……」
瞬きを忘れていたので、目玉が乾いてしまった。何んにも、見えなくなつた。

救急車に乗ったこと

菅原 節子

これまでの人生で2回救急車に乗ったことがある。1度目は私が高校1年生の時なのでもう30年以上前になる。通っていた高校の陸上大会は全員参加となっており、100m走と100mハードル走は必須となっていた。練習の時は特に問題なかったのだが、本番は緊張のせいか、ハードル走でうまくハードルを飛び越えることができず、頭を打って倒れ、そのまま救急車に乗せられ気づいた時には病院のベッドの上だった。別に住んでいた今は亡き祖母がベッドの横に腰かけており、私が「おばあちゃん」と言ったことで意識が戻ったことになる。父は東京で働いており、母も働いていたため祖母に連絡がいったようだった。陸上大会があった6月に湯川町から山の手町に引っ越しをして、新しい家に移って

間もない頃だったので、毎朝看護師さんが私に自分の名前や、電話番号を聞くことで脳が正常かどうかを判断していたようなのだが、私が電話番号を前の家のと新しい家のとを完全に覚えきっていなかったため、正しい電話番号を言えなかった。看護師さんや家族はだいぶ心配したようだったが、私は内心名前や電話番号を聞かれ、腹立たしかった。なんて失礼なことを聞くのかと。病名はくも膜下出血だったが、まだ高校生で回復が早かったことと、運よく急所をそれていたようで手術なしで1週間ほどで退院することができたのは幸運だったと思う。

2度目の救急車体験は29歳の時なのでこちらも20年以上前になる。その頃は仕事の関係で上ノ国町に住んでいて、夕方仕

事が終わり、家に帰る途中交通事故に遭った。冬道で、対向車がスリップして反対車線を走っていた私の車にぶつかり、正面衝突したのである。エアバッグがハンドルのところから出たことでクッションになり助かったようだった。上ノ国町には現在はいわからないが、その頃は診療所しかなかった。江差町の道立病院まで運ばれた。その時は意識があったので救急車の中で横に寝せられている間中ずつと涙を流していたことを覚えている。自分が一体どうなってしまうのかという不安と、その日は金曜日だったので来週からの仕事は誰が代わりしてくれるんだろうという不安だけが頭の中をぐるぐる回っていたような気がする。ただ、この時も運よく、膝から血は出ていた気はするが、歩けないという

こともなく、それでも心配して駆けつけた同僚が車いすに乗せてくれ、また松葉杖も借りることができたので何日かは松葉杖をついていたが軽いねん挫で済んだ。身体は大丈夫だったが、一番困ったのは車が廃車になってしまい、通勤場所が家から10km離れたところにあつたので、通勤手段をどうしようかということだった。代車が用意できるまで同僚が10日間くらい送迎してくれたのは有難かった。ちなみに、救急車で江差町まで運ばれたが入院の必要もなく帰っていいと言われて困ったのは家まで帰る手段である。その時は同じく駆けつけてくれた上司が家まで送ってくれた。今でも冬の道路を運転するのは怖い。そして極力夜の雪道は運転するのは避けている。自分が悪くなくても交通事故に遭うことは特別なことではないと思う。

2回の事故とも自分自身も驚いたし、周りの人たちも驚かせたり心配させたりしてしまつたが、大事に至らずこうして現在振り返ることができているのは幸せなことだと思う。偶然かもしれないが、1度目

はちょうど親が家を建てて間もない頃の出来事で、2度目はちょうど勤めていた小学校在舎を建てている時だった。「新しい家を建てた時はその後3年間は気を付けた方がいい」と聞いたことがある。このような経験をしているからか、あなたがちな言葉も迷信でもないのかなと私は思っている。

救急車に付き添い以外で乗る経験をしたことがある人が周りにいたとしても、あってそんな話をする機会もないのでどのくらい周りにいるかはわからない。私の家族では今のところはいない。友人で唯一調不良で救急車を呼んだことがあるという人が一人いた。交通事故に遭った時は、知り合いからは私が死んでもおかしくなれと思われたようだった。私ももしかしたらあの時、この世からいなくなっていたかもしれないな、とふと思う時がある。そして、現在こうして生きていることの不思議さを感じる。今、五体満足で生活できていることに感謝しながら、自分が周りにできることは何かを考えている。これからもあ

の時助かった命を大事にしていきたい。

ネガイマス

佐藤 健

コロナ禍の世の中も三年目に入った。

マスクの着用や手指消毒が日常の新しい生活様式にも慣れた。外出時にはできるだけモノに触れないように心掛ける。最近のエレベーターは階数ボタンが非接触型に進化しているのをテレビコマーシャルで知った。路面電車やバスの降車ボタンを押すのも、一瞬ためらわれる時代である。

私にはその降車ボタンを押すたびに思い出すことがある。時は今から五六年前に遡る。それは私が保育園時代の記憶である。保育園には、小学校入学前の一年間通った。二年間通う子供もいたが、その差は祖父母がいるかないかだと聞いたことがある。あの当時から待機児童問題があったのかはわからないが、親以外に面倒を見る人がいる場合、優先順位が下がったようだ。確

かに私には祖父母がいた。いわゆる『おはあちゃん子』で甘やかされて育った。何しろ祖母がいなければ不安で仕方がない有様で、朝起きて一緒に寝ていたはずの祖母の姿が見えないと大騒ぎである。

「ばあちゃん、ばあちゃん」

と泣きながら近くの畑まで探しに歩いたことを覚えている。当時、祖父母は葉たばこを栽培していて、私の泣き声で畑の中から出て来た祖母が冷たくなつた私の手と足を自分の懷で温めてくれたものだ。

そんな甘えん坊の私が、祖母から離れて短い距離だったが一人で路線バスに乗って保育園に通つたのだ。当時のバスはボンネットバスで車体中央部に乗降口があり、車掌さんが乗っていた。料金は乗車後に車内で、車掌さんに行き先を告げて切

符を買う方式である。車掌さんが専用ハサミで切符に穴を開けてから乗客に渡してくれた。私は定期券の利用だったので切符を買うことはなかったが、車掌さんに憧れて、買ってもらったおもちゃのハサミで紙に穴を開けて遊んだものである。

朝の登園時に、家の最寄りのバス停から乗り込むと私よりも遠くから来る園児たちが乗っている。保育園の最寄りのバス停でみんなと一緒に降りるので何の心配もなかった。問題は帰りである。降りるときは私ひとりであるが、バスを降りる際の手続きが、嫌で嫌でたまらなかつた。

バス停が近付くと車掌さんは、「次は〇〇(バス停の名前)、お降りの方はいらっしやいませんか」

と言って車内を見回す。降りたい人は、

「ねがいます」

と車掌さんに声を掛けるのである。すると車掌さんは運転手さんに、

「次、ねがいます」

と告げてバスが次のバス停で停車するのである。車内から声が掛からない場合は、

「次、オーライ」

と車掌さんが言つて、バス停で待つている人がいなければ停まらずに通過するのである。

私はこの「ねがいます」がどうしても言えなかった。声を出せない私は、自分が降りるバス停が近付くと態度で示すため席を立つのである。本当は車掌さんより前側の席に座りたいのだが、そこは遠くから通園する園児たちの指定席になっていた。女の車掌さんは、後ろにいても振り向いて確認してくれたが、男の車掌さんは声が掛からなければそのままである。また、二人掛けの椅子の通路側に大人が座っていたりすると中々席を立つにも勇気がいった。もどもどしているとな隣の大人が気付いて「ねがいます」と言ってくれることもあった。

稀には運転手さんが車内ミラーで見えて付いて、停まってくれたこともあるが、そうでなければ降りるバス停を通り過ぎてから何とか気付いてもらうことになる。そんなことが二度や三度ではなかった。何だか恥ずかしくて、バスから降りた私は一目散にバスの後方に向かって走ったのだ。

ワンマンバスに変わったのは、私が高校三年になった年である。あの当時、この『降車ボタン』があったならと思つたものだ。もしそうだったら、私にとつてはドラえもん『どこでもドア』に匹敵する秘密道具になつたはずである。

「次は、競馬場前」

路面電車の車内アナウンスが流れて、ひと呼吸おいてから降車ボタンを押すのがスマートである。でも、そのひと呼吸の間に誰かが先に押したりする。すると私の伸ばしかけた指が行き先を失つて宙を彷徨うことになる。

だからコロナ禍の今、ボタンを誰かに委ねることにした。すると誰も押さないこと

がままある。電停直前であわてて押すのは私の美学に反する。アリーナ前まで行つても、家までの時間はそう変わらない。

六二歳の私は「ねがいます」と大きな声で告げることができるようだろう。ただ、今はマスク越しではあつても、大声を出すことははばかられる世の中だ。

一日も早いコロナ禍の終息を願います。

「SHO・TIME」雑感〜二〇二一 高橋 剛治

令和四年も感染症の流行が継続してしまつたので、思う様に友人や親戚にも会えず、人との交流が乏しくなつてしまいました。

そんな引籠り生活の中でのテレビ観戦は、冬季北京五輪が、ジャンプスーツの失格問題やなんやら残念な事もありましたが、選手達は躍動し、楽しめて、とても良かったです。

ところが続くパラリンピック前に、ロシアによるウクライナ侵攻が始まり、小窓から世界を覗く様な私の日常も、ただ無力感で、暗いムードに覆われてしまします。

そんな中で春から始まつた野球のメジャーリーグは、大谷選手の活躍もあって、閉塞感の否めない隠遁の日々を支えてくれました。

実のところ野球について言えば、個人的には随分以前に興味を失つていて、最後に試合をフルで観たのは、太田幸司投手の力投した甲子園決勝の三沢高対松山商の試合でした。あの夏休み終りの自宅テレビでの再試合を含めた二十七回は、半世紀以上も前の事です。

その後も、テレビのスポーツニュースや新聞、雑誌等ではWBCや五輪、イチローのメジャー移籍後の活躍は見ていましたし、概ねの野球の結果と動きは、人と会話を交わす位の事は把握できてはいましたが、試合を見ると言う所からは遠ざかっていました。

それは仕事や生活が忙しかつたと言う事でもあつたのですが、それ以前の学生時代からそうであつた事を考えると、野球に

対する情熱自体が喪失していたからです。サッカー等に比べ、基本的に動きが少なく退屈な時間が多い、と思えたゲームの全てを見る事に、我慢できなかったからだと思います。

それでも小学生の頃までの野球は一番の花形スポーツでしたし、アニメの「巨人の星」に熱中し、少年野球のチームでは内野を守り主軸を打っていました。野球は身近にあり、情熱も感じていました。少年の多くが野球選手を夢見ては、どこかの段階で挫折するのがパターンだったと思います。私の場合は早かつたのですが、中学に入る頃には才能の無さを感じ、諦めていました。それでも見る野球の試合に魅了される人は多いと思いますが、私の場合はここで御無沙汰となりました。それでも前記し

た通り野球自体に興味を失ったわけではなく、これまでも話題のシーンはニュースでチェックしていました。前年の大谷選手の「SHO・TIME」と言われる活躍も、MVP獲得も知っていました。

明治二十二年の正岡子規の句に、

「欠方ひまがたのアメリカ人の はじめにし

ベースボールは 見れど飽かぬかも」

と言うのがあり、メジャーでの日本人選手を見ると感慨を覚えます。それでもほぼ毎日午前中に放映されているBS放送を何となく見始めて、こんなはまに嵌るとは意外でした。

要因は仕事をリタイアした事とコロナ感染流行の為に余暇が多いと言う点、何となく退屈だと感じていたあの独特の間に、年とってシंकロロしたと言う点もあります。けれど一番の魅力は、やはり深淵はつちのつかん感溢れる大谷選手です。少年の頃から一途に目指す場所へ進んで行く様な、眩しい才能に触れられる事でしょう。そして単純に、見ている面白い事です。

さて語り出すと色々と思ひ出します。五

年程前に亡くなった父は熱心な巨人ファンで、テレビ中継が途中で終わった時にはラジオで終了までを聞いていた(あの熱意とか、今でこそ北海道では日ハムの人気が高いですが、巨人戦しか中継がなく、道民の多くが巨人ファンだった(巨人八連覇の頃)とか、大学の頃の友人の中にアンチ巨人と言うのが居て、関心は巨人が負ける事だけだったが、彼が知っているのは大嫌いな巨人の選手だけだった(今考えても何か可笑おかしい)事とか、添乗員のバイトの時に、野球好きのおばさん達に、好きな球団を問われ「ヤクルト」と答えて、鼻で笑われた事(当時のヤクルトは、そんなに弱かった?)等々。

出しました。巷間こゝろがた言われている負続けても熱狂応援する阪神ファンの自虐的愛好心に近いかもしれず、ああこれがそうか、と十四連敗の時は変に納得しましたが、やはり来年こそはプレーオフ進出を果して欲しいものだと思います。

それにしても試合を見ていると、ラテン系の国を中心に多国籍のプレイヤーが多いのに驚き、子規の次の句が想起されます。「国人ととつ国人と 打ちきせう」

ベースボールを見ればゆゆしも」
世界は野球でのみ競って欲しいものです。

ところで大谷選手の活躍と野球に取り組む姿勢に魅かかれつつ、エンジェルス試合を毎日毎日見ているのですが、チームはシーズン初めの勢いがいつの間にか失速し、なんでここで打たれて逆転されるのかとか、何故凡ミスがここで起こるんだとか、全く退屈させないチームの駄目さ加減に一喜一憂を続け、そのうちにそこに魅かれ

選評

対馬 俊明

今年の応募作は二十二編。コロナ流行の沈静化が進んでいるのだろうか。一般からの応募は回復傾向にある。それと昨年急増した高校・中学生の応募が、こちらが苦言を呈したためか激減した。函館市の、小中高生対象の作品募集は外にもあるはずなので、それぞれの入賞作品を読んで、応募対象を選んでほしい。それと今年目立ったのが、規定枚数をオーバーした作品があったことである。入賞作に入れたと思った作品もその中であつたので、もつたいない思いをした。結果、入選作四編、佳作四編を選んだ。

入選「かがやく大地」 山野 みちこ

「ロシア語を習ったことがある。もう半世紀も前」とある。きつかけはロシア文学の影響だった。「戦争と平和」「復活」の中に見つけた登場人物を好きになったり、受講生の中にいた同年齢の女性と言葉を交

わせたときの嬉しさなど書かれている。その後のゴルバチョフの登場とソ連邦の崩壊。ウクライナの独立とプーチンの戦争などにも触れており、読書が、世界の動向、人間理解に繋がる例となる作品になっている。思えば、ロシア文学が日本人に与えた影響には、計り知れないものがあつたことを思い出させてくれる作品である。

入選「窓辺の物語」

元木 いづみ

我が家の庭のナナカマドの幹に、コアカゲラが巣穴を作っている。ツガイで子育てのためらしい。そのできたての巣をコムクドリが狙う。コムクドリの親鳥の巣の出入りが頻繁になり、巣の奥の方から、ひっきりなしに聞こえる囀り。三十日、朝、電線に数羽のコムクドリが並んでいた。その日を最後に巣穴は静かになる。折からテレビ

たれるものを感じた。

入選「おじいちゃんと一緒に そら豆になった日のこと」

水関 清

孫の視点で、おじいちゃんが自宅裏の斜面に石垣を築いて、畑の周りを固める所から、腐葉土の漉き込みをして土づくりをしていく様子を描く。おじいちゃんが育て、おばあちゃんが作ってくれたそら豆の甘煮のおいしさ。夜の花火見物のために河原にシートを敷いているうちに雨に降られ、黄緑色のさや豆になって雨をやり過したことなど。作者は、これは幼い自分が感じた、世界のおいと音と光であると結んでいる。詩情漂う豊かな幼少期の記憶の再現である。

入選「本家の記憶」

園部 敏恵

昭和三十年代、一家に猫かスピッツがいた時代、本家にはじつとしていたことが多いメタボ猫の権兵衛がいたから始まって私をかわいがってくれた隼一郎おじは私

をトチと呼び、公園のボートに乗せたり、映画に連れていってくれたり。本家は代々表千家、池坊の教授であった。隼一郎おじは三代目。本家の家長である政輝おじは新聞社で文芸欄を担当していた小熊秀雄、郵便局に勤めながら文芸誌に詩を書いていた今野大力等とともに同人誌に作品を発表、交流していた。近年、当地の函館中央図書館におじの詩集「人間啄木」「北海道詩人集」が閉架書庫に眠っているのを見つけた。後半生の楽しみとしてゆっくり目を通したいと思うと結んでいる。

佳作「昭和レトロ」

美作 上月

職場の若い衆、八人で、浅虫温泉に遊びにやってきた時のことを書いている。射的の狙っていたのがなかなか落ちない。あげくの果てに店番のねーちゃんに元に戻されてしまう。

劇場では着物姿で踊る踊り子に観客の目引きつけられ、目玉が乾いて、なんにも見えなくなるといふ落ち。若者達の期待と興奮が書かれていて、うまい。

佳作「救急車に乗ったこと」菅原 節子

これまでの人生で救急車に乗ったことがあるとして、その二度の経験を披瀝している。最後にこれからもあの時助かった命を大事にしていきたいと、結んでいる。随筆の原点である体験と思考に当てはまる内容として取り上げた。

佳作「ネガイマス」

佐藤 健

コロナ禍も三年目に入り、外出時にはできるだけモノに触れないように心掛ける時代、保育園時代、帰途のバス停に近づくと「ねがいます」と車掌さんに声をかける、私はそれがどうしても言えない。立ち上がつて態度で示したり、停まってもらえず乗り過ごして引き返したり。ワンマンバスの時代になって、押しボタンを押すタイミングが問題になる。タイミングを失って、声かけもできるが、「大声を出すことははばかられる世の中」の回想から、コロナ禍で、日常に様ざま不自由が生じている時代の対処法を揶揄的にまとめた作品。

佳作『SHO・TIME』

雑感 二〇二二

高橋 剛治

令和四年も感染症流行の継続で引きこもり中のテレビ観戦。北京五輪後のパラリンピック前にロシアのウクライナ侵攻が始まる。春から始まった野球のメジャーリーグでの大谷選手の活躍が隠遁生活を支えてくれたこと。その後半世紀前の太田投手の力投など、テレビをにぎわした野球のヒーローを語り、明治の正岡子規の野球事始めの頃の句を紹介する。BS放送を通じて大谷選手の大ファンになったことを語るなど、高齢者の野球ファンに通底すると思われる心情を熱く語った作品。

やくたたず

畠田 農

三月に入ると、雪解けも進んで、日当たりのいい道端の草も
淡い緑になってきた。川口光は教員になって僅か二年になると
いうのに、早くも三校目の転勤が決まった。

最初に赴任した学校は一年で廃校になり、今いる学校は学級
の基準変更によって学級減になるという。それも、三月中旬に
なつてわかつて慌てた。そこで独り身の光が、校長に転勤を申
し出たのだつた。

『異動希望も出していないのに転勤させられるのだから、いま
い学校でなければ転動しない』と、はっきりいったほうがいい
こういい終えて、校長は慌てて役所に出かけて行つた。

どこに転動するにしても、光は郷里の小学校にだけは行きた
くない。この考えは教員になつた時から思つていたから、そう
ならないようひたすら願つた。

校長は夕方になつて、疲れたような顔をして帰つてきた。

「どうでした」
教頭が聞いた。

なんにもいわず、首を横に振つた。

「この時期では人事はほぼ固まつていて、一人動かすと大幅に

入れ替えることになるから、次の異動で必ず本人の希望通りに
するから。そう説得してくれとき」

「それで、どこの学校ですか」

「東陽町の小学校」

「えっ！」

光は声を上げた。郷里の学校だ。

住宅に帰ると電気もつけずに、居間に横になつた。郷里も学
校も、光にはなにひとついいことなつてなかつた。

光の小学校の入学は昭和二十年。その日が近くなつてくると、
姉は名前を書かせようとしたり、五十音の読み書きを教えた
りしたが、いうことをきかなかつた。

「この子はできないくせに、頑固だけは一人前なんだから」

姉もお手上げだつた。近所の信一も孝江も、名前どころか声
を出して本も読めるといふ。

「いいかい、学校には深くて、まっ暗な穴があるんだよ。いう
ことを聞かなかつたら先生に怒られて、その穴に入れられるん
だよ」

なんて脅されても、いうことを聞かない。戦後のことで物不足だった。それでも、父はどこで見つけてきたのか、竹で編んで（剣道の胴衣みたい）布の蓋のついたランドセルを見つけてきた。田舎では、ほとんどの子は父親が戦争から持ち帰った雑納だった。

「光は、いいランドセルがあつていいな」

母も姉もこういつて、なんとか学校に行かせようとした。

「お、おら、が、こ、う、い、い、がねも」

まったくきき目がない。

とうとう、入学式の日が来た。

母は大きなおなかをしていたから、光についていくことができなかつた。かわりに父がついていく。

ところが、学校に行く時刻になつても光はいない。しばらく家で待っていたが、近所の子どもと一緒に、先に行ったのだらうと思ひ、学校に行つてみた。ところが、光はいない。父は慌てて家に帰つてきた。そこにランドセルを背負つて、浜から上がつてきたところ、父と出くわしてしまつた。

「このわらしー、いまがらこ、うでは、どんな人間になるがわかるもんでねー」

こ、う叫ぶと、光を担ぎ上げて裏の池に走つた。ランドセルを背負つたまま、池に放り込んだ。騒ぎを聞いた母が走つてきて、光を引き上げた。

光はものはいわない。学校も勉強も嫌い。よく頭が痛い腹が痛いといつては学校を休んだ。それに怖がり度胸なしで、暗くなると外にも出られない。便所が外にあつたから、しょっちゅう寝小便をたれて、母に叱られていた。

ものがいえなくても勉強ができなくても、それはいい。が、漁師の子が海が怖い、舟酔いして昆布とりのイソ舟にもものれないでは、まったくどうしようもない。

終いには陸にあがつている舟に、足をかけただけで舟酔いしてしまつた。

どこの子も小学校三年生にもなると、一人前に昆布とりのトメ（舟を操る人）をすつていうのに、光ときたらなんの役にも立たなかつた。

こんなこともあつた。三年生の春の日曜日のことだ。

父は出稼ぎに出ていて家にいない。母と姉妹は山の畑に行つていて、光が留守番をしていた。ひとりで心細い。なにより嫌だつたことは、誰かが家に来ることだつた。

昼近くなつて、玄關の戸の開く音がした。

「ごめんください」という声が出て、光は足音を立てないように奥の部屋に隠れた。なんども声が聞こえた。あんまり帰らないので、こんどは押し入れに入った。

眠つてしまつた。居間のほうが騒がしくて、目が覚めた。押し入れから出て居間にいった。

「おめー、どこにいだの。みんな大騒ぎして探してたんだよ」

「いま、警察に届けたらって、いったとこだ」というのだった。

みんなが帰ってしまったと、母に怒られ、げんこつもされた。

「ほんとにお前は、なにをやらせても、『やくたたず』なんだから」

次の日学校で大騒ぎだった。

先生にもさんざん聞かれたが、なんにもいえなかった。

中学校に行っても、よく学校を休んだ。

「おめー、完全に名まえ負けしてるな。光るどころが、どこもかしこも真つ黒だべよ」

なんてからかわれ、背中をどつかれて立ち上がると、行儀が悪い、と先生に怒られた。

学校にいても、家にいても、外にいても、他人と顔を合わせないようにした。顔を合わせたら、なにかいわれそうな気がして、下ばかり見ていた。長い間そうしているうちに、背むしのよう

に背中がまるくなってしまうた。

運動会の練習で、全校生徒が整列すると、

「光、背中を伸ばせー」

決まって先生に怒鳴られた。

どつと笑いが起きて、誰かに背中をどつかれる。おかげで下級生からもからかわれ、バカにされるようになった。

中学校二年の二月、父が亡くなった。漁船の遭難だった。

学校を卒業すると、すぐ街の自動車整備工場に住み込みで見習いに入った。そこには二歳上の健太がいた。高校を中退して見習いに入ったそうだ。

彼は仕事が終わると、いつも勉強していた。初めはなんの勉強かわからなかったが、しばらくして高校の勉強だということがわかった。自動車と高校の勉強を二つもやるなんて、よつほど勉強が好きなんだろう。

仕事が終わって、夕食を食べ、風呂に入った後は、退屈だった。布団に横になって健太を見ていた。

「おまえ、退屈だろ。自動車の勉強でもしたら。ここにある本、見てもいいよ」

といわれ、布団の中で本を開いた。

ある日、不思議に思っていたことを聞いた。

「こ、高校の勉強って、が、学校に行かなくてーも、で、でぎるの……」

「ああ、通信でやるんだ。勉強したやつを郵便で学校に送る。なん日かすると、点数ついて返ってくる。それを繰り返す。なん回かに一回科目試験があつて、それは近くの高校に行つて受ける。それで単位がもらえて、一科目が終わる、という仕組みさ。おれ、高校二年で中退だから、残りの一年分勉強すれば卒業できるんだ。おまえも、やつたら……」

「お、おれ、……べ、勉強苦手だから……」

「高校ぐらい出しておかないと、あとで困るぞ」

「そ、そんな、こと、か、考えたこと、ない」

「よかつたら、これ見てみな」

教科書を放つてよこした。もう、単位を取り終わった教科書だという。

先輩なのに意地悪はしない。ひとは皆、意地悪や嫌がらせをするもんだ、とばかり思っていたのに、健太は教えてくれたり、仕事で困っていると手伝ってくれた。

健太が高校を中退したのは、父親が交通事故で亡くなったからだという。それで、ここに見習いに入ったというのだ。

「こ、高校……、やろうかな……」

こういって、健太に願書を取ってもらって、入学の手続きをした。

七月に入ると、なんの前触れもなく、祖父(母方の)が来た。

家の暮らしが大変だというのだ。山の畑に肥しを上げるのも、ジャガイモを蒔くにも、母や妹の力では、無理だという。これは、光もずっと気になっていたことだった。

中学を卒業した時、母にいわれた。

「おまえがここで漁師をしていたら、弟たちもここにいてることになってしまふ。お前たちを、父さんと同じように、海で死なせたくない。家のことは、なんとかなるから、お前は出ていけ」

それで、ここに来たのだった。

祖父は親方に「一人前になるには何年かかるか」と聞いたたら

しい。親方は「五年はかかる」と答えたそうだ。それまでに、家族は干上がってしまう、と祖父はいった。

母は祖父母に、何も相談しなかったのだという。いったら反対されるとわかっていたからだろう、と祖父はいっている。

七月の中頃から、昆布とりが始まる。それまでに連れ戻したい。祖父はこう考えているようだ。

昆布とりは、中学三年生のとき、弟をトメにしてやった。舟酔いをして、箱メガネ(海の底を見る)の中に、ゲイゲイ吐きながらだっただけ、苦しいとか辛いとかいってられない。生活が懸かっていると思ったら我慢できた。

祖父は親方には、事情を話してわかってもらったといった。挨拶に行ったら、親方もおかみさんも、驚いていた。

「しつかり頑張りなさい」と

といわれた。

家に帰ると、イン舟や昆布とりの道具がすっかり用意されていた。祖父や叔父たちがやってくれたのだろう。

それから、光は漁師暮らしをした。

昆布とりは慣れていたから、あまり苦勞はしなかったが、イカつけはそうはいかなかった。

発動機船に乗るのは初めてだった。舟酔いばかりか、エンジンの油のおいにも酔ってしまった。

夕方三時半か四時ころ沖に出るが、帰るのは明日の八時、九時ころになる。吐いて吐いて、胃の中には何もなくなる。苦しく

てこのまま暗い海に飛び込んでしまったら、どんなにいいだろうと思つたこともあつた。それでも、ほかの仕事をやろうなんて思えなかつた。なんの知恵もなかつたから。

夜は長い。時計はなかつたから、天気の良い夜は傾きでいたい時刻がわかるので、北斗七星ばかり見ていた。水平線の東の空がほんのりと明るくなるのが何よりうれしい。

二年目からは、なれたのか舟酔いはほとんどしなくなつていた。この年、妹が集団就職で東京へ行つた。

次の年、弟が中学卒業して街の定時制高校に入った。働きながら勉強することになると、突然母がいいだした。

「ここから引越す」

前からいろいろ考えていたようだった。心配になつて聞いた。暮らしていく見通しがあるの」

「ここにも何も始まらない。まず、ここから出て……。前から行商の山川さんに頼まれて、着物の仕立てをやつて、収入のめどもついた。弟も働きながら高校に行くことになつたから、少しは家の足しになるだろう。お前も働くだらうし、いちばん下の弟も中学を卒業したら、働きながら高校に行けばいい。そうでもしないと、これまでの繰り返しになつてしまう」

というのが、母の考えだった。

街に出て八畳の部屋を間借りした。家財道具もほとんど家に置いてきたから、すぐに片付いたけど、光にはこれから何をしたらいいのか、まるで見当がつかなかつた。

工場で見習いをしていた時の、

「高校ぐらい出てなければ、あとで困るぞ」といつた、健太のことが思い出された。

光は、漁師をやつた時もひまに教科書を読んで、レポートだけは出していた。いつか科目試験を受けて、単位とやらをとれることもあるだろうと思つていた。レポートをかきながら、この勉強は本当に役に立つときが来るのだろうか。無駄骨じゃないかと思つたりした。

母は仕立ての仕事をするというし、弟の仕事も決まつたようだし、なんとかしなくてはと焦りだした。

それで、三年前にいた工場を見に行つてみようかと家を出た。

ようやく見つけて、遠くからしばらく見ていた。外で親方が一人で、車のボンネットを開けて何かやつていた。健太らしい人は見えない。どうしたのだろう。

近づいて行くと、親方が気づいたのか、こつちを見た。頭を下げた。

「おまえ、もしかしたら……。そうだよな。たしかヒカリ、ヒカリだろう」

うなずいた。

「どうしたんだ。しばらくだな。相変わらず無口か……」
親方は手を止めると、工場の中に入って行つた。

「おーい、おーい」

居間に向かつて叫んでいる。

おかみさんが出てきた。杖をついている。

片方の足首が曲がっている。

「人手が足りなくて手伝わせたら、このさまだ。ジャッキが外れて、骨が砕けて」

「不自由だけど、なんとかね」

おかみさんは、笑いながら光の顔をしげしげ見ている。

「ヒカリだったよね。どうしてるかって、うちの人と時々話してたんだよ。やめていくのが急だったから」

「覚えてるよ。おじいさんが、迎えに来たんだったな」

「け、健太さん……は」

「高校卒業して、田舎に帰った。父親のあとを継いで、農協に勤めてるそうだ。あいつ、仕事も勉強も、頑張ったからな」

「ところで、おまえは、どうしたんだ」

「ひ、引越し……ました」

「漁師やめたのかい」

うなずいた。

「そうか。それで、いま何してる」

首を横に振る。

「あれから若いやつが、なん人も来たけど、なん日ももたないで帰ってしまった。いまは、ひとりで細々とやってるんだ。よかつたら、手伝ってくれないか。新しい仕事が見つかるまででもいいんだ。通いなら少しは、手当出してやれるしさ」

光は、すぐにも働きたい気がした。

「あ、明日から来ます」

深々と頭を下げて帰った。

途中で振り返ると、親方とおかみさんが、笑いながら手を振っていた。しばらくぶりに、うきうきした気持ちになれた。

工場にもどって、あつという間に一年たった。

親方は夜間の自動車整備士の講習を受けさせてくれた。講習を受けるには三年以上の経験が必要だったが、親方は十五歳のときからここにいたことにして、申し込んでくれた。運輸省認定の講習で、一日おきだった。町工場で働く人が対象の講習で、終了試験に合格すると、国家試験の実技試験が免除されるということだった。

講習は毎回がスライドを見せて、説明するだけだった。講習の修了試験は実技試験だった。講習を修了してから検定試験を受けるまで、二年間は有効なので余裕があった。

光はわからないところは親方に教えてもらった。勉強に一生懸命になるなんて初めてだった。

二年の有効期限ぎりぎりに、三級の検定試験を受けることができた。思いがけず合格することができた。

それから二年が過ぎた。ほとんどの仕事は親方が任せてくれるようになっていた。

十二月のころ、親方に呼ばれて事務室に入ると、おかみさ

んもいて、いつもと雰囲気が違っているような気がした。椅子に座らせられた。

「よく働いてもらったけど、今年いっぱいまで工場を閉めることにした。おれも年だしね、家内も体がこうだし、ようやく決心したんだ。いつかこういう時が来るとは思っていたんだが、なかなか決心がつかなくて。子どもたちには、だいぶ前から、もうやめたらといわれていたんだ。これから長男のところまで、のんびりして、長生きするさ」

こう言って親方は笑ったけど、寂しそうだった。隣でおかみさんは、涙を拭いている。

「自動車は、これからまだまだ伸びるから、頑張りなさい」と、親方にいわれた。

突然のことではびつくりした。

光は二十一歳になっていた。修理工として、自動車販売会社に就職が決まった。年が明けて初出勤の日であった。

「整備士として採用だったけど、君にはセールスをやってみようことになった。いいね」

突然、課長にいわれて驚いた。首を激しく横に振っていた。光には絶対出来ない仕事だ。

「きみ、うちはね、車を売って成り立っている会社なんだ。工場は看板にも書いてあるように『サービスマ工場』なんだよ。車を買ってくれた人へのサービスをすると、工場は。わかるだ

ろ」

不快感がいい方に出ていた。

なんといわれても、セールスではできない。

「どうして」と聞かれたが、なにもいえなかった。お前はおかしなやつだと、ののしられた。

「つ、つ、勤まりませ……から」

深々と頭を下げると、逃げるように玄関を出た。後ろから目が追いかけてきた。

その日の夕刊の広告で、自動車学校の「修理工募集」を見つけた。ここなら、セールスと違って、人と接することは少ないだろうと、次の日面接に行った。すぐ採用になって、その日から働いた。

工場には七十過ぎのお爺さんがいた。山田さんといった。白髪頭で腰が少し曲がっている。工場はこの人だけだった。三日前まで若い人がいたそうだが、やめていったという。この仕事は、タイヤ交換、エンジンの故障の修理、ブレーキの調整などが主で作業は難しくないといった。

それでも、教習に使う車はほとんど中古車なので、修理は簡単でも故障が多くて、けつこう忙しいという。新しい車も数台あるが、これは検定試験前の教習車や、検定試験用に使っているという。

仕事はすぐに慣れた。光にとって、落ち着いた生活が続いた。

三か月ほど経ったとき、校長に呼ばれた。

「頼みたいことがあって来てもらったのです。夜の部の『構造の講義』をやってもらいたい。工場の山田さんにやってもらっていたんだが、昼も夜も、しかも毎日だったので、体にもきつくなってきたようですね。あなたに『夜の部』を受け持ってもらいたいと、山田さんから申し出もあって、来てもらったんです。やってくれますね」

「い、いや……」

こういつて立ち上がろうとした。

「きみ、きみ、何か困ることでも……。まあ、座って……」

校長は慌てている。

「で、できません」

「えっ、それはどうして？」

校長は不思議そうな顔をしている。光は体を固くして、じっとしていた。

「君の持つてる資格なら、構造の講義なんて簡単でしょう。それなのに？」

黙っていた。

「なにか、理由があるなら、話して。山田さんのことは、わかってくれるよね」

うなずいた。

「それなら、ひとつ頼むよ。いずれは山田さんの担当している講義は、全部あなたにお願いすることになると思いますよ」

こうまでいわれているのに、どうにもならない。じっとしていた。

「じゃ、よく考えてから返事を聞かせてください」

校長は、こういつて窓の方に目を向けた。ほっとして、部屋を出た。

工場にもどると、山田さんが作業の手を止めて、笑顔で寄ってきた。

「講義のこと、校長にいわれたべ。わたしからも頼むよ」

応えられなかった。山田さんの事情もわかるし、校長のいうこともわかる。それに応えられない。情けなかった。

光の顔つきでわかったのか、

「運転の指導員はなん十人もいるけど、みんな運転手上がりだね。車の知識はあるけど、構造の講義となるとね。その点、君は資格もあるし、うってつけなんだよ。頑張ってやってくれないか。わたしからも頼むよ」

黙っていた。山田さんは困惑しているのがわかった。

「こ、こ、……やめ……」

「えっ……、なにも、やめなくても」

山田さんは目を丸くしている。

「講義のことで？ 困るなあー。悪いことしたみたいで」
沈黙が続いた。

「ところで、いくとこあるのかい？」

首を振った。

帰って夕刊の広告を見たけど、修理工の募集はなかった。母にはやめることを話せなかった。こんなことを繰り返しているので、「おまえは我慢することができない」と、泣かれたことがある。

翌日出勤すると、山田さんがいつもより早く来ていた。

「新しい自動車教習所ができる話、聞いてるか」
首を振る。

「そこで車の修理ができる人を探してるんだ。よかつたら、そこに話してやつてもいいけど」

「お、お願い……」
とだけいって、片手を顔の高さに上げて頭を下げた。

「それじゃ、すぐ電話してみる」
机上の受話器を取って、なにか話していた。

「まだ決まってなくてよかつたよ。君と話したいって。いいかい」
「い」

光はうなずいた。
昼休みにその人が来た。いつも顔を見ている中年の指導員だった。

その人のいうには、最初は整備工場といっても、車一台が入る小屋だそうだ。軌道にのってきたら、車が二台くらい入る大きさにしたい。待遇も、（二）と同じにするといいし、来月からと

始めるそうだ。ここをやめても、すぐに勤められると聞いて、母には話さなくていい。

移ったところは、函館東自動車教習所といった。営業開始の日、生徒は少なかつたが、それぞれの指導員の知り合いを集めたみたいだ。自動車学校と同じで、車はほとんどが中古車だった。故障が多くて、結構忙しい。おかしなやつと思うかもしれないが、光は誰にも話しかけられないので安心していられた。

ここにきて早くも三年たつた。

練習生も増えた。工場も車が二台入れるような大きさになり、土間をコンクリートにしてもらつたので、作業はうんとしやすくなつた。

最近になって所内では公安委員会認定の話が出ていた。

ある日、所長に呼ばれた。部屋に入るなり、

「いま、公安委員会に出す書類を作っているところだね。来てもらったのは、じつはあなたに『構造の指導員』になってもらいたいと思つてね」

とたんに体が硬くなつた。自動車学校でのことがよみがえってきた。

「そ、それは……」

「書類に名前だけでも使わせてもらいたいんだ。なんといつても、整備の資格を持つてるから、役所にも説得力があるんでね」
黙っていた。

「名前を使うのは、いいよね」

と念をおされた。仕方なくうなずいて、部屋を出ようとした。

「この際、講義も引き受けてもらえないかな。自動車学校のこと、山田さんから聞いていたけど、君のためにもなることだし……」

光はドアに手をかけた。

「いい返事を、待っていていいよね」

ことばが背後から追いかけてきた。

工場にもどってソファーに体を投げ出した。また、やめることになると考えたら、母の顔が浮かんできた。

その晩、布団に入っても眠れなかった。やめれば書類のことでも迷惑をかけることになる。そう思うと、今までのようにやめるわけにはいかない。責任を感じてしまう。

今度だけは講義をやってみてから……。そう考えても、決心がつかない。やっぱり、やるしかないか。やってみて、それから進退を決めよう。考え悩んで、夕べはほとんど眠れなかった。

出勤すると、すぐ構造のテキストを手を取った。目次を見てからページをめくってみる。五年前に運転免許を取った時と内容は少しも変わっていないようだ。やるしかないか……。光がこんな気持ちになるのは、初めてのことだ。

所長室に入るなり

「やってくれるかい」

といわれて、うなずくと、所長は笑顔になった。

それからというものが、仕事が手につかない。大勢の前で、声が詰まって立ち往生している姿や、生徒たちに笑われている姿が、思い浮かんで消えた。そのたびに、どうしてもやるんだ、やるしかない。と、テキストに目を移した。

失敗したら、教習所の信用にもかかわってくる。やるには、どんな練習をしたらよいのだろう。

講義は夜の七時半からだというのに、朝から落ち着かない。なんども水を飲んだり、トイレに行ったりした。

教室のドアの前に立つと、ドキドキが激しくなる。一生に一度の賭けのようなものだ。思い切つてドアを開けた。ざわついていた教室が一瞬静かになって、一斉に顔が向いてきた。初めて見る顔で、驚いたのだろう。

前に立って、深々と頭を下げた。フツツという笑い声が出た。緊張で舌がもつれた。深く息を吸った。人の前に立って顔を上げていられるなんて、信じられないことだ。

大きく息を吸ってから
「講義をするのは初めてです。途中で黙ってしまうかもしれません。その時は許してください」

こういった。考えていたよりすらすらいえた。落ち着かなくちゃ。教室の空気が柔らかくなったのを感じる。

大きく息を吸ってから、

「今日は、二十三ページの『電気』のところからだと聞いています。始めます」

後ろのドアが開いて三人、駆け込んできた。しゃべるのをやめて見ていた。また、大きく息を吸った。そのあとは、テキストにそってしゃべるだけで、黒板に図を描いたり、用意していた紙を貼って、説明することもできなかった。

予定の範囲の終わりまでいって、時計を見ると、まだ八時四十分だった。終了の九時には二十分もある。また、大きく息を吸っていた。

「これで、終わります」

深々と頭を下げると、歓声が上がった。早く終わった喜びのようだった。卓上に置いてあった、出席カードに印を押すと、手でに帰っていった。

誰もいなくなった椅子に腰を下ろして、しばしばんやりしていた。できたという充実感もなく、満たされない気持ちだけが残った。疲れた。

夜道の街灯が涙でにじんで見えた。終わったのはいいが、講義は始めたばかりだ。立ち往生する場面はなかったが、一度止まったら詰まってい出せなくなることはわかっていた。夢中で早口だった。不思議と大きく息を吸い込むことだけはできていた。

布団の中で考えた。講義のときなんでも深呼吸をしていたのは、五、六年生のとき担任だった山田先生に、発声練習をさせら

れたとき、いい始めには必ず深呼吸させられたのが、体が覚えていたのだろうか。

高校の勉強は、漁師をやった時も退学をしないで、細々と続けていた。自動車教習所は、仕事が終わるのが毎日七時半。仕事場から、科目試験の会場の定時制高校まで、歩いて四十分くらいかかった。担当の先生は教頭先生で授業は持っていないから、「八時まで来たら試験は受けられる」と、いってくれたので光は八時まで着こうと、いつも暗い道を走った。

試験はいつも職員室で、空いている先生たちの机を使わせてもらった。勉強嫌いの光には、こんなに一生懸命になるなんて、思いもよらないことだ。

卒業のときが近づくと、札幌の本校の先生と定時制の担当の先生との面接があった。

担当の先生に聞かれた。

「君は一生懸命だったけど、なにかやりたいことでもあるのか
い」

なにを、どう答えたらいいのか。少し間をおいてから、
「大学も通信教育で、教員になれるでしょうか」

口に出ってしまった。こんなことを言うなんて驚いた。

「卒業したら、なれるよ。大学にはスクーリングがあるからね。君の職場は忙しそうだから、無理かな。夏休みの間四回行くというのと、大学四年のうち一年通学するというのもあるけど……。そうだ、学校に勤めると夏休みがあるから、スクーリングは

行ける。学校の事務職になったらどうかね」

「どうしたらなれますか」

「五月か六月に採用試験があったような気がする。中級試験だけ」

「短大卒の人が受けるのですね」

「いや、短大卒じゃなくても、二十歳になってたら受けることができる」

「それでも……」

そんな大それたことは、いくらなんでも……。

「やってみなくちゃわからない。あまり準備期間はないけど、試してみたら。確かめて、後で知らせるから」

「よろしくお願いします」

スラスラことばが出て、驚いた。

「……教員になれるでしょうか」

まったく、身の程知らずとはこのことだ。

このことがあってから、小学校五、六年の二年間担任だった山田先生のことをよく思い出した。

「放課後残れ」といわれて逃げ帰った。なん度目かに、とうとう首根っこをつかまれて、引き戻された。暴れると先生の手に力が入ってくる。

「イデデデー」

「いうことを聞けば、力を緩めてやる」

無理やり職員室に引つ張られていく。椅子に座らせられ、五十音の発声練習をさせられた。声を出す前には必ず深呼吸させられた。ほかの先生たちもにやにや見ているので、恥ずかしかった。

それが終わると、先生がオルガンを弾いて、歌を歌わせられた。歌うのはドモラないからいいという。算数の勉強もやらされた。一年生の足し算からだ。いつも職員室だったのは、先生は校長先生だったから職員室を開けられないからだっただろう。それでも光のドモリは治らなかつた。

中学校に行くようになってからも、先生は「どうしているか」といって時々訪ねてきた。たまには「近くに来たから」と、奥さんまで来ることもあった。

事務職の採用試験は、予想に反して合格してしまった。

一番下の弟も高校を卒業して就職が決まったこともあって、事務職への転職は、母も反対しなかつた。

この時、光はどうせ生きるなら、山田先生のように生きてみたい。そう思ってしまった。

光が家を出ると、母はひとり暮らしだった。

郷里の学校に転勤が決まったことを母に知らせると、

「また、あの家で暮らせるとは思っていなかった」と、喜んでくれているようだった。

ひと足先に郷里の家に引越して、掃除や片づけをしていた。母の様子を見て、近所の人がつぎつぎ来てくれて

「また、ここで暮らすことになったから」

という、

「母さんのところで、学校の先生になった人いるって聞いたけど、なん番目の人だべが」

くる人、会う人に聞かれるという。

「一番目だえ」

「……といったら、あのものもいわねワラシがい？」

「学校も、休んでばかりいだ人がのー」

なんて、いわれるそう。

なかには、「高校にもいがねで、漁師やってだ人ががい。どんな魔法使ったんだべのー」という人もいたそう。

父が亡くなったころ、光は近所の人たちが、噂しているのを耳にした。

「男の子が三人もいだら、ひとりぐらいヤクザな人間出ても不思議ね。川口の家だら、やっぱし長男の光だべな」

「あー、やっぱり、あいつに間違いなべも」だって……。

「それにしても、あの光がな。父親が早く死んだから、ひとに負けていられねと思つて、頑張ったんだべも。それも、学校の先生とはな。わがらねもんだ」

こういつて不思議がる人もいた。

光は「ひとに負けられね」なんて、一度たつて思つたことがな

い。なにをやってもダメだったし、舟酔いでイソ舟にも人とのられないばかりか、暗くなると外にも出れない度胸なしかったから、人と比べるなんてとんでもない。ただ、「講義」をやったころから、欠点を少しでも直そうと心がけてきたそう。

終わり

小説 入選

カノツサ風地政学講座 「ロシアのウクライナ侵攻」 外山 聖武

第1部 カノツサ風地政学講座 「ロシアのウクライナ侵攻」

これは、前世紀末バブルの九〇年代に、歴史を現代的なテーマで大胆にパロディーかつデフォルメし、深夜の放送でありながら狂信的なファンを獲得したかの伝説上のTV番組「カノツサの屈辱」をオマージュして作られた作品である。なお当然ながら、現実社会を題材にしている関係上、実在の人名国名が出ているが、あくまでもフィクションであることはいままでもない。文中敬称略している。

なお、元ネタである『カノツサの屈辱』は今でも、YOUTUBEにていくつか見ることができ。

また、特に第2部は、小林信彦氏の『発語訓練』『唐獅子株式会社シリーズ』等に大いにインスパイアされて作成した。

やあ、皆さん、私の研究室へようこそ。『北海道ラーメン三國志』（平成十九年、市民文芸47集）で北海道のラーメンの歴史について研究しました。今回は、『ロシアはなぜウクライナに攻め込んだか』その意味を地政学的見地から考えてみようと思えます。その国の政治行動は、周辺国との地域的にかかわりによっ

て規定される。それを、アニメ『ドラえもん』の世界、その登場人物の人間関係に仮託して考えてみましょう。

登場人物

ロシア（ウラジーミル・プーチン大統領）…国土の広いロシアは、人一倍大柄な剛田武ジャイアンに見立てる（例える）ことができます。（映画ではよきリーダーシップを発揮するが、ここではアニメのジャイアン像そのままの力による支配者となります。）納豆が嫌いであることにします。寒冷地帯なので、ウオツカ並みに体の温まる激辛なジャワカレー同盟を主宰しています。

剛田商店：大正昭和時代の田舎のいわゆる「下よらず屋」で、木炭灯油プロパンなどの燃料や米などの穀類、塩醬油乾物類、煙草酒なども扱う。過疎地の集落では、集落の唯一の店として、日用品雑貨や文房具雑誌も扱う。コンビニのルーツは日本であった（笑）。

中国（習近平国家首席…社会主義の魁（さきがけ）ソビエト・ロシア、そして二番手としての中国なので、妹のジャイ子に見立てよう。マンガ家志望である。特にミルンの『クマのプーさん』

が得意。蜂蜜入りのハニーカレーが好きである。

EU (ヨーロッパ連合) : **源静香**・**しずか** : 西ヨーロッパ文化は世界標準となっている。このグループの紅一点であるしずかちゃんは、華やかな魅力 (オーラ) だだ漏れで**求心力**を發揮し、男の子みなのおこがれの的である。アイドルとしてカリスマ性がある。同じにアニメの紅一点のマドンナである『クレしん』の**ネネ**ちゃんは、何かというと「リアルままごと」を強要してくるので、**遠心力**で男の子は煙たがっている。アニメでもヒロインの扱いの違いがあります。

「米」飯の上に乗せる納豆が好きで、納豆同盟を結成している。アニメではジャイアンに敵対してはいないが、時にジャイアン**の強権発動に眉を顰** (ひそ) めることもある。

ポーランドなど**東欧の国々** : 西欧諸国に関心があるけれど、ロシアに隣接している東欧の国々の地政学的位置は、ちょうど人間関係でみると、**野比のび太に見立てる**ことができよう。しずかラブののび太は、「どこでもドア」で源家の浴室にしばしば間違えたふりで出てしまうのはお約束である。

ウクライナ (ウオロディミル・ゼレンスキー大統領) は、かつてソビエト連邦の第2の構成国で、ロシアと同じスラブ民族である。ジャイアンの弟分としてのコミカルな動きの骨川スネ夫に見立てよう。

フィンランド・**スウェーデン** : 登場回数は少ないが、頭のいい**出木杉君**は、気配りの人。バルト海で隣接するロシアを意識し

て、あまり刺激しないようにと納豆同盟には入っていません。

国連 : **ドラえもん** 困ったときの**ドラえもん**。様々なアイテムを隠し持っている。のび太が暴走させた道具によるトラブルを、しかたがないなあと解決する番組の切り札である。

1. 戦後史

ヨーロッパを縦(南北)に3分割します。西欧文化圏とロシア文化圏、その間には生まれた東欧諸国は、両方の顔をうかがう**のび太**に例えることができます。

第二次大戦は、西欧諸国とナチスドイツとソ連が東欧・中近東地域を争った戦いと考えられます。その結果、東西の緩衝地帯であった東欧諸国はソ連の衛星国となりました。ウクライナ・スネ夫はソ連の一国として、スラブ一家のNo.2として、**ジャイアン**を補佐します。ジャイアンの忠実な部下の**スネ夫**と、いやや従うの**び太**という構図が出来上がりました。

冷戦である。**しずか**は納豆が好きで、「米」飯の協力で納豆 (NATO) 同盟 (北大西洋条約機構) を作る。それに対してジャイアンロシアは (ワル) ジャワカレー 同盟 (ワルシャワ条約機構) を結成し、のび太を巻き込み対抗する。特に辛さを**星**の数で考えたのが**スターリン**である。

冷戦時代に、朝鮮では熱い戦争となった。キムチをカレーに添えるか単品で味わうべきかという朝鮮(漬け)戦争 (1969-73) である。板門店食堂で話し合いが行われているが、いまだに終

戦協定は結ばれていない。引き分けといったところか。

おおむね70年代までは、カレー同盟が優勢であった。ベトナム民主共和国(北ベトナム)は、ベトナム共和国(南ベトナム)を吸収し、東欧のび太に対し、ジャイアンは(ベルリンの)壁を作る。ハンガリー動乱、プラハの春などの動きは、バシツとジャイアンから焼き(カレー軍)が入った。

ゴルビー(ゴルバチョフ)が力によるゴリ押しをやめ、西欧資本主義国と社会主義国の融和を図る「欧州共通の家構想」、つまり納豆とカレーの融合した「納豆カレー」を提唱するという大胆な**新思考(外交)改革**(ペレストロイカ)政策で、冷戦終結をする。しかし、そのままタガが外れたようにソ連が崩壊し、のび太・東欧諸国がしずかのもとへ走った。結果、納豆同盟の勢力が東に拡大した。

納豆同盟の拡大に対抗して、2000年前後から中国とロシアが中心となって、**上海(カニII club クラブ club)協力機構(SCO)**を発足させた。西アジアのアラブの国々からインド・パキスタン、そしてASEANの国まで**足を広げた国際政治経済組織**である。地政学でいうところのユーラシア大陸のハートランドを長い爪で**鷲つかみ**にした形である。

2. 現代史 プーチンの我が闘争

グルジアはロシアと縁を切り、国名もロシア語から英語読み
のジョージアと改め西側接近を図る。いよいよNATO(納豆同盟)の拡大に追い詰められたロシアは、よもやと思つたウクラ

イナ・スネ夫の裏切りに気づく。ソ連時代、欧州地域ではロシアに次ぐ第2位の領域をしめたウクライナ、同じスラブ民族の同胞。まさしく兄弟である。「**特別軍事作戦**」。これはDVというよりスラブ一家の中の躰(しつけ)である。ロシアの意識は「家庭問題」である。だから、何と言おうと「戦争」ではない。ウクライナに攻め込んだ。静香たちはスネ夫を応援している。EUのウクライナ支援は、当然「内政干渉」ととらえる。

「**経済制裁**」として、剛田商店不買運動を始めた。しかし静香たちはジャイアンの剛田商店から燃料(天然ガス・原油)や小麦などの食糧を買っているので、品不足から物価が上昇している。諸物価の値上がり、西欧の国民はどこまで我慢ができるだろうか。イギリスは首相が辞職に追い込まれ、イタリアも政権交代。ドイツもフランスも軒並み政府の支持率を落とし、ウクライナにかまつていられなくなってきた。『資源を握るものが強い』という地政学的現実、西欧諸国は腰が引けてきた。

ロシアに隣接する出木杉フィンランドは、スウェーデンとともに、スネ夫のように侵略されてはたまらないとして、恐れをなして五月に納豆同盟に加盟申請を出した。しかし、スウェーデンでは九月に政権交代となって政局は混乱してきた。

ジャイアンとジャイ子は社会主義の兄妹の国であるが、今回のウクライナ侵攻については微妙な関係である。納豆同盟の拡大にプーチンは、冬季オリンピックを名目に、ウクライナ侵攻直前に北京を訪問し、クマのプーさんに似ているという噂の習

近平とプーチン連携を図った。当然、ウクライナ侵攻については情報交換もなされたであろう。

『敵の敵は味方』という冷徹な地政学的原則がある。納豆同盟の土台にある「米」国は、中国にとつても台湾をめぐって対立する関係である。プーチン連携は、確かに欧米の対ロシア経済制裁に非協力という中国の立場で示された。しかし、軍事的な支援をするところまでには態度を明らかにしてはいない。世界戦略として「不凍港」を求めて南下したいロシア、特に黒海沿岸は手放せない。一方、中国は「一带一路政策」。ロシアの足元をすくうがごとくシルクロード沿いのイスラム諸国群を帯のように横断しての経済進出をし、ウクライナを経て東欧諸国から西欧への道を開こうとしている。特に軍事的にはウクライナ製の武器が多い。中国の誇る空母「遼寧」は、実はウクライナのスクラップになりそうだった空母のリスペア（再生古船）である。その他の銃器や戦闘機も手先の器用なスネ夫から技術援助して製作しているものが多い。ロシアと中国の戦略はウクライナで交差してしまった。今回のウクライナ侵攻については、ジャイ子中国は、兄ちゃんに逆らいたくないが、スネ夫はジャイ子のマンガを高く評価してくれているし、貿易面でもしずかたちとは今まで通り仲良くしたい。結局、様子見をしている状態といえよう。プーチン連携は円滑には機能していないようだ。

むしろ朝鮮民主主義人民共和国は、いち早く「ルガンスク人民共和国」 「ドネツク人民共和国」を承認するなどロシア支持を

明確にしている。ロシアからの不足してきた弾薬などの提供要望を受け入れ、場合によっては兵士の派遣にも応じそうである。欧米のみならず、最近では中国ともうまくいっていないので、ロシア接近を図っていると考えられる。

インドもカレー仲間間で表立ってロシアを支持しないが、西側諸国の経済封鎖には加わっていない。第三世界の国という立ち位置を保っていた。

地政学的にインドは中国とチベット、カシミールなどで争っている。上海カニクラブ仲間としても、中印は同床異夢である。特にインドは、西太平洋地域での中国包囲網である「クワッド (QUAD)」にも参加し、日米豪との連携を深めている。

スラブ三兄弟の一つ、ベラルーシの立ち位置も微妙である。当然参戦するかと思われたが、ロシア軍のベラルーシ経由での進撃は認めつつも、直接参戦はためらっている。

オスマントルコ帝国の中世以降の歴史は、東欧地域や内海であった黒海沿岸を、度重なる西欧の国々に奪われた歴史であった。特にロシアには、内海であった黒海の北岸を奪われた歴史である。第二次大戦後は、トルコ共和国としていち早く納豆同盟に加わり、ソ連とロシアの南下策に備えた。ロシアによるクリミア侵攻後は、ウクライナを支援し、提供したドローン「バイラクタル」はロシアの戦車に対し華々しい戦果を挙げた。トルコは、今は、ロシアとウクライナの仲介の労を取っているが、本音はロシアよりである。上海カニクラブにも参加申請をしてい

る。フィンランドなどの納豆同盟加盟に反対し、陰で交換条件を飲ませ、ウクライナの納豆加盟にも消極的である。

ロシアプーチンは、納豆勢力の拡大に危機感を持っている。「ロシアしか勝たん」。どこに落としどころがあるだろうか。

国連ドラえもんとしては平和のための新しい道具を探しているが、見つからないで手をこまねいている。アニメと違って、常任理事国のジャイアン・ジャイ子兄妹を無視できないでいる。

ウクライナ情勢で大活躍している兵器がドローンである。日本ではドローンというと4つか6つの回転翼の民生用の印象で、ウクライナでも偵察とか爆弾投下などに活躍している。ドローンの画面を見ながら隠れている戦車や逃げまどうロシア兵士を攻撃する。殺人の意識はなくなり、まさしくゲーム感覚の画面がYouTubeにアップされ全世界に発信されている。都市攻撃のドローンは、トルコ製もイラン製も固定翼なので、大型で、無人攻撃機といったほうがいいだろう。

次にウクライナのゼレンスキー大統領の服装から、リーダー像ということを考えてみたいと思います。

社会学者のマックス・ウェーバーが、人が人に従うのはなぜかということ、**支配の三類型**ということを述べています。

一 **カリスマ的支配**。その人のたぐいまれな資質が持つ求心力で人々が従う。政治の変革期には、人々の英雄待望があり、「**世界精神が具現したような人物**」（ヘーゲル）が現れる。例えば、

代表的な人物としては、革命後の混乱したフランスをまとめたナポレオン・ボナパルト、日本では多彩な武将を意のままに駆使し、戦国時代を終わらせるといって「天下布武」の志半ばにして横死した織田信長が考えられる。仲間内には強いオーラを放つが、敵対する周囲からはヒールキヤラ（悪役）となる。ヒットラーもナチスドイツ内では圧倒的支持を得ていた。ナポレオンも今でもフランスでは人気があるが、侵略された周辺国では圧制者にほかならない。

二 **伝統的支配**。中世的身分社会。代々支配者の家柄だから、というもの。西洋では、**王権神授説**。日本の天皇制がそれにあたるでしょう。個人の資質より血筋が支配を正統化します。いまでも話題の政治家の家柄、二世三世議員は、選挙地盤の人にとつてはこれに当たるのでしょうか。

三 **合法的支配**。選挙などで、合法的に支配者に選ばれたからという**社会契約説**の考えです。世界の多くの国の支配の仕組みです。

まず、ロシアのプーチン大統領は、確かに選挙という民主的手続きによって選ばれています。合法的支配といえます。しかし、内実は情報操作、プロバガンダで国内世論を操作し、国民をマインドコントロールしているとのこと。反対派に対しては不審な事故死で粛清しているといえます。三類型の外にある強権的支配、さしずめ力で従わせるジャイアンの支配が実態

といえるかもしれませんが。嫌っているはずの「ナチズム」的行動をして、自らがヒットラーになぞられても仕方ない存在に、プーチン自身がなりつつあるということに、彼は気づいているのでしょうか？

表面上カリスマ性を發揮して、ソ連解体後の社会的経済的に破綻したロシアを再生させた英雄となっています。「男は黙って(Sビール)」というのがロシア人らしき。プーチンは、笑顔を見せず、常にスーツでクールな男らしさを演出しています。ナポレオンやヒットラーのように国内的には英雄でも、外部評価では侵略者となる二面性は、特に国際社会ではままあることです。遠くない将来、プーチンの評価は、世界的に英雄となるか、ヒットラーとならぶヒールキャラという扱いになるか、どちらでしょうか？

凶らずも、ナポレオンもヒットラーもプーチンも同時代の同国人の中では、小柄なのが共通しています。何かあるのでしょうか？

それに対して、ウクライナのゼレンスキー大統領は、Tシャツに無精ひげで人間味を出しています。19年今から3年前に政治腐敗で東欧の最貧国とまでいわれたウクライナの大統領になったのは、政治経験のない喜劇俳優出身のゼレンスキーです。ダークホース的に大統領に滑り込んだが、政治的力は未知数で、70パーセントを越えた当選当時の支持率も大滑降し、ロシアの侵攻前はかなり低迷していたといえます。だから、プーチ

ンも短期決戦を確信していたし、国際的にもウクライナの早期の敗北で、政権放棄さえ予想していました。ちよどキャラ的にスネ夫そのままの印象を持っていたのです。ちよとジャイアンに反抗したふりをして、すぐ日和(ひよ)るスネ夫です。タリバンの反攻にいち早く国外逃亡したアフガニスタンのアシュラフ・ガニー大統領のように。

しかし、ゼレンスキーは、ウクライナ国民を見捨てない。首都キーウ(キエフ)をキープし離れないと宣言する。そして情報発信に努める。国内のみならず、むしろ諸外国に積極的に接触を持ち情報発信し支援を求めた。その時に、非常時を体現するように、略式軍服、またはモスグリーンのTシャツ・ちよと垂れの無精ひげ姿で現れた。日本でも災害が起きたときに、現地の上長が必要もないのに防災服ヘルメット着用でインタビュに出るのと同じだが、切迫感が違う。場合によっては、ロシアのスパイパーに狙われ、その場所をミサイルで爆撃破壊し、ウクライナ首脳が一網打尽に全滅させられるかもしれないのに、SO S情報発信し続ける。

各国議会でのオンライン演説でも、スーツでなかった。はじめは無礼だとの声も散見したが、今ではウクライナの切実な状況を表し、Tシャツ姿がオーラさえ放ち、諸外国に支援の輪を広げている。彼のモスグリーンのTシャツのレプリカは日本でもネット上で多種販売されている。

国家が危機的状態の時に、英雄の出現を人々は望む。フラン

ス革命後の混乱で、神聖ローマ帝国(オーストリア帝国)などの反革命の列国軍隊の侵攻に、ラ・マルセイエーズで集まった義勇軍。そして先頭に立って戦うナポレオンの連戦連勝の活躍である。一気に皇帝の地位にまで駆け上がる。

まさに現在のウクライナ。ウオロディミル・ゼレンスキースネ夫が、状況に磨かれ英雄となった。驚いて見るほどに、今ではオラを放ちカリスマ性も帯びてきた。世界的に英雄となり、今年のノーベル平和賞にノミネートされるのではないかな。

彼の姿から学ぶべきものを考えたいと思います。

それは、国民とともに率先して困難に立ち向かう姿勢が、このTシャツ姿に象徴されていると考えられます。スーツ姿や勲章を付けた正装の軍服姿でネットに出た姿を想像してみましよう。国際的な支援の広がり、ここまで広がらなかったのではないかなと思います。

指導者に求められるのは、見せかけでなく『国民の僕』(彼の主演作品)として、誠実に事態に立ち向かう姿勢だということがわかります。

さて、このようにウクライナをめぐる諸国の動きと、二人の指導者の人物像を考察してみました。戦争続きの二〇世紀に代わり、二十一世紀は国際協調の平和な時代と思われたのに、このような事態になり、今もウクライナでは戦火が途絶えていません。これからも状況の推移に注目し、平和実現のために一人ひとりができ

ることを模索していきたいものです。

では、また、いつの日かこの紙面でお会いしましょう。

2022. 9. 21

第2部 「ロシアしか勝たん！これがロシアの正義だ！」

ウラジーミル・プーチン大統領 プラウダ独占インタビュー

【モスクワ共同】2022. 9. 26

わが栄光のロシアよ

俺はジャイアン、One for all, all for one (レニンの言葉)お前のものは俺のもの、俺のものは俺のもの。違ったロシアのもの。(てへて)

社会主義はみんなで仲良くカレーを分け合おうという人類の理想的平等社会の実現、華麗(カレ)なる国家構想であった。

わが町の東欧町公園に攻め込んだ隣町の半グレ少年団ナッツ(NUT)・独(D)ーナッツ Do Naziism ナチズム化・フアンクラブを、西欧静香やポーランドなど東欧のび太たちと殲滅(せんめつ)した。特に激戦となったレニングラードでは、たくさんの犠牲者を出しながら防衛したのは俺だ。戦後は、のび太たちを仲間に取り入れ、同じスラブ民族のウクライナスネ夫は、俺の組織したソビエト連邦のNO. 2に組み込んだ。わが心の友スネ夫である。ボルシチなどロシア料理のルーツはウクライナが多い。手先が器用なスネ夫はカレーの具材を(映画『ひまわり』)油で炒める黒海名物の「黒(こく)まるカレー」を作っ

た。キーウイとクリミヤを入れたところは遊び(アソブ)海(アソブ)である。ソ連の軍需産業はスネ夫にかなり任せていた。(実は、黒海艦隊の旗艦(ミサイル巡洋艦)「モスクワ」は、ウクライナの造船所で造ったものだ。だから、どこを刺せば撃沈できるかわかっていたんだ。だから、たった2発で沈没した。)

しずか西欧は、ジャイアンの横暴に反抗するという組織を作った。確かにわがマンガ仲間のマドンナ静香、華やかなオーラを放つ西欧文明、ロシア帝国の母なるエカチエリーナ女帝もあこがれていたものだ。しかし、ロシアはロシア。負けてなるものか。

そもそもアウトドアの定番は、カレーライスに決まっている。おれの国ロシアは寒い。辛いからこそ辛いライスだ。激辛のジャワカレーが最適だ。象徴としてのウクライナの国旗は、鮮やかな青空の下に黄色いカレーの色である。

それに対抗して、静香たちは白ごはんに納豆という納豆同盟を組織した。どうして明るい青空のもと、ねばねばした納豆ご飯なんだ。想像するだにおぞましい。せめてBBQ(バーベキュー)にカレーではないか。俺の(ワル)ジャワカレー同盟(ワルジャワ条約機構)に対抗し、納豆(NATO)同盟(北大西洋条約機構)なんていうのを組織した。白「米」の上に散らばる大豆の粒粒。細い粘糸でUNITED(結びつけた)だけの西欧の国々。結束が弱い。だからハンガリーやトルコのような動きが許されるのだ。ハンガリーは燃料をロシアに依存している。オルバー

ン首相は俺のダチだ。だから、納豆の方針に異を唱えて経済制裁にも加わらない。

それに対して、肉もジャガイモもニンジンも玉ねぎもひまわり油で炒めて、カレーに混然一体となった状態こそ諸民族融和の姿である。結束が固いはずだった。カレーは「米」に頼らず、スープカレーにもカレーシチューにもなる。カレーパンなんていうバリエーションもある。西欧諸国も、いつまでも「米」国依存ではないだろうに。

しばしば、のび太が静香のもとに忍び込む。静香ラブに一寸なのび太だから仕方ない。ノゾキ穴をふさいでしまえ。(ベルリンの)壁を作つて、逃げ出さないようにした。のび太グループのハンガリー動乱、プラハの春(チェコスロバキア)などで静香グループに接近しようとしたから、バシッとお仕置きをし、ドブ(ちえく書記(=プラハの春の時のチェコスロバキア共産党の指導者)に落とす)した。

朝鮮では、カレーライスに福神つけの代わりにキムチを入れる(キムイルソン金日成)率いるグループと、キムチを単品で(おんりー)でごはんとともに味わう(相伴シショウバン)(李承晩)グループが争う。これを朝鮮つけ戦争という。朝鮮民主主義人民共和国の国旗が赤い金星(きんせい)一つなのは、永遠に続く金王朝を象徴しているからだ。小国ながらに、米国相手に「金星(きんぼし)」を挙ようという心意気だ。

ベトナムでも戦争が起きたが、インドネシア(ジャワ)が近い

ので、わがジャワカレー同盟で統一された。ベトナムについて放置（ホーチミン）していたら調子に乗って、同じに黄色いからとカボチャをカレーに入れようとした。甘くなりすぎるのでカーボジア侵攻は失敗した。調子に乗るものではない。

四川料理など激辛仲間の中国とは、初めはうまくいっていたが、スターの数の多さで辛さを表す中国と、少なさを高級で、星1つは二等2つは二等と逆な考え方のソ連とは、どうもずれが生まれる。ソ連の軍用機には赤い星が描かれ、国旗は、真っ赤な旗に黄色い星、スプーンとフォークを描いた。それに対して、中国は大きい星に四つもの小さな星を記した。巨星中国に従う東西南北4つの劣った諸民族の**東夷・南蛮・西戎・北狄**（とういなんばんせいじゅうほくてき）、つまり世界を統べる中国を意味するらしい。ロシアの衛星国に過ぎないのに、だから自己中の**中華思想**には困ったものだ。ちなみに米国の星は白いから「米粒」である。

スターリンの死後、星によるランク付けをやめたソ連の振るスター（リン）（フルシチョフ）に対して、中国は五つ星を大事にして、一時、中ソ論争として仲が悪くなった。そこで、フルシチョフとUSA（ウサ）ぎのケネディーは手を握り、冷戦から緊張緩和となった。ソ連としてもアメリカに張り合つての軍備拡張の背のびについて行けなくなったのだ。穏やかな日々だったが、宇宙開発競争は続き、わがソ連がガガーリンで宇宙へ一番乗りをすると、USA（ギ）はふるさと月にアポロ11号で一番

乗りをした。でも今は争っても仕方ないので、国際宇宙ステーション（ISS）で協力している。連絡ロケットはロシアが受け持っている。俺が抜けたらどうなることか。

カレーを押し付けるソ連に対して、北京南京広東四川を代表とする四大中国料理で多彩な食文化を誇る**毛沢（東）**は「モウタクさんだ」と反旗を翻し、海鮮料理の「中華飯」を開発した。米飯中華接近という。肉も入れよとニクソンがいつてきたけど、水門（ウォーターゲート）事件で水に流れた。USA（うさ）ぎの民主主義なんて、まあそんなものだろう。

プーチン 我が闘争 2月24日「特別軍事作戦」

ロシアは強くなければならない。

ゴルバチョフが強権的な支配のゴリ押しをやめ、EUとソ連の共存を図るといふ**「欧州共通の家構想」**とともに、**納豆カレー**という**新思考（外交）**（ヘレストロイカ）改革を提唱した。確かに因縁の不倶戴天の対立である**納豆同盟とカレー同盟を融合した納豆カレー**という組み合わせは、闘うぞの「ヤルタ（会談）」から**まるやかな世界**を考える「マルタ（会談）」で、冷戦の終結としてふさわしいものであった。初めは、カレーに納豆？不気味だ。食べられるもんじゃやない。しかし、意外と合うのだ。新思考で諸君も試してみたまえ。

納豆カレーの意味するもの。それこそが戦乱のたえなかつたヨーロッパに「共通の家族」という考えを提唱したEUの父ク

ーデンホーフカレルギーの理念と同じじゃないか。ロシアも仲間にといいるところだ。まさにEUの旗、青地に十二の星、これこそが「欧州共通の家」でなかったか。しかし、ソ連は崩壊してしまい、カレー同盟は解散となり、のび太たち東欧の国々は納豆同盟に逃げてしまった。ここがおかしい。納豆同盟は何のために存在か？敵対していたカレー同盟がなくなったのだから、続いて納豆同盟もなくなるはずだろう。ゴルバチョフの見通しの甘さだ。納豆カレーは残念ながら広まらなかった。納豆同盟の仮想敵は、東欧に去られた弱体化したロシアだけか？西欧による仲間外れのロシアいじめでないか。

社会主義では貧しくも生活は保障されていた。しかし崩壊後カレーライスが行き渡らなくなった。カレーなる崩壊さ。

そこでおれの考えたのは、ヨーロッパの田舎と考えられていたロシアを大きくした。ピョートル大帝の大ロシア帝国構想、そしてスターリンの実行力の再現だ。混乱したロシア経済の立て直しを俺は達成した。

ソ連崩壊のどさくさ紛れに「All for Ore」とばかりに公共のものを私物化したオルガルヒ連中がのさばっているから、闇から闇へ葬った。わが師スターリンにならつての不審死という形の粛清だ。KGB（国家保安委員会）出身のおれとしては、スナイパー（狙撃手）組織はおさええている。『同志少女よ。（ロシアの）敵を撃て』（逢坂冬馬）

ロシアはロシアでなければならぬ。納豆同盟が東進してき

た。

カレー同盟（仲間）をこれ以上小さくしてはならない。しかし何と言う事だろう。スネ夫が裏切った。ベラルーシとウクライナは、ロシアとともにスラブ一家の構成員である。特にスネ夫は弟分としてかわいがってきた。ロシアに次ぐヨーロッパ地域でのソ連第2の国土を認め、ソ連政府内でも発言権を認めてきた。さらにソ連の一国でありながら、UN（国連）の加盟国の一国に数えさせた。

確かに8年前にウクライナ（宇克蘭）の中のクリミア半島、「宇中のクリ」を拾った。そもそもソ連崩壊時にウクライナに預けたクリミア半島だ。黒海艦隊の基地をなくすわけにいかない。取りもどしたただけだ。

それがこの裏切りだ。納豆同盟は侵略だ戦争だというが、家庭の中のこと。DVにもならない単なる嫉妬。「特別軍事作戦」として焼きを入れようと、ちよつと脅した。DO（動詞）ナッツ（Donuts）を理由とする聖戦だ。

二月は、ウクライナの肥沃な国土も凍結し、戦車の重さに耐える。短期決戦だ。この時しかない。

もとは喜劇役者による大統領の茶番劇だ。スネ夫は反抗したふり。日本語で何というのだろう。英語でいうところの、「びぶおーぶれつくふあーすと」で、スネ夫だからすぐに「ごめんなさ」といふかと思つたら、意外とゼレンスネ夫はしぶとい。首都陥落で政権放棄のはずが徹底抗戦とは、意外と根性がある。

納豆同盟は武器などを援助している。内政干渉だ。

ロシア大包囲網としての経済制裁で、剛田商店への不買運動を始めた。しかししずかたちは、おれの店剛田商店から燃料(天然ガス・原油)や小麦などの食糧を買っているの、品不足から物価が上昇している。特に脱原発を進めているドイツは、ロシアの天然ガスが入手できなくて電力不足で困っている。フランスの原発電気を買い始めた。地球環境のために自国の原発をなくして、他国の原発電気に依存か?ドイツもこいつもフランスも、うわべだけだ。ノーカーボン脱炭素、CO₂削減。何よりもドイツのシオルツ首相もフランスのマクロン大統領も、「まず**隗より始めよ**」で、「酸化炭素排出をやめよ。呼吸を止めてみる。

諸物価高騰のインフレで、西欧の人民はいつまで我慢できるのだろう。イギリスは首相が辞職に追い込まれたし、ドイツもフランスも軒並み政府の支持率を落とし、政情不安になっている。スウェーデンもイタリアも政権交代してしまった。自業自得といえよう。

俺には世界情勢についての洞察力がある。ファーストネームは伊達じゃない。表面だけではない。世界の**裏地**を見る、**ウラジーム**だ。EU諸国は、剛田商店のお得意さま。燃料食糧を剛田商店で買わないで、どこで仕入れるつもりだろう。表向き、判官びいきというのかな、弱いものの味方をして、ウクライナを救え〜と国際世論を盛り上げたが、一時の気の迷い。すぐ経済的に失速して、ロシア敵視の声が小さくなった。実は、ドイツの

シオルツ首相は、ウクライナからの最新のドイツ製重戦車の供給要請をかたく拒否し、他方俺とは、ロシアの天然ガスは今まで通り売ってほしいといい始めた。日本もサハリンの天然ガス、パイプライン工事をやめるといいながら、後を中国に引き継がれそうになると、いや、これは別とばかりにサハリン2事業継続を言い出す。物事の本質を見る**ことが大事だ。裏を読む。それが外交だ。**

迫る納豆同盟に、おれは、プープーペア、剛田兄妹として手をつ結んだ。中国の習近平は、本人は嫌がついているが、ミルンのプーさんに似ている。俺もそう思う。そして納豆同盟の土台である共通の敵、「米」飯に対抗しようとした。しかし、ジャイ子中国は、兄ちゃんに逆らいたくないし、静香たちとも仲良くしたくて様子見をしている。プープーペアはビュティーペアのようにうまく連携ができていない。ちよつと忝すぎたか。まあ、一路戦略で、俺の足元の中央アジアのイスラム諸国、**スターン国家群。ほら、ウズベキスタンとか何とかスタン、国ついで意味だが、並んでいるじゃないか、ベルト(帯)のように。中国からシルクロード諸国沿いにウクライナ經由イラントルコ、東欧・西欧まで経済進出しようとした。俺の足元を向うなんて油断ならない。納豆同盟主導の経済制裁に不参加だが、武器や兵士を派遣するなどの軍事支援行動はとらないつもりようだ。せっかく冬季オリンピックにかこつけてわざわざ北京にまで出向いて、事前にウクライナ作戦のことを伝え、軍事支援を求めた

が、つれなく様子見を決め込んでいる。習近平は誠意がない。

むしろ、以前から世界の孤児となっている朝鮮民主主義人民共和国が我がロシアの今回の軍事行動に理解を示し、いち早く「ドネツク人民共和国」などを承認した。不足してきた弾薬等も軍事支援してくれそう。兵士も派遣してくれそうである。かわいものだ。金正恩は、まさに「恩」を大事にする男だ。

ここだけの話だが、イランは神風(固定翼自爆型)ドローン「シヤハド」を我が国に提供している。ウクライナのインフラ・ライフラン攻撃に活用している。ジュネーブ条約の文民保護違反だ。USSOつきUSAぎがよく言うよ。ベトナムでの北爆アフガン、イラクでのこと。そもそもヒロシマ・ナガサキの原爆、東京空襲なんかについては、勝者の論理で頼むらむらだ。

インドも本来カレー仲間なので、第三者の立場で、経済制裁に加わっていない。剛田商店の軍事物資のお得意様で、軍装備のほとんどはロシア製だ。原油も大量に売ってやろう。顧客はEUだけではない。欲しがる国はいくらでもある。経済制裁なんてばかばかしい。資源こそパワーの源だ。わがロシアは、天然ガスは世界二位、原油は三位の生産量を誇っている。ヨーロッパには、タンカーでなく、パイプラインでいくらでも送れる。海路運ぶUSAぎより地べたを行くカメ。パイプラインの方が速い

だろ。
アフガン・イラク・リビアなどアラブの国々は、納豆同盟にか

つて侵略され、軍事介入で時の政権を倒されている。俺がウクライナのゼレンスキー政権にしようとしたことと同じだ。なのに、納豆は、自分たちのした政権転覆のことを忘れて、俺を非難している。おめでたい奴らだ。それが分かっているから、アラブ諸国は経済制裁に協力するわけがない。

積極的に西欧諸国の議会にリモート演説で出しやばった、ゼレンスキーの国際世論工作に先手を取られた。

納豆同盟に対抗して、2千年前後からプーペアを二つのハサミとして、中央アジアの国々を抱き込む上海(カニ) || **grab:ing クラブ** 協力機構 (SCO) を発足させた。西アジアのイランなどアラブの国からインド、パキスタン、そしてASEAN (東南アジア諸国連合) の国をまで爪を広げた、ユーラシア大陸(ハートランド)を広くおおう地域協力機構である。この二二年九月十五日に、ウズベキスタンの古都サマルカンドで首脳会談を開き、ロシアのウクライナ特別軍事作戦について国際世論大逆転の理解を求めた。軍事支援を習近平に求めたが、あまり芳しい顔をしなかった。インドのモディ首相は何と言う事か「戦争をしている場合ではない」と明言し、俺との距離を明確にした(九月一六日サマルカンドAFP 時事)。

どうもジャイ子とインドの仲が悪くて困る。特にインドはジャイ子の**「一路」**を警戒する「クワッド(Quad)」で日米豪とも手を結んでいるから、なかなかしたたかだ。上海カニクラブは二日間開いたが、大した前進は見られなかった。カニだから前にはなかなか進まないか(笑)。アルメニアとアゼル

バイジャン、キルギスとタジキスタンが会議中も小競り合いをしていた。俺はウクライナで忙しいから、かまわなくてやれない。どうも思惑が外れた。「燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」困ったものだ。

トルコは、トルコライズで、トンカツスパゲッティとともにかレーピラフを添える。立場としては納豆同盟の一員でありながら、ロシアのかレー味も取り入れているので、本来はロシアに敵対しづらいはずだ。

しかし、確かにウクライナが手に入れたトルコ製軍事ドローン、まあ固定翼無人攻撃機といったほうがいいかな「バイラクトル」にはしてやられた。エルドアン大統領はしたたかだ。仲介の労を取りつつ、おいしいところをエルコを狙っている。「バイロ」で、「双」方向外交、「両」てんびんにかけているのか、上海カニクラブにも加入申請をしてきた。

そういえば、日本でいう「トルコライズ」というネーミングには、トルコ人は困惑している。イスラム教なので、豚肉は禁忌(タブー)でトンカツは「絶対に」食べないと怒っていた。かつての「トルコ風呂」問題のようにならないといいがな。親日的なトルコ人を敵に回すことはないのに。だから日本人は、外交感覚が鈍いといわれるのだ。

出木杉フィンランドは、俺を恐れて、最初NATOに入らなかった。しかし今回のスラブ一家からウクライナスネ夫が家出をしようという動きに、出木杉は納豆同盟に走った。納豆同盟

をこれ以上増やさせないために、スネ夫の家出を防ごうとしたのに、逆に納豆組が増えたのは想定外だった。

さあ、どうしたものかな。落とすどころか。「ロシアしか勝たん(令和の若者の言い回し)」。どこに落とすところがあるだろうか。

ウクライナはかレー同盟に戻るしかない。納豆同盟とかレー同盟の対立の時代は終わっている。ジャワかレー同盟を解散したのだから、納豆同盟も解散せよ。そうすれば、剛田商店は食糧燃料の大出血サービス、世界平和回復記念【ノーサイド】大バーゲンを開催してあげよう。

「日出する国ニホン?」カムチャッカ半島の方が東だ。今こそ「日出する国ロシアである」(Eコマチャッカ半島でのプレゼン講演22年9月5日)。

わが友シンゾーアベか。宗教を装った反社会的(反目的)組織との関係が暴かれて、最悪の死に方だったな。パンドラの箱を開けたようなものだった。政治的テロなら、国を挙げての「国葬」も盛大に行われ、殉国者として英雄扱いになっただろうに?日本に行った時にいろんな所に案内してくれたものだ。彼は心臓(シンゾー)がタフだった。在任中に北朝鮮拉致被害者を取り返すとか、北方領土をとか言っていたらしい。まあ、口を合わせてやってサハリンの天然ガス工事をさせた。見返りに、クナシリ色丹などを日本に返す?まさか。オホーツクはロシアの内海である。そもそもフィンランドとも係争地を抱えて

いるし、国民感情としても、領土を返すなんて大統領としての沽券（こけん）にかかわる。お前のはオレ（ロシア）のもの。北海道が欲しいくらいだけど、これはウクライナが落ち着いてからかな。北海道を住民投票で独立させて、それからかな。不凍港として函館なんかは魅力的だ。日本の開国後、いち早くロシア領事館が置かれたし、今もハリストス教会があるから、ロシアとは縁が深いのだ。

日本も独自の外交を展開すれば、シベリアの天然ガスや石油を分けてあげよう。物価が下がるぞ。「検討」使と揶揄（や）ゆ）されて、何も決断できないという、「国葬」とか「原発再開」とかの外れなことに決断力を発揮している岸田ナニガシとかいう首相も、支持率が上がるぞ。EUとかUSAぎの跡ばかり追っているから、アメリカのポチなんて呼ばれ、国連で分担金だけたくさん取られ、いまだに常任理事国の声もかからない。まあ、今の動けない国連（UN）では、UN（うん）もつきたようなものだ。西欧が中心となってこしらえあげた国連下ラえもんだから、四方丸く収まる道具を出せばいいって。そのようなものあるわけない。国連総会のロシア非難決議なんて、ごまめの歯ぎしりにもならない。NYに引きこもったままでないか。世界平和組織として死に体だ。

BGM「雪は降る。(ガス)は来ない 雪は降る。(NAT

O)の心2・1 (1963 S. ADAMO 訳詞安井かずみ)

ラララ〜ラ〜

しみじみヨーロッパの人民はこの歌をかみしめ、為政者の政治的無智と外交の無恥を恨むであろう。「ガスはこない、いくら呼んでも 明かりの消えたこの寒さ この寂しさ・1」。

核兵器にもまさる破壊力を持つジャイアンソロコンサートを開催するぞと脅しをかければ、神経質に耳をそばだてて跳ね回っているだけの老齢のバイデンウサギもしくかたちも、「ロシアしか勝たん」とばかりにアンバサダーになる。今は、しずか仲間のイギリスもドイツもフランスも口（シア）（ぐち）先しかないのだ。

「ロシアしか勝たん」。納豆同盟はいつまで持つか？自壊は時間の問題といえよう。

重ねて言おう。「ロシアしか勝たん！」世界は、ロシア推ししかないのである。RPG（ロールプレイングゲーム）風に、国際平和達成の最後の難関ラスボスにオレをたとえるやつもいる。ロシア帝国末期に暗躍したラスボス、怪僧ラスプーチンに例えたい気持ちなのだろう。そう、私はラス（ト）・プーチン、最後のそして最大のプーチンである。世界を救う光、プーチンしか勝たん。

あの「Z」のマークは何だつて？ 露日戦争で、日本海軍の忌々しいアドミラル（提督）トーゴーが、わがバルチック艦隊を破ったときに「Z旗」を掲げたという。臥薪嘗胆。あえて今回の作戦では、納豆同盟に押され気味なロシア軍の、起死回生・乾坤一擲（けんこんいってき）のマークとした。正義の味

方『怪傑ゾロ』“The Mark of Zorro”のマークかといわれた
が、本当は、「露国の興廃この一戦にあり」の気概である。ダ
ットサン（日産自動車の海外ブランド名）のスポーツカーのC
Mのキャッチコピーをここに示そう。「Zのマークは（世界
の）明日を指し示す」

（皆で唱和しよう）

ロシアしか勝たん。プーチンしか勝たん。

ミール（平和）スパシーバ（ありがとう）ダスヴィダーニヤ

（さようなら）

了

山頂の展望台から眼下を見下ろす子供たちが元気な声を発している。

「わーっ。すっげー」

ここは北海道の南の玄関口に当たる港街である。古くから外国に向けて開港され、西洋文化をいち早く取り入れた街である。フランス、ロシア、イギリスの教会を同時に見ることができているのはこの街ぐらいいだ。だから、毎年たくさん観光客が訪れ、中国をはじめ韓国など近隣の国からの来訪も多い。

今、冒頭ではしゃいだ声を上げているのは海峡を隔てた県から修学旅行でやって来た小学生たちである。この街と同じ名前の標高三三四mの山の展望台で、ボランティアガイドさんの説明を聞いている。

「この山は、火山活動で出来た山なんです。昔は陸から離れた島だったんですが、次第に島と陸の間に砂が溜まって繋がったものなのです。このような地形を陸繋島と呼びます。あの一番くびれた場所の幅は一kmです」

「じゃあ、この街は砂の上に建ってるの」

質問したのは、ケンちゃんです。

「そうです。だから、昔は街の中心に大きな砂山があったんですよ」

「えーっ、すっげー」

ガイドさんの説明が終わって自由時間になった子供たちが何かを見つけた。

「あつ、たかさんのキリンさんがいる」

「どーどー」

「あの赤い屋根がいつぱいあるところ」

展望台から見下ろした左手に首の長いキリンのようなものが見える。そばで聞いていた先生が答えた。

「あれはクレーンだよ。重いものを吊り上げる機械なのさ。あそこは船を造っている造船所だね。この後見学することになっているから近くで見られるよ」

すると、ケンちゃんが展望台に設置された望遠鏡に駆け寄ってコインを入れた。

「よし、大きく見えるぞ。あれ、これ以上左に向かないや」

望遠鏡を左に大きく振ろうとすると途中で止まって回転しなかった。特に故障している様子もなかったが、目的の造船所を

覗くことができないうまま制限時間になってしまった。

「今日の山頂からの眺めは最高でしょうね」

事務所窓から外を見ながら佐東が声を発した。佐東はこの春に三十六年間務めた海上自衛官を満五五歳の誕生日で定年退職して、この造船所に再就職したのだった。高校卒業と同時に入隊し、四十歳まで艦艇勤務、以後は防衛省の七年を含め、陸上司令部勤務の経歴を持つ。防衛省では会計監査官の職に従事した。会計監査官は自衛隊の各部隊で執行される予算が適正に使われているかを監査する役職である。被監査部隊からは忌み嫌われる存在でもある。一方、国の会計検査院の検査においては、自衛隊の組織を守るための説明役に徹する。

平成の時代に入ると検査の観点が大きく変わり、経済性や効率性・有効性が求められるようになった。装備品の価格や弾薬の調達数量の適正性が検査される。弾薬をはじめ、火薬を使った火工品には有効期限がある。ミサイルや魚雷にも有効期限があり、定期的に検査に出さなければならぬ。いずれも有事になれば消耗するものである。極論すれば、備蓄はいくらあってもいい。しかし、会計検査院は高額な維持費と有効期限切れで廃棄される数量に問題があるとの認識なのだ。時には、コピー機のリース料が、他省庁に比べて高額だという指摘もあり、それを受け入れざるを得ないこともあった。同じ機種で防衛省だから高額だという論理は成立しない。

佐東がこの会社に雇用され内部監査室に配属されたのは、そんな経験を買われてのことかもしれない。内部監査室は、会社内のコンプライアンスを監視する社長直属の室長と佐東二人だけの部署である。

「この山はむかし、木が生えていない禿山だったそうだよ。何でも町の人たちが薪として伐採してしまったらしいんだ」

内部監査室長の榎崎が佐東に説明する。榎崎は高校卒業と同時に入社したたき上げである。若い頃は陸橋のバリバリの営業マンであり、この会社と苦楽を共にして来た。

「室長は何でもござんすね」

佐東が言うと、榎崎が少し照れたような顔をして言った。

「これは、前室長の蔵島さんからの受け売りなんだけどね」

蔵島はこの街の歴史研究家でも知られた人物である。佐東が採用されると入れ違いで会社を去っていた。

「再び植林されたのは、北前船で豪商となった淡路島出身の高田屋嘉兵衛の尽力があったからだそうだ」

榎崎が説明を続ける。街の中の高田屋の屋敷跡には銅像が建立されていて、高田屋嘉兵衛は、この街の発展に大きく貢献した人物として尊敬されている。

「この山上に砲台が設置されたことは知ってるかい。これも蔵島さんから教えてもらったんだけどね」

明治時代に、海峡を見張る軍事要塞として利用され、海峡防備用の砲台が設置された。当時は山への立ち入りが禁止され、

写真を撮ることやスケッチさえも禁止されたのだ。そして、地図からこの山が削除される軍事上の最高機密だった。人が立ち入らないようにと軍がマムシを放し、自然が手つかずのまま残ったおかげで、貴重な小動物や植物が保存され、今では立ち入り制限はないが、条例で植物等の採取が禁止されている。

山頂の展望台から見る夜景が有名だが、夏場は霧が発生することが多く、十月から三月の冬場は車両用道路が通行止めになるため、山に登ったことがない住民も少なくない。

階級によって違いますが、五五歳前後で定年になる自衛官は、ほとんどの者が再就職する。佐東の他にも海上自衛隊出身者が警備や営業職で再雇用されていた。その筆頭が顧問の鈴木である。鈴木はこの街の海上自衛隊基地隊司令を最後に海将補の階級で定年退職した。鈴木は入隊後、一貫して艦艇勤務にこだわり、五隻の護衛艦艦長と二つの護衛隊司令を歴任した真の海上武人である。出身が高田屋嘉兵衛と同じ淡路島だということも何かの縁かもしれない。

佐東は昔、鈴木が艦長の艦の補給長として勤務したことがあった。海軍時代は主計長と呼ばれ、お金と物品を管理する役職である。艦内の食事や医務衛生の責任者でもある。その縁で佐東が定年を迎える年の正月明けに、横須賀で単身赴任中だった佐東に鈴木から電話が入った。

「総監部の就職援護課に造船所に勤務したいと申し出る」

佐東も家族が待つこの街での再就職の希望は出していたが、具体的な企業名までは告げていなかった。収入は期待できないが、どこかの事務の仕事にでも就ければいいと考えていたのだ。以後話が進んで再就職が決まり、定年退職の翌日からこの造船所に勤務することになったのである。

午後になって、外から子供たちのにぎやかな話し声が聞こえてきた。二階の事務室の窓から下を覗くと三十人ほどの小学生の集団が総務部の案内係に先導されているのが見えた。来客用の白いヘルメットをかぶっているが、大人用のものでサイズが合わないため、顔の半分が隠れてしまっている。昔見たテレビアニメのカリメロを思い出して佐東は思わず笑ってしまった。

「赤い色には何か理由があるんですか」

いきなり質問された案内係は、はじめは何を質問されているのかわからなかった。子供が指さす屋根を見てようやく理解したようだ。

「実はね、あれは赤ではなくて、屋根の鉄板が錆びただけなんだ。元々は青い屋根だったかな」

案内係は、少し困ったような顔で答えていた。そして、この造船所がいかに古く歴史があるかを説明した。

「この造船所の創業は明治二九年で、今から二二〇年も前です。また、一番古い第一号ドックは明治三六年建設で『土木遺産』に指定されています」

この第一号ドックは、江戸時代に造られた弁天砲台を取り壊

して、その土台に使用されていた大きな石を利用して造られたものである。その石は山の裏側から切り出されたものだった。採石跡地への道は立ち入り禁止になっているが、船からなら見ることが出来る。

そんな説明をしている声が聞こえて、

「昔はその岩場が海水浴場だったんだよ。私も子供の頃はよく泳ぎに行ったものさ」

室長の檜崎が、昔を懐かしむように言って目を細めた。

「そうそう、海水浴場を奥へ進むと海の洞窟があつて、その入り口のところ一本の吊り橋が掛かっていたんだ。そう言えば、最近街中で妙な噂を聞いたなあ」

あまり興味のない佐東だが、檜崎室長が話したそうにしていてのを察して聞いてみた。

「どんな噂ですか。人魚でも現れたつて話ですか」

すると檜崎が笑いながら答えた。

「その洞窟近くで夜釣りをしていた何人もの人が、洞窟から出てくるクジラを見たそうなんだ」

「クジラつて、この近くにクジラが来るんですか」

佐東の質問に、檜崎が応じる。

「いや、クジラが来た話はこれまで聞いたことはないが、ニシンの群れが来た話は聞いたことがあるよ。岸壁から海に竹竿を刺してもニシンの群れで倒れないほどの大群だったそうだよ。

大方、何かの魚の群れを見間違えたのかもしれない」

「もしかして、それも蔵島さんから聞いた話ですか」

佐東が言うと、檜崎は「そのとおり」と言つて話を元に戻して続けた。

「その吊り橋を渡つて岩を削つて作った狭い道を行くと山の裏手に繋がる石ころだらけの海岸に出られたんだ」

話は山の裏側にあつた寒川集落の話になった。寒川集落は明治十七年頃に富山県の漁師八世帯二〇人が入植したこと始まり、最大で六〇人ほどが住み、小学校の分校もあつたほどである。漁業で暮らしを立ててわざかだが畑も作つていた。しかし、次第に漁獲量も減少し昭和二九年の洞爺丸台風の被害もあつて間もなく撤退した集落である。吊り橋が無くなつてしまつた今ではそこも立入禁止区域となつている。

「佐東くん、今度そこに行つてみないか」

檜崎が目を輝かせながら佐東を誘つた。

「是非お願いします」

その類のものにあまり興味のない佐東だったが、熱の入つた誘いについそう答えてしまつたのだ。

「蔵島さんから秘密のルートを教えてもらつているんだよ。今はまだマムシが活動時期だから雪が降る前の十一月になったら探検に行こう」

檜崎は山に目を戻して、独り言のようにつぶやいた。

「こちら側から山の裏側に通り抜けられるトンネルがあるという噂が昔からあるんだ」

戦時中は軍の統制下でこの造船所で駆潜艇を建造したという記録も残されている。また、山のふもとにあった捕虜収容所の捕虜が造船所で働いた記録もある。当時はどの造船所も同じようなことがあったのだ。だから、この街は空襲や艦砲射撃で大被害を受けたこともあった。街の東側の沖合には敵の潜水艦が出没して、本州と北海道を結ぶ海上輸送ルートの寸断を図って多くの輸送船や連絡船が撃沈された。

「わーっ、ロボットのキリンだ」

「こっちはゾウのロボットだ」

子供たちは、たくさんのクレーンを見上げて思い思いの感想を言い合っている。造船所中央部にある船台では、新しい船が建造中だ。全長一八〇m、全幅三三m、深さ十五m、総重量四万トンの貨物船だ。オレンジ色の船体が陽に当たって輝いている。「もうすぐ進水予定の船です。進水方式は、日本でも少なくなつた滑走式を採用しています。後ろ向きで滑って、海に入るんだよ」

案内係が説明している。みんなが上を見上げる中、ケンちゃん、岸壁の突端に停泊している灰色の船を見ていた。

「ねえ、あの向こうにある船は何」

ケンちゃんが指さす方向を見た案内係は、

「あれは、海上自衛隊の艦だよ、今は点検中なんだ。みなさんが学校で健康診断を受けるのと同じだね」

と説明した。造船業界が景気が良かったころは、専ら大型貨物船の建造が中心だったが、造船不況に入ると厳しい経営状況の中、大規模なリストラを行って来た。何回かは倒産の危機に見舞われながらも他社との関わりを得て現在に至っている。今でも新造船の建造は継続しているが、船価の厳しい時代が続いており、為替が円高に振れると一気に収益に影響される時代である。

そんな中で着実に利益を確保出来るのは海上自衛隊艦艇の修理事業である。この街に配備されている掃海艇を始めとして、日本海側に配備されているミサイル艇、海峡を隔てた基地を母港とする護衛艦の修理を請け負っている。艦艇は、年に一度検査・修理のためドック入りし、五年に一度定期検査をして、大掛かりな修理工事を行う。その関係でセキユリティも従来より強化された。海上自衛隊のOBが警備で再雇用されているのもそこに理由があるのかもしれない。

「えっ、そんなものありませんよ」

造船所構内に入ろうとするトラックの運転手が、正門の警備係に入門証の提示を求められて困惑している。

「今までは、そのまま通れたんだけどな」

運転手は不満の声を漏らした。警備係は、用件先の部署に電話を入れて確認してからトラックを通した。これに似たような事案は、海上自衛隊OBが警備に就くようになってから多くな

っている。

自衛隊基地の各基地の正門に立っている警衛隊員は、「門番と押揃されることもあるが、実のところ例え入隊したばかりの二等海士といえども特別役員としての責任と権限が付与されている。酔った護衛隊司令が、夜中に通門する際、身分証明書の提示に応じなかったことで懲戒処分処された例もある。

小学生の見学は造船所の一番奥の第三号ドックに来ていた。

このドックは造船所で一番大きなドックで、長さ三三〇m、幅五八m、深さ十一mの巨大なブルのようだ。水を注水してから入口の扉を開けて船を入れ、扉を閉めてから水を外に排水すると船が台座の上に乗っかる仕組みである。残念ながら、今は修理中の船はいなかった。

「それでは、ドックの中を覗いてみましょう。ドックサイドの手すりにつかまって落ちないように注意してください」

真つ先に走り寄ったのはケンちゃんだった。

「あれっ、トラックが壁に吸い込まれた」

後から追いついた案内係に、ケンちゃんが訴えたが、何も見えなかった。確かにこのドックには車両が渠底まで降りられるスロープがある。しかし、修理船が入っていないドックで作業があるとは思えない。

「何かの見間違いだったんだね」

案内係はそう言ったが、ケンちゃんは納得した様子ではな

った。周りを見渡すと、さっき見たのと同じホロの付いたトラックが反対側のドックサイドに停まっていた。

「あのトラックと同じだったんだ」

ケンちゃんは、案内係に詰め寄った。

「同じようなトラックや車両が、一日に何台も入って来るからね」

子供たちは、見学を終えて次の見学場所に向かった。バスの窓から手を振る子供たちに応えて、案内係も手を振った。

この造船所で働く従業員千人に加えて、艦艇の修理のために、専門業者と呼ばれる工員さんたちが何人も出入りしている。造船所では主に船体の修理を請け負う。武器やエンジン、レーダー、システムといった特殊な修理工事は各専門メーカーが請け負っているが、それらの工程管理は造船所側の仕事である。最盛期よりずいぶん人が減ったとはいえ、顔と名前が一致しないことが多い。

入社から半年が過ぎ、仕事にも慣れた佐東である。

「上期の内部監査も無事に終わったから、明日は打ち上げに行くか」

檜室長が佐東に声をかけた。打ち上げと言っても二人だけだ。ほとんどの社員は自家用車で通勤しているから、テレビドラマのように「今夜一杯どうだ」とはならない。飲酒の予定がある日の朝は、自宅に車を置いて奥さんに送ってもらうか電車で

通勤する。いきなり飲んで帰宅することがない分、奥さんの理解も得られやすい。もつとも、榎崎も佐東も酒に強いほうではないので、ビールの中ジョッキ二杯がいいところである。

打ち上げの日の朝、佐東は電車で通勤した。電車と言っても路面電車である。自宅から徒歩五分のところにある競馬場前が最寄りの電停である。約一〇キロ弱の道のりを車だと二十分足らずだが、電車だと四十分もかかる。佐東はいつもより少し早い七時前に自宅を出て、七時ちよほどの電車に乗った。見慣れない客の登場に、一瞬視線を向ける者もいたが、一〇人足らずの客がゆつたりと席に座っている。いつもこの時間帯に利用している常連客なのだろう。佐東は後部側のベンチシートの本真の中あたりに席を取った。一番端の席などはこの先で乗って来る常連客の指定席になっている場合が多いことに配慮したからだ。終点が造船所の正門前なので、寝ていても大丈夫なのだが、車窓からの景色を楽しむことにした。だが、その景色は二十五年前と大きく変わった様子はなかった。むしろ寂れた感が強い。そもそも佐東はこの街の生まれではなかった。三十歳前後の三年間、この街の基地隊に勤務し、その間に妻と結婚したのである。彼女はこの街の隣町出身で、基地隊近くの市立病院で看護師をしていた。当時は、この街にも東京で有名なディスコホールがあって、同僚たちと一緒に来ていた彼女と出会ったのである。街が今よりもっとキラキラと輝いていた時代だった。全国を転勤で回ったあと、定年の七年前に子供たちの高校

入試を機にこの街に自宅を買った。それ以後、定年まで単身赴任を続けたのである。

電車がJR駅前の電停に停まるとほとんどの客が降り、入れ替わりに高校生たちが乗り込んで来た。電車内は立っている客もいるがぎゅうぎゅうといった感じではない。時間帯によるのかも知れないが、佐東が勤務していた二十五年前の人口は三〇万人を超えていたが、今は二十五万人を切っている。「昔は電車が到着するたびに、掃き出されるようにして人が降りたものさ」

榎崎室長から聞かされた話だが、
「って、蔵島さんが言ってたよ」

いつもの榎崎の話のオチである。榎崎もこの造船所で五千人が働いていた最盛期の活況は知らなかった。

仕事を定時に終えた榎崎と佐東は、JR駅前にある寿司屋の暖簾をくぐった。会社の接待でよく使う店ではあるが、もちろん今日の支払い自分たちの財布から出す。と言つても、榎崎が佐東に奢るのが常だった。駅前もずいぶん賑やかさが減った。駅前通りに向かい合つて建っていたデパートの閉店が続いている。

二人はカウンター席の奥の方に席を取った。

「いつものやつでお願いしますよ」

榎崎が中の大将に声をかけた。

「あいよーっ、お二人さんにビールね」

直ぐに中ジョッキに注がれたビールが目の前に置かれた。ほどなくして、料理が順番に出される。三十分ぐらい経ったころ、

「ドック」という単語が聞こえてきた。聞こえた方に視線を向けると入口近くに座っている二人組の男性客がいた。だいぶアルコールが進んだようで次第に話し声が大きくなっていく。この街で「ドック」と言えば造船所のことである。

「去年も赤字だったんだろ、今年も厳しいらしいよ」

取引のある会社の関係者だろうか、聞くつもりはなくても聞こえてしまう。檣崎たちの素性を知っている大将が、苦笑いを向けて二人に軽く頭を下げた。

「それでも何とかなるのが、ドックだろ。今までもそうだったんだから」

もう一人のほうが、首を傾げて、

「不思議だねー」

と、語尾を伸ばすと、二人で笑った。檣崎と佐東は、最後の握り寿司を口に詰め込むようにして食べ終えたと席を立った。

『電力管制のお知らせです。本日、午前十時から午後四時までの間、電力管制を行いますので各職場は不要の照明や機器の使用をお控えください』

いつもの総務部による構内放送に檣崎は違和感を覚えた。第三号ドックの排水作業でポンプをフル稼働すると今の設備では電力が足りなくなることは知っていたが、最近では電力管制が頻

発していた。

護衛艦『きりゆう』の定期検査が始まっていた。工期は四か月で年内いっぱいだ。

「また、ミサイルを撃ちやがった。初めの頃は衛星の打ち上げだと言って誤魔化していたのに、今じゃお構いなしに撃って来やがる」

砲術長の大原三佐が士官室で若い幹部を捕まえて怒りをぶつけている。砲術長とは、主に砲口武器を指揮する士官で、二等海士で入隊して部内の幹部選抜試験で昇任してきた正義感の強い男である。

「この前はついに、この街の上空を飛んで太平洋上に落下させましたからね」

砲術士が応じた。

「僕たちは修理期間中は、身動きがとれませんか」

通信士が声を荒げた。二人は防衛大学校からの同期である。

ミサイルを撃っているのは、日本海を挟んだ隣国の独裁国家N国である。

「まったく、うるせーな」

大原が、外で作業をする音に八つ当たりした。上甲板の錆びを落とすためのジェットやサンダーの振動と音が艦内に響き渡っている。機器類の整備は専門業者に任せるが、甲板などの塗装整備は乗員が行う。修理に入ったからと言って民間船のよ

うに全て造船所任せではないのだ。修理期間中に交代で一週間程度の休暇をもらえろが、あとは整備作業に追われる毎日となる。士官は、直接の整備作業には従事しないが、これまでにたまた書類仕事に忙殺される。

それから三日後、とんでもないニュースが流れた。例のN国が、弾道ミサイル実験を行うというものだ。太平洋に向けて、ミサイルを発射するという。新聞の見出しには、『N国』ついに長距離弾道ミサイル完成か』の文字が躍っていた。つまり核弾頭を搭載したミサイルが日本上空を飛行するのである。アメリカ西海岸を射程に置くミサイルである。これにアメリカも強い姿勢で抗議した。

「完全に日本は舐められてるよ」

砲術長の大原三佐が不快をあらわにした。

「もし、アメリカを狙ったミサイルが発射されたら日本はそれを見過ごすのか」

船務長兼副長の林崎二佐が言った。

「日米同盟としてそれはないでしょう」

大原三佐が答えた。

その時、テレビのニュース速報が流れた。

『防衛大臣、破壊措置命令を発令』

日本の領空を飛行する物体が日本の国土に落下する場合にそれを破壊せよ、との命令である。夕刻にはイージス艦が、日本海の配備点に向け、それぞれの基地を出港する映像がテレビで流

された。また、北方にある自衛隊の各基地には迎撃用として、航空自衛隊が装備する米国開発のパトリオットミサイル・PAC-3が配備された。

迎撃配備が完了し、緊張状態のまま三日が過ぎ、四日目の日の出と共に長距離弾道ミサイルがN国から太平洋に向かって発射された。その状況を日本海に配備された各イージス艦のレーダーが的確に捉えていて、リアルタイムで市ヶ谷の防衛省に画像および弾道データが送られた。防衛省地下四階の統合オペレーションセンターでは、防衛大臣以下が目の前の巨大なマルチスクリーンを見つめていた。防衛省の地下には、他にも陸、海、空のオペレーションルームがある。また、自衛隊最高指揮官である内閣総理大臣の執務室もある。防衛大臣以下高級指揮官の宿泊設備もある。地下へのアクセスは限られた者が生体認証で識別される。

ミサイルはロフテッド軌道で高く打ち上げられた。すると突然各イージス艦のレーダー画面上のミサイルの輝点が消えた。航空自衛隊のレーダーサイトも同様に目標をロスしていた。何が起きたかわからない状態から数分後、イージス艦から報告が入った。

「ミサイルは、自爆した模様、東北地方に破片が落下する危険有り」

報告を受けた防衛省は、直ぐに官邸対策室に報告して、関東以北にJアラート(全国瞬時警報システム)を発動した。対象地

域では、人々が身の安全を図るために地下鉄構内や地下街、堅固な建物に避難した。航空機の飛行を禁止し、飛行中の航空機については、最寄りの飛行場に緊急着陸させた。

二時間後にJアラートが解除され、その直後から落下物の情報が警察に殺到した。

「ウチの畑に、金属片が突き刺さってる」

「屋根瓦が割れた」

「山の方に発光体が落ちて行くのを見た」

情報は様々だったが、警察と自衛隊で回収した金属片は、大きいもので四〇センチ四方もあるものがあつた。幸い人的被害はなかった。航空自衛隊はすぐさま、大気サンプル採取用の航空機を飛ばした。採取されたサンプルを分析した結果、問題になるような放射性物質は検出されなかった。

日本国は、外交ルートを使ってN国に対して嚴重な抗議を行ったが、回答は得られていない。後日のN国の発表は、不可抗力による不慮の事故だったとして、以後の詳細な説明はなかった。今回のことで、日本国はN国に対し、次のような声明を送った。

『今後、日本国領空を通過する物体について、事前に飛行物体の詳細な説明がない場合は、撃破するものとする』

しかし、それに対する回答もしくは声明など一切なくN国は沈黙を貫いた。この事件を機に、世論が変わつた。新聞、テレビのマスコミも今回の事案を大きく取り上げ、国民の危機感を煽つたことも理由だった。これまでの論調は、『国の平和は、まず

外交努力が優先、話し合いで解決せよ』であつた。これが、『力あつての交渉、反撃能力の整備を急ぐべき』に変わったのだ。防衛力の整備拡大に反対を唱えていた野党側の声も次第に小さくなっていった。

それから、N国の特段の動きがないまま一か月が過ぎた。国内の迎撃配備は多少緩和されたが、継続されていた。

そして、ついにN国が新たな動きを見せた。その情報は、米国の軍事偵察衛星が捉えたものだった。またもや弾道ミサイルの発射の兆候だった。今回は、列車をプラットホームにしたミサイルだった。トンネルからミサイルが搭載された列車がいきなり出現した画像を米国が公開した。日本国は、先の声明どおりN国に対し、発射の詳細について照会したが、一切の回答はない。過去の例から、三日以内の発射が見込まれた。ミサイル迎撃配備のコンディションが最高度まで高められた。

翌日の大手新聞社の第一面に、センセーショナルな見出しが躍つた。『電磁パルス攻撃か』この前の弾道ミサイルの事故は、電磁パルス攻撃の実験ではないかと書いてあつた。『電磁パルス』という新たな用語に、その日の各テレビ局の情報番組は、急ぎよ軍事アナリストを呼んで解説させた。著名な専門家は複数のテレビ番組で同じ解説を繰り返した。『電磁パルス攻撃』は、上空で核爆発を起こして、放射線の一つであるガンマ線が空気中の分子と衝突することで電子を発生させ、最終的に強烈な電磁波となつて地上に降り注ぎ電力や通信に障害を生じさせるもの

である。日本国全土に停電を起こすことができる。もしそうなれば日本国の経済は大打撃を受け、国民生活に多大な影響を及ぼすことになる。

電磁パルス攻撃の可能性については、すでに米国防総省から知らされてはいたが、その情報がどこからか漏れたに違いないなかつた。いよいよ、緊迫のカウントダウンが始まった。

この状況を受けて、内閣総理大臣は官邸の執務室で、防衛省にホットラインを繋いだ。

午後の仕事始めのラジオ体操が終わった頃、会社から貸与されている佐東のスマホが胸ポケットでいきなり振動した。一通のメールが届いており、添付ファイルを開く。

『防衛省発令 第二二〇一号艦の補給長を命ずる』とあった。発令日は今日であり、乗艦場所は第三号ドックになっていた。

佐東は、第三号ドックに入渠中の艦はなく、艦名ではなく艦装番号であることを不思議に思ったが、海上自衛隊の赴任形態は、発令日に乗艦するのが慣例である。室長に席を空けることの許可を得て第三号ドックに急いだ。歩きながら佐東は考えた。榑崎室長が直ぐに許可を出したのは、事前にこういうことがあることを知らされていたのではないか。

第三号ドックの手前には規制線が張られ、修理中の護衛艦『きりゆう』の乗員と思われる紺色のデジタル迷彩服を着た複数の隊員がいた。近づくと、スマホの提示を求められ、さきほどのメ

ールを確認された。同時に一人の隊員が持つタブレットで顔認証を受ける。本人確認が終わると、新しい身分証明書が手渡された。階級と氏名、認識番号が記されていた。現役時代と同じ番号だ。

前や後ろに他の隊員がいないところを見ると時間差で集められているようだ。途中に立っている警戒員が佐東に向けて敬礼した後、行き先を手で示した。思いがけない敬礼で、答礼が少しぎこちないものになった。数人の警戒員の誘導に従って、第三号ドック渠底に降りた。そこには、一台のマイクロバスが停車しており、車中は満席に近い状態だった。佐東は乗降口右横の一人掛けの椅子に座ると同時にドアが閉められた。どうやら佐東が最後の乗車だったようだ。佐東が車内を見回すと誰もが不安げな顔をしてヒソヒソ声で話している。会社の作業服や自衛隊の作業服姿の者もいた。右斜め前方のマイクロバス内での上席とされる二人掛けの椅子に座っている後ろ姿が、鈴木顧問であることに気づいた。すると、後ろから声が聞こえた。

「補給長」

後ろを振り返ると、以前同じ艦で勤務した給養員長だった野村が小さく会釈した。野村の存在は、会社に面接に来たときに正門で会って知った。その時はなぜ調理職の野村が警備員をしているのか不思議に思ったものだ。

ドック左舷の壁に垂直に停車されたマイクロバスの前には、壁が一段へこんだ部分があった。ヘッドライトを数回パッシン

グするとその部分がゆっくりとスライドして開口部が現れた。マイクロバスはその入り口から中に進んでいった。トンネルのようなオレンジ色の照明で、緩い下り坂になっていた。進行方向は山の展望台の方角だ。しばらく進むと今度は上り坂に変わり、コンクリートのトンネルから岩盤が剥き出しになったずいぶん昔に造られた洞窟に変わった。そして、マイクロバスが停車して鈴木顧問が席を立った。降車する際に一瞬だけ佐東と目が合った。全員が降りるとそこは、巨大な空間が広がる地下の建造ドックだった。中型の船を建造できる船台とクレーン設備がある。佐東は、方角と距離的に山の地下であると予測した。ここは戦時中に海軍が秘密裏に作ったもので、当時の計画では潜水艦基地になるはずだったが、敗戦で中断されたのである。完成していれば、海峡を使って、日本海へも太平洋にも進出することが出来たのだった。

スピーカーからの声に誘導されて、鈴木以下総勢二十五人は奥へと進んだ。そこには、巨大なプールがあった。佐東は、昔新婚旅行先で見た鍾乳洞奥の湖を思い出していた。

すると、目の前のプールの底から水を割って一隻の船が浮上してきた。初めは潜水艦かと思ったが、形状は護衛艦である。甲板上の構造物は一定の傾斜が掛けられていてステルス機能を有している。プラモデルで組み立てた場合、簡単過ぎて面白くないなど佐東は思った。スピーカーから艦尾側の壁に設置された大型ディスプレイに注目するよう指示が出された。そこに技術

開発官の阿達海将補の姿が映し出された。全員が拳手の敬礼をする。阿達海将補は答礼してから話し始めた。

「みなさん、そのまま聞いてください。本日をもって、HD計画が完結しました。HDとは、ハイ・ディフェンスの略です。みなさんの目の前の艦は、AIコンピュータ制御のZ世代型の艦です」

「HDって、造船所の頭文字かと思ったよ」

誰かが囁くのが聞こえた。ディスプレイに艦の概要諸元が表示された。

基準排水量	三九〇〇トン
水中排水量	五八五〇トン
全長	一三三メートル
最大幅	十七メートル
機関	ナトリウムエンジン
推進器	スクリュープロペラ二軸
最大速力(水上)	三五ノット以上
	(水中) 三〇ノット以上
兵装	イージスシステム(改)
	Mk・45垂直発射システム
乗員	二五名

そして、艦の性能についての説明がなされた。この艦の最大の特徴は、ナトリウムエンジンを動力として、水中航行も可能であることだ。ナトリウムは海水から抽出できるため燃料の補

充がいらぬ。無限に燃料を手に入れることが出来、従来の原子力エネルギーのような危険性もない。それを可能にしたのは、ナトリウムと水を超爆発的に反応させるための触媒が開発されたからだ。その反応で出た熱で蒸気タービンを回すのである。

また、水中からでも発射できるVLS技術開発が進み、今回搭載している弾道弾迎撃ミサイルは、PAC-3を改良したPAC-5で、超音速・高高度の弾道ミサイルに対応可能である。

阿達海将補の説明が終わると、デイスブレイ画像が切り替わった。そこに、海上幕僚長の姿が映し出された。あわてて若い士官の一人が整列の号令をかけた。定年退職した者も現役隊員も号令に素早く反応してデイスブレイに正対して整列した。

「頭中（かしらなか）」

士官は挙手の敬礼、下士官は顔ごと視線を向ける。海上幕僚長の答礼が終わわり、号令官の「直れ」で視線を正面に向けた不動の姿勢に戻る。

「ただ今から、艦装番号第二二〇一号艦の命名式及び自衛艦旗授与式を行います」

スピーカーから司会の声が流れた。

「命名、自衛艦さくら」

海上幕僚長が、命名書を読み上げる。海上自衛隊では、旧海軍の軍艦と同じ艦名を付けることはあったが、『さくら』は初めての名前である。

司会者からデイスブレイ下の桐の箱を開けるように指示され

た鈴木顧問は、箱から三角に畳まれた自衛艦旗を取り出すと右手に持って頭上高く掲げた。整列した乗員から「おーっ」という歓声が上がった。護衛艦『さくら』の就役の瞬間である。

画面が切り替わり次に映し出されたのは、内閣総理大臣であった。後ろに防衛大臣の姿も見える。号令官の号令で一連の礼式動作を気持ちの良いほどもスマートに行う。

「鈴木艦長以下二十五名の諸君、日本国最新鋭艦『さくら』へようこそ」

そして、自衛隊最高指揮官から『さくら』に対して防衛出動命令が発出された。

「日本国の未来は、諸君たちにかかっている。健闘を祈る」

この言葉とともにデイスブレイ画面が暗くなる。以後、外部との通信連絡を遮断し、極秘行動となる。

ここで、『さくら』乗組み士官のメンバーを記しておく。

艦長 海将補 鈴木 啓一
砲雷長兼副長

一等海佐 井中 啓人

船務長 一等海佐 林崎 博和

機関長 二等海佐 池田 昌弘

補給長 一等海佐 佐東 武留

砲術長 三等海佐 大原 成己

航海長 三等海佐 水口 尚哉

砲術士 二等海尉 夏川 隆司

通信士 二等海尉 内藤 修一

以上の九名で、艦長と補給長以外は、修理でドック入りしている『きりゆう』の士官たちである。いずれも、早い段階から本事態を見越して人事が組まれていたはずである。

なお、日本国では自衛艦と呼称しているが、国際的には軍艦と同様に扱われる。軍艦の定義は、海洋法に関する国際連合条約第二十九条に記されており要件の一つが、『政府によって正式に任命され、その氏名が海軍名簿又はこれに相当するものに記載されている士官の指揮下にあるもの』である。

「出港時刻二四〇〇時、各自持ち場に付いて最終点検を行え」

鈴木艦長が、乗員に命じた。乗艦してみると広さの違いはあるが、士官は個室、下士官は二人部屋である。各人の部屋には、戦闘服、その他の個人用装備品が用意されていた。

戦闘服に着替えた各員は、それぞれ自分の配置に付いて受け持ち機器の点検に入った。

技術開発官の説明どおり、艦内の全システムがAIコンピュータで管理され、極限まで省人化を図った艦であった。

佐東も補給長の所掌する倉庫や事務室、調理室を見て回った。調理室では、野村給養員長が夕食の準備を始めていた。給養員長といっても一人だけだ。佐東に気付いた野村が挙手の敬礼をして言った。

「まさか、また艦で調理するなんて」

「また給養員長のうまいメシが食えるな」

そう言って佐東は調理室を後にした。次に向かった医務室では、衛生員長が薬剤リストと現物の照合の最中だった。佐東が後ろから声をかけた。

「あつ補給長、よろしくお願いします」

衛生員長が挙手の敬礼をし、佐東は答礼しながら言った。

「補給物品の管理してもらわなくてはならない。大変だが頼む」

艦内は完全自動化され、特にCIC（戦闘指揮所）は、周囲の壁全体がマルチスクリーンになっていてあらゆる情報が表示できるようになっていた。

「オレが初めて護衛艦勤務した時は、透明なアクリル板の裏で、若い隊員が裏文字で書いていたのに」

佐東はそんな独り言を言って昔を懐かしんだ。部屋の中央に艦長席があり、目の前にはタッチ式の操作パネルがずらりと並んでいる。艦長の右隣の席が砲雷長、左隣が砲術長の席になっていた。船務長の席は、部屋全体が見渡せる後方にあった。各員の会話は耳に装着したイヤホンマイクで行う。

一九〇〇時に全員がそろって夕食を取った。作戦行動が始まれば、満足に食事時間を取れなくなり、戦闘非常配食になる。食事を終えて鈴木艦長が命じた。

「出港準備まで各員体を休めておくように」

二二一五時に艦内号令が流れた。

「出港準備、艦内警戒閉鎖」

二二四五時、出港十五分前、航海当番の配置が令された。

二二五五時、通信士が艦長に報告する。

「出港五分前になりました」

鈴木艦長は、イヤフォンマイクの耳元のスイッチを操作して艦内マイクに切り替えた。

「艦長から達する。各員はその場で聞いてほしい。我々はただ今から極秘作戦のため、日本海に出撃する。我が艦『さくら』は、我々日本人が持つ優しさで平和を愛する心の象徴である。本作戦は、美しい日本国を自らの手で護り抜くという意志を示すものである。必ずや成功させて家族の元に戻ろう。以上」

「出航用意」

鈴木艦長の号令で、艦内スピーカーから出港ラッパの音が流れ、同時に係留装置のロックが外れて、『さくら』は静かに潜航した。水路を通過して山の裏側にある昔吊り橋があった洞窟から海に出る。

「やっぱり、クジラがいたぞ」

夜釣りに来ていた一人が周囲の仲間にも教えたところには、『さくら』は沖に出てその水中の影は見えなくなっていた。

津軽海峡西口を出たところで、艦内哨戒第一配備を下令した。

最大の警戒態勢で作戦海域まで進出する。

出港から五時間後の〇五〇〇時、『さくら』は日本海の作戦海

域に到着し、ミサイル発射可能深度まで浮上した。海域には、警戒監視のためのイージス艦四隻が配備されている。潜水艦の行動は極秘中の極秘だが、時間ごとの所在エリアの情報は僚艦で共有される。ブルーオンブルー（同士討ち）を回避するためである。

「N国が弾道ミサイルを発射するとすれば日の出直後の可能性が高いです」

砲雷長兼副長の井中一佐が艦長に進言する。

「本日の日出、〇六一二時、天候晴れです」

すかさず、通信士の内藤二尉が報告した。

「対空戦闘用意」

鈴木艦長の号令で、艦内にアラーム音が鳴り響く。バルブ、隔壁ドア・ハッチが自動で非常閉鎖される。各部署から配置完了の報告が上がる。

「対空戦闘、全システムオート、ウエポンズフリー」

鈴木艦長が攻撃命令を出した。砲術長の大原三佐が、目の前のタッチパネルで攻撃モードをマニュアルからオートに切り替えた。同時に艦内マイクからも状況が流されて、艦内に緊迫した空気が充満した。マルチスクリーンには半島の地図が表示されている。弾道ミサイル情報は、配備されたイージス艦のシステムとリンクして共有できている。レーダーレピーター画面を電測員が見つめる。

日出時刻になった瞬間、攻撃システムが作動を開始した。V

LSの一番セルの扉が開く。次の瞬間、レーダー画面上に一つの輝点が現れた。

「N国ミサイル発射」

砲術長が声を上げた。その刹那『さくら』から一発の迎撃ミサイルPAC-5が発射された。CICのマルチスクリーンに表示された二つの輝点がどンドン近づく。

「インターセプト一〇秒前」

砲術長のカウントダウンが開始された。

「五、四、三、二、一、マークインターセプト」

その瞬間、レーダー画面上から二つの輝点が消えた。同時に、

『さくら』は静かに深度を増して作戦海域を離脱した。

俵万智の研究 ― 石川啄木という座標軸を置いて ―

水 関 清

第一章 「自我の詩」

歌人・三枝昂之は二十世紀の短歌の特徴として、「自我の詩」という(短歌の)水脈の発見がある」と評して、以下のように述べている(近代短歌と現代短歌、岩波現代短歌辞典。すなわち、「自我の詩」とは、「作者と作品中の『私』を一致させる歌、つまり作者の真情を吐露する歌」であり、「前衛短歌」という思想表現を呑み込んで、自己表現を豊かに太らせる短歌百年の大きな流れになったのだという。心理学では、「自己」と「自我」とを峻別する。「他者視点での私の体験」を「自己」と呼ぶのに対して、「自分が考える『自分』」のことを「自我」と呼ぶ。その語義に立ち還って三枝の評を考えると、「自我の詩」とは、「歌を詠む者自身が、短歌という形式を用いて、自らの姿を表現したもの」ということになる。

二十世紀の短歌という枠組みの中で「自我の詩」のことを考えたと、まず思い浮かぶのは石川啄木(一八八六―一九二二)である。作歌の発端となるのは、日々の生活の中で、何かに触発されることによって「心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じ」

である。「一生に二度とは帰って来ないのちの一秒だ。おれはその一秒がいとしい。(中略) おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。」(『一利己主義者と友人との対話』「創作」：第一巻第九号、一九二〇(明治四三)年一月一日)という歌論に基づいて詠まれた啄木調短歌は、この歌論が発表されたのと同じ年の一二月に、歌集『一握の砂』として世に出されて、啄木という名を、後世に残す機縁となった。

それから七七年後に上梓された『サラダ記念日』が、歌集としては空前の二八〇万部という売り上げを記録して世に出たのが、俵万智(一九六二―)である。俵の作歌は、「心が揺れた時」が出发点であり、その「揺れ」が歌を作る動機になるのだという(「考える短歌―作る手ほどき、読む技術」(新潮社刊、二〇〇四年)。

啄木の「刹那々々の感じ」と、俵の「心の揺れ」という、一見、類似しているようにみえる作歌動機の異同は後述することとして、ふたりが肉薄した「自我の詩」という、それぞれの歌のカタ

手について考えていくのが、本論の目的である。

第二章 いのちの重みを詠うこと

この章では、啄木と俵が詠んだ「自我の詩」を、詠出当時の時代背景を参考にして、読み解いていきたい。

近代短歌の夜明けはいつなのかという問題を考える時、一八九三年の落合直文による浅香社の設立を挙げるといふ見方が一般的である。具体的な活動として、題詠による作歌や風雅な趣向に対する批判を通して、自由と個性を希求し、近代短歌への扉を開いたとされる。落合門下からは、主観を重視する浪漫的な短歌を目指した与謝野鉄幹らが輩出し、鉄幹は『明星』を創刊して与謝野晶子らとともに浪漫主義短歌の全盛時代を築いた。

一九〇〇年代になると、北原白秋、若山牧水、石川啄木らの、『明星』から出た才能が開花した。同じころ、正岡子規が起こした根岸短歌会から、伊藤左千夫・長塚節らが輩出し、のちに創刊された『アララギ』からは、島木赤彦や斎藤茂吉らが出て、独自の歌風を確立し、大正期になって歌壇に確固たる位置を占めるようになった。

このような近代短歌の勃興期の歌人たちは、実際の作歌にあたって、どのような制約を感じていたのだろうか。近代短歌の主流をなす『アララギ』では、歌の対象となる事物をしっかりと見定めるなかで、言葉に置き換える際には、虚心に写し取ることを心掛けたはずである。

池水は濁りににこり藤なみの影もうつらず雨降りしきる

伊藤佐千夫

馬追虫の鬚のそよるに來る秋はまなこを閉ぢて想ひみるべし

長塚節

福寿草の鉢を置きおきかふる幼子や縁がはのうへに移る目を

追ひて 島木赤彦

ゆふされば大根の葉にふる時雨いたく寂しく降りにけるかも

斎藤茂吉

歌を詠んだ誰もが、眼の前に展開する現象を、こまやかに定型の中に収め切っている。同じ雨のことを詠んでも、伊藤は、池の上に垂れる藤の花房が水面に映らない現象をもつて、水面が定まらないほどの雨の勢いであることを表現し、夕闇の中で大根の葉に打ちつける雨音から、斎藤はそれが時雨であることを推察する。秋風がわずかに吹いてきたことを、馬追虫の鬚のそよぎに託して表現する長塚がいて、(早春に咲いて太陽を追い求めるという)福寿草の特性を教えてもらったためか、縁側の上でその位置が変わる日射しに合わせて、福寿草の鉢を動かすという、幼子の優しい心根を、島木は詠みこむ。多土落々の歌群であるが、「眼前に起きていることは一回限り(かもしれない)という迫力で、おのれの眼が捕らえたものを、文字に落とし込んで、定型の枠内でまとめるという真摯な努力の跡が、どの歌からも

はつきりと立ちのぼっている。それぞれの作品を、どこからどのように読んで、歌意そのものは決して揺るがないだけの強さを備えていることが明らかである。

同じ作者たちが、「生きる」ということを主眼に置いて詠んだ次の歌群では、その「一回性」からにじみ出す迫力が、揺るぎない迫力で、読者に迫ってくる。

世のなかに光も立てず星屑の落ちては消ゆるあはれ星屑

伊藤佐千夫

草臥(くたびれ)を母と語れば肩に載る子猫も重き春の宵かも

長塚節

隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり

島木赤彦

あかあかと一本の路とほりたりたまきはる我が命なりけり

斎藤茂吉

このような、明治時代中葉以降からの近代短歌に認められる歌意の強靱さを、「生の一回性の原理」の反映、と捕らえたのが、俵と同世代に属する歌人である穂村弘(一九六二〜)である。

「生の一回性の原理」とは、「誰もが他人とは交換できないへ私の生を、ただ一回きりのものとして引き受けてそれを全うする」姿勢のことを意味する。この原理にそって詠まれた歌を収める、五七五七七という定型は、「生の実感が盛り込まれた、いのちの

器」としての機能を發揮することになる(「短歌の友人」、河出書房新社、二〇〇七年)。

この業績によつて穂村は、第一九回伊藤整文字賞を受賞した。受賞理由は、「一九八〇年代以降の現代短歌の形式と内容の変化をとらえ、分かりやすく分析した」ことである。穂村によると、「生の一回性の原理」には支配力があり、その原理で詠まれた短歌は、ひとつのモードでしか読めなくなるといふ。たとえば、近代短歌勃興時にはなく、現代では当たり前のジャンルである漫画を例にとると、そのことがよく理解されるといふ。

現代の漫画雑誌には、スポーツ、ホラー、恋愛、ナンセンス、ギャグ、SF、サスペンスなど、さまざまなタイプ(これを、穂村は「モード」と呼ぶ)の漫画が収載されている。読者は漫画を読む前提として、どのモードの漫画なのかが予め頭に入っているので、例えばサスペンス漫画で毎回殺人事件が起こるのはおかしい、SF漫画で人類が火星に住んでいることは変だ、などとは思わない。一冊の雑誌に、異なるモードの作品が収載されているのは、ありふれたことだからである。

第三章 モノ化した言葉を用いて、いのちの歌を詠むということ

穂村が素晴らしいのは、「現代短歌界で起きている現象」を、このような「漫画雑誌で見受けられる現象のアナロジーではないか」という観点で捕らえ直したことである。すなわち、受賞理由となった「一九八〇年代以降の現代短歌の形式と内容の変

化」を、「一九八〇年代以降の現代短歌(界)に現れた作品」|| 現代短歌界で詠まれた、従来とは「異なるモードの作品」|| 明治時代以降の近代短歌界で主流であった「生の一回性の原理」以外の新たな原理によって詠まれた、新しいタイプの短歌作品」と読み替えるとともに、現代短歌界における歌人たちの活動の全体を「一冊の漫画雑誌」のように考えて、「新しいタイプの短歌作品」を、次のように分析した。

近年急速に進んだインターネット等のメディア環境の変化にともなう短歌的な「場」のオープン化を背景として、以下の傾向が顕著になってきたという。すなわち、①×私の実感に忠実であろうとするあまり、話し言葉そのまま、などという、修辞を欠いた口語の導入が進み、定型の枠中であつても自在な字句の分割を行ったり、字余り・字足らずを恐れないこと、などの結果としての「棒立ちの歌」が増える一方で、②×私の想いを、共感性の高い「うた」として表現する上で、必要な従来技法(句またがり、対句、序詞、体言止め、比喩、オノマトペ、など)を用いない、口語と文語のせめぎあいの形跡のない「短歌的武装解除」の歌も目立つようになつたという。

これら、現代短歌に共通する概念として穂村が提唱したのが、「生命」を、文字通り生身の一回限りの存在としてではなく、一度、言葉に換えることで、自由に何度でも扱えるモノとして扱う立場」である。さらに穂村はこの考え方に立てば、我々は「生の一回性の実感」を手放すことによつて、何度でも再生可

能な「モノとしての言葉」を手に入れたのである。このようなことの背景には、対象との接触体験が減少した生活環境の都市化や、バーチャルな感覚が増大した映像等のメディア環境の整備などの影響が考えられる。(「短歌の友人」)

モノ化した言葉は、自在に境界を越える。前衛短歌の時代に非難された、虚構を詠うことの闕も下がってくる。俵は、「恋」こそが自分の心を揺らす源であることを述べるとともに、恋の歌を詠むことについて、以下のように記している。

人を思つて揺れる心は、これからも私にとつて、大きなテーマだ。恋の歌は、死ぬまで詠みつづけたい。恋の歌については、「本当にあつたことなんですか？」ということをしげしげ聞かれる。歌が生まれるきっかけやヒントになる人は、決して架空の人物ではない。が、この歌集を読んで、思いつきり思い当たる人もいれば、身に覚えのない人もいるだろう。確実に「本当」と言えるのは、私の心が感じたという部分に限られる。その「ほんとう」を伝えるための「うそ」は、とことんつく。日記はできごとを記すもの、短歌は私の心が感じた真実を届けるための手紙でありたい。(俵万智・『チョコレート革命』あとがき、河出書房新社、一九九七年(筆者、大意要約))

さらに俵は、二〇二二年度朝日賞決定時のインタビューの中で、みずからの作歌技巧について、「恋愛の歌は、見せ方を考えたり、盛り付けやソースに凝つたりしなければアピールできない」と述べ、モノ化した言語を駆使した作歌態度を告白してい

る。こうした努力は、「現代短歌の魅力を伝え、その裾野を広げる創作活動に貢献した」という、朝日賞受賞理由にも通底していたことはいままでもない。

このようにみてくると、俵とは対照的に、啄木は「生の一回性の原理」に殉じた作品を積み上げた歌人であることが明瞭になつてくる。すなわち、「刹那々々の感じ」が浮かび上がってきた時、自分は何処で何をしていたかという、当時の情景を描写するとともに、そのような「感じ」を意識した「自分」の姿を、自分が考える「自分」、すなわち「自我」として、まず認識したことである。つぎに、意識の現象面である「心理」をあわせて描写することで、「感じ」を意識したその時々々の「自分」の姿は、「自分のこころ（の動き）」でしっかりと象られることになり、短歌の三十一文字という定型に出会うことで、現在まで読み継がれるかたちで残されることになった。また、このような「心理歌」を詠むことで、啄木は「心の動きの不思議」に目覚め、それを蓄積し、自ら長く愛惜することで、より深く「心の動きの不思議」を探るための手がかりにしたのである。さらに、歌中に詠まれた情景に、当時の社会情勢が濃厚に反映されていたことから、啄木の「心理歌」は、当時の国民生活をも映した、「生活歌」の側面も有することとなつて、国民の間での共有が進んだことも見逃せない。

次章では、俵の来歴を振り返るとともに、その歌群の軸となす「恋の歌」について、検証していききたい。

第四章 俵万智の来歴とその「恋の歌」

俵万智は、一九六二年二月三日、父・好夫、母・智子（のりこ）の長女として大阪府北河内郡門真町（現門真市）に生まれた。父は松下電器に勤める希土類の研究者であった。一九六六年（四歳）同府四条畷市、一九七六年（一三歳）福井県武生市（現・越前市）に転居。一九七八年（二六歳）、福井県立藤島高等学校に進み、顧問の先生に憧れて演劇部に入部して戯曲に熱中する。一九七九年（二七歳）の秋、交際中だった先輩の生徒から一方的に交際中止を告げられた。この失恋の痛手から、受験勉強が手につかず、成績も急降下。一九八一年春、学力考査も面接選考もない早稲田大学第一文学部に、指定校推薦で入学。一九八二年、佐佐木幸綱の「日本文学概論」という講義を聞いて以来、短歌に熱中した。一九八三年、角川書店の歌誌「短歌」の公募短歌に塚本邦雄・選で入選し、竹柏会「心の花」に入会。一九八五年の卒業論文は「短歌の連作」であった。

一九八五年の第三回角川短歌賞に「野球ゲーム」で次席、翌・八六年の「八月の朝」で第三回角川短歌賞を受賞。これらふたつの受賞歌群を含む四三四首を収録した第一歌集『サラダ記念日』を一九八七年に出版し、二八〇万部を売り上げた。刊行当時は、東京都町田市に在住。その後、一九九一年に第二歌集『かぜのてのひら』一九九七年に第三歌集『チョコレート革命』を出版。この頃の住まいは、都内の佃島。

二〇〇三年一月三日、未婚のまま人工授精で妊娠し、男児を出産（俵自身の弁による）。父親の名は非公表。男児の名前も非公表ではあるが、ニックネームは「たくみん」とされている。育児に奮闘するも疲れ、二〇〇六年には両親の暮らす仙台に転居。

二〇〇五年、第四歌集『プーさんの鼻』で第二一回若山牧水賞を受賞。

二〇一一年の東日本大震災後、仙台から那覇に移り、歌人仲間・松村由利子のついで、石垣島の崎枝集落に居を構える。二〇一三年、第五歌集『オレがマリオ』を出版。

二〇一六年、息子の中学進学を機に、宮崎に移住。二〇一八年、評伝風随想『牧水の恋』出版。二〇二〇年、第六歌集『未来のサイズ』で第五五回空賞を受賞。二〇二二年、朝日賞を受賞。

俵はこれまでに六冊の歌集を出版している。各歌集から、「恋の歌」を選んでみる。

愛人でいいのとうたう歌手がいて言ってくれるじゃないのと思っ

『サラダ記念日』（一九八七）

雨たたく室戸岬に立ちおれは未練とはなまよさしき言葉

『かぜのてのひら』（一九九一）

赦されて人は幸せになるものと思わず恋は終身の刑

『チョコレート革命』（一九九七）

「これもいい思い出になる」という男それは未来の私が決める

『プーさんの鼻』（二〇〇五）

母さんは合っていたのか人生に応え合わせはなくて海鳴り

『オレがマリオ』（二〇一三）

別れ来し男たちとの人生の「もし」どれもよし我が「ラ・ラ・

ランド」

『未来のサイズ』（二〇二〇）

俵は、穂村との対談の中で、自身の恋愛観について以下のよう語っている。俵と穂村は、ともに一九六二年生まれで同い年。俵が『八月の朝』で第三回角川短歌賞を受賞した際の次席は、穂村の『シンジケート』であった。二人が賞をもらった時期はバブル期と呼ばれ、テレビやゲームのCMの言葉が飛び交う明るさの中で、どこか不安感が混じり込んでいた時代であった。その時代から歌作活動を共有して来た二人ならではの本音のようなものがある。どこか不安感が混じり込んでいた時代であった。引用する。（KAWABE 夢ムック 文藝別冊 二〇一七年）

俵 恋愛的には損してると思っただけど、男の人って嫉妬深い人のほうが愛情が深いって勘違いするでしょ。

穂村 ああ、そのほうが執着してるって考えるね。

俵 私いつもそれで損してる。心が広いだけで、愛は浅くない

のにね。

穂村 嫉妬しろと言われてもできるもんじゃないもんね。嫉妬するなど言われてもやめられないように。

俵 何で嫉妬しないのと言われても、何ですの？することに理由があっても、しないことには大して理由がない。

穂村 所有欲とかないの？

俵 うん。だって無理でしょって思うし。所有することが目的じゃないわけじゃん。その人とい時間時間を過ごせればいいと思し、永遠に所有するとかありえないし、つまらない人を所有していてもしかたないし。

穂村 つまらない人を所有するなら、すばらしい人をシェアしたほうがいい？

俵 いい。断然いい。だってね、すばらしい絵画を家に所有して一人で見てる人とか許せないよね。そういうものは全世界の財産なんだから皆で見なきゃって。所有ってそんなに意味があると思えないな。穂村さんてさ、昔付き合ってた人と今でも繋がりがある？

穂村 ないね。どうして？

俵 別れたら二度と顔も見たくない人もいるじゃん。私はせつかく出会って好きになった人同士なんだからって思う。嫉妬の話と同様、百かゼロじゃなくて、五十くらいに着地してもいいよねと思う。

一読して、「生の一回性の実感」を手放すことによって、何度でも再生可能な「モノとしての言葉」を手に入れたふたりの対話であることがよく分かる。二人の対話の中で想定されている「すばらしい人をシェアする関係」の中には、単なる茶飲み友達的な関係を越えたものが含まれていることは、ある意味衝撃的である。人を好きになること、期せずして恋のライバルが現れて嫉妬心が湧き上がること、これらはいずれも、感情の次元での話である。対談で取り上げられた嫉妬の問題に即して、もう少し考えてみたい。

AがBのことを好きになったが、Bが好きなのはCである。

このような場合に、Aの中にCに対する嫉妬が生まれてくる。かりにAを俵とすれば、俵はBが好きなCのことを一切気に掛けずに、Bに向けて自らの気持ちを伝えるのである。Bが俵を振り向けば、俵とCとの間でBをシェアする関係が生まれることになるが、Cの気持ちについての想像は及ばないのだろうか。あるいは、Bが俵を無視した場合、俵の心は悲鳴をあげないのだろうか。他者を嫉妬するということの苦しさは、文学が長く取り上げてきた、大きな主題のひとつである。自分に他者を好きになる自由がある以上、他者のほうにも、自分以外の第三者を好きになる自由は、当然ある。自分が好きになった他者が、自分以外の第三者に好意を寄せていることが分かったり、そう想像できた場合に、どうしようもなく生まれてくるのが嫉妬である。ときには思いを寄せる相手に、自分を、その実態以上によ

く見せようとするなどして、それが失敗すると、自己嫌悪などの二次的感情が、嫉妬の苦しみに輪をかけたりますのである。

そもそも、ヒトの気持ちちを、交換可能な品物と同列に扱うことには、疑問がないのだろうか。そして、「モノとしての言葉」が有効な領域は、あくまで短歌を詠む場合に限られるのであって、実生活における応用とは峻別すべきものではないのだろうか。

ヒトの感情は、空の天気と同じで、その意志によってコントロールすることは出来ない。その意味で、感情に意志の自由はないのである。一方で、ヒトの行動には意志の自由がある。そして感情は、行動によって変化し得る。意志の力で感情を変えることは出来ないが、行動を介して感情に働きかけることは出来るのである。なかなか意思の自由にならない感情に対して、人類が培ってきた工夫のひとつが、「感情はそのままにして、眼の前のものごとに集中することで、行動に働きかけ、凝り固まった感情が動き始めるのを待つ」という心理行動療法的アプローチであり、もう一つの工夫は、婚姻などの社会規範を公的に認知することなどによって、そうした感情が生じかねない場面を外形的に封じ込めておくことであらう。

そうはいいいつも、俵にはこんな歌もある。

比べつつ愛しはじめているか我が靖国通りは今日も渋滞

『プーさんの鼻』

第五章 母となるまでの俵万智の歌

二〇〇三年一月三日、俵は男児を出産した。俵自身の弁によれば、婚姻関係にない男性との間での人工授精の結果、母になったのだという。当時の俵の心理は、島右近によるインタビュー記事の中で、以下のように紹介されている。『週刊女性』二〇〇二年二月二日号)

「チャンスがあれば子どもは産んでみたいという思いがありました。母からも「子育ては面白いわよ」と言われていました。

四〇歳のラストチャンス。迷いはありませんでした」

この記載だけでは、チャンスの中身がはつきりしないが、第四歌集である『プーさんの鼻』に収められた「卵」という章で、ある程度開示されている。

この章の冒頭には、歌人としての大先輩であり、戦後の社会的混乱の中で独身生活を送らざるを得なかった、富小路禎子によって詠まれた、以下の歌が掲げられる。

処女(おとめ)にて身に深く持つ浄き卵(らん) 秋の目吾の心熱くす

俵は、その返歌として次の歌を置く。

ヒトでありメスであること「卵」という言葉選びし禎子を思ふ

富小路と俵の歌の交換から始まったこの章には、以下のよう
な、人工授精という医療が行われる場で遭遇したであろうさま
ざまな場面の描写が続く（筆者抄出）。

不妊という悩み持たれたる女らが手つなぎにくる「子宝倶楽部」
励ましの言葉あふれるBBSみんな自分を励ましている

おずおずと私も書き込みしてみたり寂しき踊りの列に連なる

AIH、ICSI……ロボットの部品の「とき専用用語

排卵日に合わせて愛し合うことの正しいような正しくないよ
うな

我が内に二十四時間咲きながら立ち枯れてゆく花の一輪

BBS (Bulletin Board System 電子掲示板) とはネットワ
ーク上で、閲覧者が文字メッセージなどを書き込み、他の閲覧
者の投稿を読むことが出来る仕組みのことで、その仮想空間の
中で、不妊治療についての情報が交換されているようである。
俵は、そこに参加する自らを、「寂しき踊りの列」に「おずおず
と連なる」と表現しており、痛切な思いが俵の心を揺らしてい
たと思われる。

通常の不妊治療においては、段階的に治療のステップアップ
が行われる。まずは、排卵日を予測して性交を促す「タイミング
法」である。そして、内服や注射薬で卵巣を刺激して排卵を起こ
させる「排卵誘発法」、精子を子宮内に直接注入する「人工授精」。

これらで妊娠しない場合、卵子と精子を取り出して体外で受
精卵にしてから子宮内に戻す「体外受精」、受精が起こりにくい
場合には、一つずつの卵子と精子を用いて「顕微授精」を行う。

俵の歌にある「排卵日に合わせて愛し合う……」のは、排卵
日に合わせて性交渉をする「タイミング法」であるが、AIHや
ICSIといった、かなり複雑な治療法も詠われている。あえ
て純粋に医学的考察を加えれば、AIH (Artificial
Insemination of Husband) とは、文字通り、男性パートナーの
射精精子を洗浄濃縮し、排卵誘発等の処置を受けた女性の膣内
から子宮頸部に通して子宮内腔まで挿入したカテーテルを通し
て、子宮内に注入する「人工授精」であり、ICSI
(Intracytoplasmic Sperm Injection) とは、排卵誘発等の処
置を受けた女性の卵巣から採取した卵胞の中から卵子を取り出
して、その細胞質内にガラス管に吸引した射精精子を一個注入
する「顕微授精」である。体外受精の場合、女性は、毎日来院し
て注射をしなければならず、身体的にも経済的にも負担は大き
くなる。

俵の場合、「人工授精」と明言しているので、婚姻関係を結ん
でいない男性パートナーの協力を得た、事実上のAIHであつ
た可能性が高いと考えられる。しかしながら、実際に治療する
となると、それぞれが別の社会生活を営む、婚姻関係のない男
女の間であれば、互いの都合を合わせるだけでも大変だったと
思われる。しかも、一度で成功することは少なく、妊娠に至るま

で、男女双方が何度も医療機関にまで足を運ばなければならぬのである。

ふたりの関係は想像の域を出ないが、手掛かりはある。第四歌集『プーさんの鼻』には、「時差」という章が組まれている。その中から二首。

楔形文字を読めない吾と君に「目には目を」と舌語る法典

六年とう月日の長さ短さを計りて計りきれぬ水際

また、同じ歌集の冒頭「プーさんの鼻」という章には、出産後二日以内の心境が、以下のように詠まれている。児の父親とは一線を画して暮らすことを決め、シングルマザーで子育てしようと思ひ定めたようである。

どこまでも歩けそうなる皮の靴いるけどいいないパパから届く
もう会わぬと決めてしまえり四十で一つ得て一つ失う我が

第六章 母となつてからの俵万智の歌

さきに紹介した二〇二一年度朝日賞決定時のインタビューの中で、俵は、みずからの作歌技巧について、「恋愛の歌は、見せ方を考えたり、盛り付けや、ソースに凝ったりしなければアピールできないが、子どもの歌は、刺身で出せるが、それはあくまで新鮮なうち。そうすれば鮮度が味になる」と述懐している。

俵が歌の題材としてまず注目したのは、幼児の仕事であり、たどたどしい言葉遣いである。以下、『プーさんの鼻』から五首。記念写真撮らんとするにみどりこは足の親指飽かず舐めおり

あーじゃあじゃ、うんまーばっばー、この声がいつか言葉になつてゆくのか

こんもりと尻上げたまま眠りいる音子よ疲れた河童のように
何度でも呼ばれておりぬ雨の午後「かーかん」「はあい」「かーかん」「はあい」

まだ何もイヤなことなどなかつたにイヤイヤイヤを子は繰り返す

両親の暮らす仙台での平穏な日々は、東日本大震災で一変する。生活環境の変化が及ぼす子への悪影響を恐れた俵は、短歌界の友人が石垣島で暮らしていることを奇貨として、二〇一一年から二〇一六年までの五年間、島内の崎枝集落で暮らすことになる。人口は二二〇人ほどで、小中学校もあり、各学年に数名の児童生徒が在籍している。圧倒的に豊かな自然の中で子ども同士が存分に遊ぶ、それを集落のみなが見守るという環境が、俵のささくれたった神経を癒し、当時八歳だった息子も元気を取り戻した。崎枝の水が俵親子に合ったということであろうが、データ通信などで結ばれた「仮想関係」と、対面で直に接するリアルな人間関係との差を痛感したことが、長期滞在以上・永住未滿の石垣島での暮らしを支えたと思われる。以下、『オレがマリオ』から四首。

一年後の私はここで元氣だとあの日の我に言う名蔵(なぐら)

湾

中一も小一もいる鬼ごっこ小一専用ルール生まれる

子どもらはいかに現れくつろいで「おぼちゃんカルピスちようだろ」と言う

二年生四人の授業を参観す 子よりも多き蟬の鳴き声

仙台から石垣島へのあわただしい転居が落ち着くと、俵は、暮らしの周囲にある豊かな自然に目を向け始める。しかしながら、虫や鳥などを仔細に眺めることは、都会育ちの俵にとつては苦手だったようである。以下、『オレがマリオ』から二首。

「ケンカしちやダメ」と言いつつおさな子は蝶の交尾をほくし
ておりぬ

島に来てひと月たてば男の子アカシヨウビンの声聞きわける

虫たちにとつて交尾とは、天敵に捕食されかねない危険な行為である。羽ばたかねば移動できない蝶の場合、胴体の先端にある交接器で交わる時間は、ごく一瞬である。すぐに離れてしまう。雌の背の上に雄が乗る、動物でよく見られるタイプの交接よりも、双方が花の上で羽ばたきながら、お尻のほうから近づいて、一瞬、交接したと思つたら、すぐに別々の方向に飛び去つてしまふことのほうが多い。そのような危険な行為である交尾の最中、交接したまま離れない蝶を子どもが捕らえて、双方を離すことなど、まず考えられない。

アカシヨウビンの声を、来島して一ヶ月の子どもが、それと

聞きわけられるか、も微妙である。春から夏にかけて日本に渡来するアカシヨウビンは、「キョロロロ」とよく響く声で鳴くのですぐにそれとわかる。石垣島で聞いたのならリュウキュウアカシヨウビンであるうが、その鳴き声はアカシヨウビンよりもか細い。

島での暮らしが俵の心境を変えたものか、『Pーさんの鼻』で「もう会わぬと決めてしま」つた息子の父親らしき男性とも、福岡まで出かけて会つたらしい。以下、『オレがマリオ』から四首。

タクシーのように乗り込む 家族なら助手席に我、うしろに子ども

ドライブのコースならぬらかに組まれいてあなたの過去のデートを思う

こんな笑顔持っていたのか子は君に追いかけて抱きあげられて

夕暮れの水族館をめぐるゆく家族ごっこをエイが見ている

二〇一六年からは、息子の中学進学を機に、短歌界での交流という縁のあつた、宮崎での暮らしが始まる。これ以降、俵が詠む子どもへの歌は、息子との会話を巧みに組み込んだものが主流になる。以下、『未来のサイズ』から五首。冒頭の一首は、全寮制の中高一貫校に進学した息子の長尺言葉を、三句目以降にう

まく収めている。

相部屋の感想聞けば「鼻くそがほじれないんだ。鼻くそたまる。」
試験よくできたみたいだ今日の声「カレー食べすぎちゃった」
と話す

つむじとていう語を知らぬ子の解答の「おへそを曲げる」悪くは
あらず

不条理とは何かと問われ子に渡す石牟礼道子『苦海浄土』を
シャーペンをくるくる回す子の右手「短所」の欄のいままだ埋ま
らず

第七章 短歌における「私性」の獲得

眼の前で展開する「生の一回性」の現象を作歌の基盤に据え
て、定型の中で格闘することから生まれた強靱さを湛えた、明
治時代中葉以降からの近代短歌。これに対して、昭和から平成
にかけてのバブル期に進んだ「言葉のモノ化」は現実の体感の
衰弱を招き、言葉の次元では、現実と想像が等価であるかのよ
うな錯覚をもたらした。その結果生まれたのが、「私」の想いを、
修辞を欠いた口語のみで表現しようとした「棒立ちの歌」や、共
感性を高める上で有用な従来技法を用いない「短歌的武装解除」
の歌などであった。

「言葉のモノ化」へと時代が移る過渡期に位置したためか、俵
の歌にこれらの特徴はまだ軽微であり、その前段階ともいうべ
き特徴が、俵より三歳年長の歌人・川野里子によって、以下のよ

うにまとめられている。すなわち、①古語や枕詞と現代の日常
語とを並べて、違和感なく使いこなし、②定型の枠を守りつつ、
結句に【二音の動詞】プラス【五音の体言止め】などの自在な句
切れを導入し、③会話体や新しい固有名詞を導入したこと、三
点である。②の特徴は、独特のリズムを生み出し、③は、歌の題
材としての分かりやすさとともに「長尺言葉が定型のどこで切
れるか」の面白さを誘い、①は、「言葉のモノ化」に通ずる歌の
パターン化を通して、読者が、俵の歌に詠みこまれた情報を頭
の中で再現することを容易にしておき、『サラダ記念日』が歌集
としては例外的な売れ行きを示した一因になったと考えられる。
一見、モノ化した言葉を用いて詠っているようでも、近代短
歌における「誰もが他人とは交換できないへ私」の生を、ただ一
回きりのものとして引き受けてそれを全うする「姿勢で詠んだ
と思われるのが、『未来のサイズ』に収められた次の歌である。
「二年間金魚係の令和（れお）くん」の時代はたぶん来ない気が
する。T・T」

生き生きと息子は短歌詠んでおりたとえおかんが俵万智でも

『サラダ記念日』で世に出て以来、常に自らを励まし続けて
きたに違いない、俵の高い矜持が、息子との日常の触れ合いに
仮託して、堂々と宣言されている歌である。下の句に、俵万智と

いうビッグネームがなければ、そしてそのビッグネームと息子が親子関係にあることを、歌の読者が理解していることを前提にしなければ、息子の歌の四句目以降「時代はたぶん来ない気がする」と、俵の歌の初句「生き生き」との意味は全くつかめない、ある意味「棒立ち」感が漂う歌になっている。一方、これらの前提を理解しさえすれば、この歌は一転して、二重の歌意から成り立っていることが分かる仕掛けになっている。

すなわち、ほかの誰とも交換できない、歌人として活動してきた、自らのいのちの重みと、これまたほかの誰とも交換できない、息子のいのちの重みとを並べて詠い上げるといふ表面上の歌意に加えて、(一時代を築いた先輩歌人たる)俵から、(ひよつ子歌人たる)息子へ送られたエールという、もうひとつの歌意が潜んでいるのである。

このことは、「言葉」という存在の多義性を物語っている。文体や想いがパターン化したとしても、従来から受け継がれてきた序詞などの技法を駆使することによって、作者が表現したいことの核心は、「言葉のモノ化」を乗り越えて伝えられることを示した好例が、上記の引用歌なのである。

次章では、近代短歌で「自我の詩」を確立した石川啄木と比較しながら、俵万智が詠んだ歌の世界について考えていきたい。

第八章 まとめくそれぞれの「自我の詩」

啄木と俵の作歌動機は、それぞれ「刹那々々の感じ」と「心の

揺れ」であるが、俵は「人を思つて揺れる心」を重視する。啄木の作歌目的は「自分のいのちの愛惜」、俵は「作歌の副次効果として得られる丁寧な生き方」であるが、啄木のほうは切実である。

啄木が新聞紙面などで発表した、その日その日の「われ」の姿は、ひとたび文字の形で残されるやいなや、人々の脳裏で容易に再現可能となつて、啄木と同時代を生きる人々が、日々の厳しい暮らしの中にそのような愛惜のこころを織り交ぜていくことでわずかに慰められることを、啄木は「我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ」とまで述べている。その切実さは、文字として残されることで、世代を越えて長く愛惜されてきた。

俵の「副次効果として得られる丁寧な生き方」を目指した作歌方針の先には、「モノ化した言葉」の駆使を含めた「現代短歌の裾野の拡大」があり、今回の朝日賞受賞の評価にも繋がった。その受賞会見の席で「短歌を作ることで丁寧な生きられるようになる、ということが一番の魅力です。」と、自ら総括している。

啄木の作歌方針は、土岐哀果の歌集に寄せた「NAKIIWA RAIを讀む」(一九一〇(明治四三)年八月三日「東京朝日新聞」)に詳しい。(a) 歌の題材は、日常生活で誰もが経験するような「感じ」に求める。(b) 表現にあたっては、技巧も作為も装飾も誇張も加えない。(c) 忝心なしに三二文字という型の中に押し込めない。」の三点である。

俵の作歌方針は、動機こそ「心の揺れ」で、啄木の（a）に類似しているが、技法的には、第七章でふれた川野の要約に尽くされているように、定型という外枠は守りつつ、文体的には「句またがり」などの技法を凝らし、積極的に会話などの口語体を導入しており、啄木の方針（b）（c）とは相容れない。

自らの人生の質的改善を意図して歌を詠むという俵に対して、啄木のほうは、「二度とは帰って来ない」みずからの「いのちの一秒」を長く愛惜することに、その作歌動機を求める。多忙な日常生活を送る中で、次々に過ぎ去っていく時間。その慌ただしさの中にあつても、意図せず経験する、水泳であれば息継ぎのような時間が必ずあることに着目して、それを逃さないようにする手段として、歌の活用を思いついたのである。そうした「刹那」に心に去来する「感じ」を、素早く捕らえて文字に定着するために、「短詩型という歌そのものカタチ」に着目したのである。すなわち、「いのちの一秒」を素早く掬い上げるために用いる用語は、手間の暇のいらぬ日常語が最適という考え方なのである。日々の生活を送るだけで汲々とした時代、暮らしの糧を得ることで精一杯になりがちなのに、切羽詰まった社会に生きていても、古来から受け継がれてきた短歌という手法を活用することで、みずからの刹那のこころの動き（＝「われ」）を文字として定着させることの可能性に目覚めたのが啄木なのである。

冒頭で触れた「自我の詩」とは、「歌の作者自身が、短歌という形式を用いて、自らの姿を表現したもの」という三枝の評に

立ちかえれば、啄木も俵も十分な達成を果たしたことに疑いの余地はないが、「何かに対して反応する、自分の心の動きを見つめる」啄木に対して、「何が自分の心を揺らしたのか」に関心がある俵との差は、小さくない。ふたりが肉薄した「自我の詩」の間に、なぜこのような距離が生じたのだろうか。

自分の中を刹那によぎる「感じ」を、「自分の意識」の上に投影された「自分のいのち」と見做すことになる。その時々の方針（すなわち、「自我」）について考えることになる。その時々の実感を、短歌の形で素早く定着させておくことを続けると、その時々々の「自分のこころ」が文字という形として残り、「生の一回性の実感」が、確かな形で自分の中に積み上がってくる。それは、「他人とは交換できない私の生」を実感することであり、「感じ」を歌にして残すことは、「ただ一回きりのものとして引き受けてそれを全うする」姿勢そのものになる。そうした実感のもとに詠まれた歌は、すなわち「自我の詩」ということになって、「生の一回性の原理」とは分かちがたく一体となったものになる。

その意味で啄木の歌は、「自我の詩」そのものである。

では、「生の一回性の原理」を手放したところでは、どのような歌が可能になるのかと言えば、「モノ化した言葉」を駆使した立場からの歌で、極端な場合には、経験していない出来事を虚構の私が詠うことも可能となる。そこまで行かなくとも、高度な比喻や句またがりなどの活用や、会話体や固有名詞、大胆な

口語の導入などの、俵の作品にはありふれた技法となっている。そうした技法が骨肉となった俵が、東日本大震災後に詠んだ歌を、『オレがマリオ』から引用してみる。

「震度7!」「号外出ます!」新聞社あらがいがたく活気づく
なり

電気なく水なくガスなき今日を子はお菓子食べ放題と喜ぶ

まだ恋も知らぬ我が子と思うとき「直には」とは意味なき言葉

二首目、三首目に句まがりが見られるほかは、一首目と二首目の会話体は字数の範囲内。目を引くのは、一首目の「あらがいがたく」、二首目の「お菓子食べ放題」、三首目の「恋も知らぬ」という、言葉の選択である。内容そのものは平易だが、これらの句には、俵の全体重が乗せられたような切迫感がある。「モノ化した言葉」を駆使した以下の一首と比べてみると一層明らかになる。

焼き肉とグラタンが好きという少女よ私はあなたのお父さんが好き

『チョコレート革命』

その混乱を経て石垣島に落ち着いた後、心境の変化があったのか、会わぬと決めていた息子の父親らしき男性と会ったらしいことは、すでに第五章でふれた。

こんなことが嬉しいなんて旅行鞆ひよいとあなたに持ち上げられる

『オレがマリオ』

初句に字余り置くことでゆったりとはじめ、表現の核となる旅行鞆を二句目に据えて、その両脇を父親らしき男性の動作と、母親である俵の感情で固めるといって、手堅い手腕でまとめた一首の底には、シングルマザーでの子育てを選んだ自らの意志の哀しさを潜ませて、みごとな「自我の詩」になっている。

その時々、自らの「行為」に付随して生まれてくる「感じ」を、「いのち」の発露として「認識」した「われ」が、歌という形にして残すことを通して、「このろの(動き)の不思議」に開眼した石川啄木。とくに「恋」を題材にした場合、に、「モノ化した言葉」を駆使しつつも、表現が深化する俵万智。ふたりは、それぞれの道から「自我の詩」という名を持つ山の頂を目指したのである。

涙はだれのものか？ 誤字か誤解か？？

川口俊和「この嘘がばれないうちに」(サンマーク出版2017年発行) をめぐって 外山 聖武

はじめに

手書きなら間違えないであろう字も、ワープロソフトの誤変換でそのまま見過ごされることはメールなどではままあることである。出版された本の中にも誤植を見かけることがかつてより増えた気がする。こんなことがあった。

版を重ねたラノベの単行本である。図書館で借りた。読み進むと、何か文章がつかまらない。人名が矛盾する。でも納得いかなぬままに読み終えた。後日、再びその本を借りたことがあった。その部分の人名を誰かが訂正していた。それならばつじつまが合う。校閲の見落としであるんだなと思った。このようなことが、純文学の本でもあった。読み替えて読むことに慣れてしまった。トラウマとなり、この本もと考えてしまった。

この作品の場合は、作中人物の一字名前であり、一見文章では違和感がない。しかし名前の取り違えてないかと考えると、印象は違ったものとなる。

一、誤字から出た真実？ 「数(かず)」か「要(かなめ)」か

川口俊和「この嘘がばれないうちに」 p. 232 10行

『店内に三つある柱時計の真ん中の時計が、午前2時を告げる鐘を鳴り響かせた。』

真夜中の店内は、いまだ静まりかえったままである。(中略) 要は今日も数の届けた小説を静かに読んでいる。

数(*)はまるでこの喫茶店の絵の中に溶け込んでしまった無機質な静物のように動かない。

(1行あけ)

ただ、その類(*)からは一筋の涙がこぼれ落ちていた・・・』

*と(1行あけ) 引用者記入

喫茶店の閉店時間は午後八時である。クリスマスの夜なので早めに店を閉めた。それから後片付けをしたとしても、せいぜい九時十時には終わるだろう。それから四時間以上も、ウェイトレスである数(かず)は、誰もいない店で要(かなめ)⇨実は数の母親の幽霊を見守っていたのだろうか。数の涙の意味は何だろう。

不自然ではないか。これは「要」の誤植ではないか？

二二 作品のテーマ

「数」をあえて「要」と読み替えてみる。

本を読んでいる幽霊である要、薄暗い店内で静物のように動かない。無表情である。ページをめくるときは動くけれど。一晩中、店の定位置の座席に座っているのは当然である。地縛霊だから。しかし、外界の店の中の出来事の間接的な幽霊である（注一）。昼間過去に行ったことで幸せになろうと立ち直った客の姿をわかっている。そして、要は自分のことを気にして幸せになろうとしない娘の数のことを心配して、涙を流す。それが次の話での要の昇天につながる。

注一（要が外界のことに関知しないわけではなく、計（けい）（マスター流（ながれ）の妻）のために席を譲り、未来へ行くのを後押しするシーンが第一巻第四話 p. 299 にある。）

いやそれでは単純すぎる。やはり「数」で、ずっと見ていたか、または夜中に起きて、店の要を見に来た。気持ちが高まり、数が固まって塑像のように母を見つめているという情景である。母への想いからつい涙を流す。四時間、気になるけれど。

「その類からは一筋の涙」これは、二人のどちらにかかるのだろ。

舞台演劇の脚本演出をしている作者なので、一幕ものである。この喫茶店では、ある席に座り、数がコーヒーを淹れると、そのコーヒーの湯気とともに過去未来にタイムトリップできるという。しかしいくつも面倒なルールがある。その一つが、ある特定の席でなければならぬ。その席にはいつも本を読んでいる女性が座っている。その人がトイレのために席を外した時がチャンス。そのすきに座ってコーヒーを淹れてもらえばタイムトリップできる。

そのコーヒーを淹れることができるのは、マスターである流のいとこの「数」である。そして、ルールとして、過去に行ったとしても、過去は変わらない。現実も変わらない。例えば事故にあうことがわかっていたとしても、それを阻止しようとしたり、助言しようとするやと事故は起き、現実には変わらない。亡くなった人は生き返りはしない。それでも過去に行く意味は何か、全体のテーマである。

さて、二巻目の作品テーマは、過去、未来にこだわりのある人が、「幸せになることだよ」というメッセージで立ち直るエピソード集である。

また、タイムトリップできる席にいる白いワンピースの女の幽霊の素性が、徐々に明らかになる。実はその人は、数の母親の要である。そして、七歳になった数が初めてコーヒーを淹れた人が母・要である。要は夫に会いに過去に跳んだ。しかし、別れ

そびれたか、戻ってこなかった。幽霊になってしまった。

母はいつも幽霊として目の前の席にいる。数は、私が淹れたから、p. 230 2行「お母さんを殺してしまったのは、私・・・」と罪悪感にとらわれて、「私は幸せになれない」とこだわるようになる。

ここで、この巻のメインテーマとの関連が出てくる。過去にこだわる人に対して、幸せになっていいのだ。過去は変わらないけど、未来は変えられる。幸せになっていい、と。

第一話 p. 96 14行

(流は)「俺は、お前も幸せになっていいと思ってる・・・」

p. 98 15行 残された数は、静かに小説を読むワンピースの女を見つめていたが、ふいに、

『「ごめんね、お母さん、私、まだ・・・」とつぶやいた

第二話 p. 176 13行

(悩んでいた数に寄り添い、美術への目を開かせた絹代の息子がタイムトリップして過去から帰ってきて、数に)

「母が・・・」(中略)「あなたにも幸せになってほしいと・・・、言っていました」と告げ、この喫茶店を後にした。

第三話 p. 228

(亡くなった人が生きている人に幸せになれというエピソードがあり、流は数に)

「要さんも、同じ気持ちだと、俺は思う・・・」

と独り言のようにつぶやいて奥の部屋に姿を消した。

過去にこだわる数に周囲の人も氣遣っている。メッセージを送っている。

三、数である場合

この巻のサブテーマで、数さんも幸せになっていいといわれて、私は幸せになっていいのかなと悩んで、このシーンになる。

「無機質な静物のように動かない。」クリスマスツリーが点滅するだけの店に、四時間以上。長すぎるのではないかしら、目の前の母・要を見ていた二二年間。七歳の時から二十九歳の今まで。思い返すことはたくさんある。涙は、「数」の中でお母さんに問いかける涙。いいんですね、幸せになっても・・・

四、要である場合

数はここにはいない。要は、地縛霊なのだから、毎晩ここでひとり過ごしている。丑三つ時、午前二時頃でもいつもの風景である。灯りの落ちた店で本を読む。目が悪くなるとか読めるのかなという下世話な想像が入るが、それはさておき、要は一日を振り返る。その日の昼間の出来事として、未来にタイムトリップした人が、過去にとらわれなくていいんだという事を、かつての恋人である女に言い残すという話があった。それを回想し、また再三伏線として、数は幸せになっていいんだよと様々な関係者から声を投げかけられているのに、数は要のことを気

にして幸せになることをためらっている。まだこだわっている。それを悲しんで流す涙。「要」は私のことを気にしなくていいのに。娘である数のことが気がかりで、私も幸せになれない。その涙。

五. 4話目、そして要の昇天

〔常連客の〕清は、「・・・あなたは幸せになっていいんです」

(p. 298 11行(それを受けて)「私・・・」(略)「幸せになっていいのかな?」(p. 300 9行)

そして、p. 301 11行目

「私、幸せになります。」と嬉しそうに言った。

すると、要が小説に視線を落としたまま、優しくニコリとほほえんだ。その笑顔は、生前、数に向けられていたままの笑顔であった。

「おかあさん・・・」

数がそうつぶやいたその瞬間、要の体が淹れたたのコーヒーから立ちのぼる湯気のように天井に舞い上がった。

素直に「数」で、自分の心にけじめをつけられたという涙と考えてもいいし、「要」が自分を気にして幸せになろうとしない数のことを思い、涙を流す。どちらの解釈も成り立つ。文脈的には、数のままでいいのだろうか?深夜四時間以上もじっと母の要を見つめているというのは気になるが。

六. 作者からの回答

向こう見ずに、また大胆にも作者に twitter で問い合わせをしました。図らずも、そして異例にも、そして何と、ていねいな回答をいただきました。twitter なので、字数制限があり、三回に分かれています。

川口俊和のつぶやき twitter 22.4.8

「本の解釈は読者様の自由だと思っています。小説はその部分において映像よりも自由なのが魅力なのかと。ただ、このシーンについては具体的に質問していただいたのであくまで作者としての立場でお答えするとその人物は「数」で描きました。」

誤植ではというのは深読みすぎで、数でよかったです。時間の長さについても答えていただきました。

「数というキャラクターを生んだ時に彼女はこのあまり客の来ない喫茶店で何時間も要と二人つきりという時間を過ごしています。時には朝から晩まで。実質4時間は数の体感としては2分3分、もしくは止まったような感覚ではなかったかと思われ。その意味で無機質な静物という表現にしました。」

なるほど、この観点はなかった。毎日、客のいない時間が多い店で、母を見つめている。四時間も長いわけではない。もっと長い時間を数は要とこの店で過ごしている。

「ただ、解釈として要でも間違いはない。作者としてはそれもアリだと思ってるのが正直な気持ちです。作者が答えを言っただけで、興が削がれる」ともなれど、思うのでこの辺りで終えておきます。普段はこのような返答はしませんが出版社にも似た質問が来ていたので答えておこうと思いました。」

最後の一行の涙の部分でしょう。文脈からは数だけでも、一行空いていることから、要としてもいい。そういう意味で、「解釈として要でも間違いはない」となると思います。

終わりに

ネットニュースや書き込みでは、誤字が目立つ。誤変換や変換ミスの面白さを扱ったサイトさえある。そして、出版された本でも校閲漏れで、明らかに違うなあというものを最近をよく見るようになった。今回も「誤植だらう？」ということから間違った解釈をしてしまった。

そして、「涙を流したのは誰か？」と一点に絞って考えると私の解釈では、数であるより、要が最後のダメ押しのように、「数は幸せになっていいんだよ」の涙と考えたほうが、そのあとの要の昇天につながっていいのではと思う。

最後に、誤字についての出版物への不信から間違った深読みをしてしまったにもかかわらず、御多忙の中、愚問に真摯に向き合って、誠意ある回答をいただいた川口俊和様には深く感謝

いたします。

参考

川口俊和のつぶやき twitter 2022.4.8

「クーヒーが冷めないうちに」サンマーク出版 2015.12.6 発

行 ISBN978-4-7631-3507-0

「この嘘がばれないうちに」サンマーク出版 2017.3.10 発

行 ISBN978-4-7631-3607-7

「思ひ出が消えないうちに」サンマーク出版 2019.9.25 発

行 ISBN978-4-7631-3720-3

「やよならも言えないうちに」サンマーク出版 2021.9.20 発

行 ISBN978-4-7631-3937-5

YOUTUBE 舞台「クーヒーが冷めないうちに」日本語字幕付き

DVD 「クーヒーが冷めないうちに」TCエンターテイ

メント (BBS) 2019 年

監督塚原あゆ子 主演：有村架純

了

小説は応募七篇。中で年令の高い作者の一篇が印象に残った。

畠田農「やくたたず」は学校嫌いの生い立ちの漁家の子が住み込みで入った自動車整備工場の先輩など、人との出会いをきっかけに思わざる転身の機会を得て、郷里の小学校の教師になって戻るまでの半生を描く。人にも言うのを苦手とする役立たずの身が与えられた仕事や場所に一生懸命務める姿が、周囲の人物の好意を導いて自分の場所を得てゆく様子が、自然な調子で後味よく描かれている。入選歴十分の作者にはもう少しメリハリつけた構成の工夫が欲しかったが、作者の分身らしい主人公の描き方にこれまでにない創意も感じられた。

外山聖武「カノツサ風地政学講座」『ロシアのウクライナ侵攻』は、1部でロシアのウクライナ侵攻をめぐる近現代の地政学的状況を概略し、2部はプーチンの視点で

ウクライナ侵攻の意図を考える。その現代史の見取り図はなかなか視野広くおおむね妥当にまとめられて肯けるが、一般的な理解の範囲を出るものはない。小説としての応募というところで「ドラえもん」の登場人物に見立てた趣向に期待したが、小説的な人物造型や見立てに結びついてゆく書き方にはなっていない。一方その自在な語り口は、エッセイとして評論部門で読む方が、より所を得たかと思わせる。というところで上記二篇、それぞれ注文はつくが、その筆力を入選作として評価した。

佐藤健「HD計画」も印象に残った。定年退職して函館ドックらしい造船所に再就職した海上自衛官の目で、そこで造船されるHD計画と呼ばれる海上自衛艦を中心に、函館近海に飛来するN国の弾道ミサイルの今日的な話題をとりまぜて描く。函館山の地下の秘密の建造ドックからコンピュター制御の最新鋭艦が浮上してN国の弾道ミサイルを迎撃するというスリリングな展開は、小学生の修学旅行から始まる丁寧な記録的な文体では予測がつか

かない面白さがある一方、その均一的な文体が単調で、作品としての書き足りなさの印象ももたらしている。いろいろ可能性を感じさせる作品だが、佳作としての評価にとどめた。

ほかに女主人公の描き方にもう少しメリハリつけたかった『紫陽花の陰』、変わった友だちのことを書いた「ゴールドケース」にも読ませるものがあつた。「レイン」は発想の面白さを生かすしきれなかつた。

評論、水関清「倭万智の研究」石川啄木という座標軸を置いて「はなかなか力の入つた評論で興味深く読んだ。作者は「自我の詩」という観点で近現代の短歌の特徴を定義し、その先駆的な存在として石川啄木をとりあげ、その二度とは帰つてこないのちの一秒」を作歌動機として世に出た啄木と、七七年後自らの微妙な「心の揺れ」を作歌動機とした「サラダ記念日」で世に出た倭万智を対比的に論じている。啄木などの「いのちの重み」を「生の一回性の原理の反映」ととらえた穂村弘はさらにその原理を手放すことで「再生可能なモノ

としての言葉を手に入れる」ことになり、そこから俵万智らの「本当のうそ」を歌った「サラダ記念目」などが生まれることになる、という文脈の中でヒトの気持を交換可能なものとして扱うモノとしての言葉への作者の観点が示される。論はいろいろ曲折し、読みやすくないが啄木と俵の対比がそれぞれの「自我の詩」として通底するという結論は肯ける。入選作として評価した。

外山聖武 「涙はだれのものか？誤字か誤解か？ 川口俊和『この嘘がばれないうち』をめぐって」は作中の文章の誤字について意識するあまり、間違って深読みして作者に問い合わせ、作者から回答を得た事情について書いてあるのは興味深いが、肝心の対象作品について読んでいない読者を想定した書き方になっていないのが弱い。タイトルがそのまま読者の疑問になっている。川口作品への興味をひかれるものはあった。

『賢者の愛』と愛の本質について』は山田詠美作品についてまとまりよく書いて

いるが2枚の文章で読書感想文の域にとどまっているのが残念だった。

ウクライナ戦争と俳句

末永 玲子

国際交流に関心があり、肌の色、言語、文化が違って地球人として交流を深め、平和な世界を子供たちに残したいとの願いで昨年は「交流が世界の人々を結ぶ絆に」と題してノンフィクションの部に投稿した。ところがなんとということか。2月24日ロシアのウクライナ侵攻という極めて深刻な戦争のニュースが飛び込んできた。本当に残念なことだ。人間は歴史から何を学んでいるのだろうか。憎しみはどこかで断ち切らなければ同じこととの繰り返し。勝つても負けても人が亡くなり、悲しみにくれる人を沢山生み出す。そのうえ地球を破壊することになる。ただでさえ地球は病んでいる。地球の温暖化、気候変動、オゾン層の破壊、酸性雨、塩害、砂漠化、森林破壊、海洋汚染、海洋ゴミ、水質汚染、大気汚染、自然災害、人口爆発、水資源の危機、食料問題、生態系への影響、外来種の侵入、ゴミの埋め立て問題、放射性物質廃棄問題、土壌汚染、エネルギー問題、採掘などと問題は山積みだ。この戦争によって地球の抱える問題はさらに深刻化するだろう。最悪の場合は核戦争の恐怖さえもある。

私は「ロシアのウクライナ侵攻」というニュースが飛び込ん

でくると直ぐ、フィンランドからの留学生、ヴィオレッタを思い出した。交換留学生として来ていた彼女はエストニア語、ロシア語、フィンランド語、英語の4か国語を話すことが出来た。彼女の母国はエストニアであった。エストニアはラトビア、リトアニアと共にバルト三国として1940年にソビエト連邦に併合され、ロシア語を覚えなければならなかった。歌だけは母国語が許されていたそうだ。彼女の家庭はいつどのような理由でフィンランドに移住したのかは分からないが、フィンランドではフィンランド語を話し、テレビのサブタイトルは英語なので英語も覚えた。生きるために4か国語を覚える必要があった。その後1991年9月にバルト三国はソビエト連邦からの独立を果たしたが、その独立を勝ちとった方法、それは歌だったとのこと。エストニアは独立への想いを歌で表現する「歌の祭典」を地道に定着させていて、1989年エストニア、ラトビア、リトアニアの首都までの約640kmを、200万人超の人々が手をつないで「人間の鎖」をつくり、歌を歌うことで独立を訴え、1991年に独立を成し遂げた。彼女が来日したのは2008年だったのでエストニアは独立していた。しかしフィンランド

の学生として来ていた。彼女はフィンランドですすでにご両親と平穏な生活を送っていた。だが彼女のお土産はエストニアの本だった。エストニアの歴史、文化、美しい豊かな自然満載の本であった。彼女の苦しみよりも、4か国語も話すことが出来る彼女に感動した。彼女の心の傷より、エストニアの歴史の悲劇を知識として知ったというだけだったように思う。彼女はとても美人でポーランドの美人コンテストでも賞を取ったとのこと。

髪は金髪でストレート、スタイルは抜群、目はブルー、肌は透き通るようであった。ダンスも上手だった。彼女を旧函館区公会堂へ案内し、衣装館で衣装を借りた。彼女が選んだのは真っ白でシンプルなドレスとティアラであった。本当にお姫様のようなだった。それを着て20分館内を散策し、写真を撮った。後で公会堂から「彼女の写真をホームページに掲載したいので許可を取って欲しい」との連絡があった。もちろんOKでした。彼女と一緒にフィンランドの大農場の娘アンもホームステイしていたが、彼女は真っ赤なドレスにティアラを身に付け、かわいらしいお姫様になった。清楚な姫と可愛い姫の二人を連れて歩く観光客の目を引き、誇らしく嬉しかった。二人の写真は公会堂のホームページを暫く飾っていた。今もフェイスブックでヴィオレッタと連絡を取り合っているが、良き伴侶を得て、二人の女の子にも恵まれ幸せに暮らしている。

しかし2月24日のロシアのウクライナ侵攻以後、リアルタイ

ムで戦場の惨さ、空爆を見る度にヴィオレッタのことが思い出され、彼女の心の叫びが伝わってくる。

また我が家にはウクライナの学生、ブラッドも滞在したことがある。ウクライナからの留学生として来ていたが、ウクライナ語は全く話さずロシア語であった。ウクライナ語を話す人をちよつと軽蔑というか、蔑んでいる雰囲気であった。彼の出身はドネツクであった。

1991年にソ連が崩壊し、ウクライナは完全に独立国となり、ウクライナ東部はロシアの武力支援を受けた親ロシア勢力区域であり、彼の町はまさにロシア語を母語にするドネツクであった。日本人には理解できない複雑な問題が絡みあっているのを感じた。彼の家庭は豊かであった。彼が日本に来たのは2012年で16歳であった。彼の趣味はエレクトリック・ギターとスポーツでプールやジムに通い、英語は英国出身の先生ばかりの London school に通っていた。父親はオイルや車の潤滑油を売る会社を経営、母親はドネツクで有名なビルヂング・カンパニーのダイレクターであった。家族は活動的で、タイ、ポーランド、エジプト、トルコ、チュニジア、チェコなど色々な国を訪問していたし、彼はできるだけ色々な国の文化や歴史、伝統的な食を知りたいという意欲的學生であった。祖父の一人は田舎に大きな庭のある家に住み、もう一人の祖父は大きな農場を持

ち、養蜂業を営んでいて、夏休みには祖父の手伝いに行くとのこと。この蜂蜜は向日葵からとるのだと聞いてとても驚いたのが印象に残っている。日本はアジアで最も発展している国なので、日本の文化や歴史に触れたい、最先端のテクノロジーを学びたいという動機であった。

彼の印象的な思い出は、函館ハリストス正教会を訪れた時の彼の熱心な祈る姿と、その時「お母さんはなぜスカーフをつけないのか」と質問されたことだ。

2月24日のウクライナ戦争勃発以後、ブラッドのことが気になっていいる。ブラッドはどうしているだろう。彼とは連絡がとれていない。

実のところ私はこの戦争が起きるまでウクライナについては穀倉地帯、向日葵畑くらいの知識しかなかった。日本人には理解できない複雑な問題が気になり、ウクライナの歴史を調べてみた。

ウクライナの歴史

・BC7世紀 .. スキタイ民族

キンメリア人は、牧畜をしながら鉄の生産技術を発展させた民族。紀元前7世紀にかけて小アジアに侵攻し、やがて東からやってきたイラン系遊牧民族のスキタイ人に敗れる

・AD8世紀 .. ルーシという国が誕生し、キエフを首都に。
←

キエフは882年にバイキングの手に落ち、キエフ大公国を統治したリューリク朝の都に。ヨーロッパ最大の国へ成長。(キリスト教が国教)

・AD13世紀 .. モンゴル軍によりキエフの陥落。モンゴルの支配下に

・AD14世紀 .. ルーシ王国はリトアニア大公国とポーランド王国によって分割。北部・中部はリトアニア、西部はポーランドが分割支配。国境地帯はこの国にも所属しない「荒野」。後にウクライナと呼ばれる。ウクライナとはロシア語で「辺境」を意味する。モンゴルは撤退。

・コサック国家樹立 .. リトアニア大公国とポーランド王国に虐げられてきたウクライナ地区の人は自分のアイデンティティを築こうとコサック武装集団を結成し、タタールと手を結びポーランドに勝利し、コサック国家樹立。

・AD16世紀 .. ウクライナはポーランド王国に併合される。(タタール裏切りのため) ウクライナ・コサック武装集団にフメリニツキーという強い人物が現れ、独立を目指しモスクワに

守ってもらおうとモスクワと協定を結ぶ。しかし夢叶わぬうちに死亡。(ウクライナのフメリニツキー評価は「英雄」「モスクワの支配下へ導いた」という二面性がある)

・AD 18世紀 … ピョートル1世が現れ、中央集権化と軍備の強化。モスクワをさらに強力化し、後のロシアにする。そして大北方戦でスウェーデンを制する。ここでピョートル1世はロシアを大ロシア、ウクライナを小ロシアとして統括する。しかしウクライナを8割がロシア、2割をオーストリアが統治、後の悲劇へ繋がる。

・AD 19世紀中期 … ロシアはクリミア戦争でトルコに負ける。トルコのバックにはイギリス、フランスがいて、ロシアはヨーロッパの工業化に愕然。ロシアはすぐ工業化、鉄道に力を入れ、パン倉庫のウクライナも工業化する。

← 急速な工業化の結果、劣悪な労働環境、資本家と労働者の貧富の差を生む。

← 1917年 … ロシア革命
第1次世界大戦

・連合国(フランス、イギリス、ロシア)と中央同盟国(ドイツ、オーストリア)の戦い。ウクライナの8割ロシア、2割オースト

リアが統治のため、ウクライナは自国民同志の戦いとなる

・1917年 … ソビエト政権が成立

・1920年 … ポーランド・ソビエト戦争開始。ウクライナは戦場となる。

・1922年 … レーニン登場。ソビエト連邦結成。ウクライナはソ連の一員の共和国となる。

・1932年—1933年 … スターリン独裁下でウクライナはモスクワへ食料を取り上げられ大量の餓死者をだす。ウクライナにとって文化・宗教も破壊され地獄の時代となる

・1939年—1945年 … 第2次世界大戦

連合国陣営—イギリス、アメリカ合衆国、ソビエト連邦、中華民国、フランス

日独伊三国同盟—ドイツ、日本、イタリア

ドイツ・ナチスのソ連侵攻をウクライナはスターリンの恐怖から逃れられると歓迎ムード。ところがウクライナに住んでいたユダヤ人を大虐殺。またソ連はドイツにたいして焦土作戦をし、ウクライナの工場、建物を破壊。

・1991年 .. 第2次世界大戦後、ソ連はアメリカとの競争、経済混乱、社会主義の矛盾、そのうえチェルノブイリ原発事故（ウクライナ）まであり、抑えきれなくなった。ゴルバチョフが最後のソビエト連邦の大統領となり、

・ソビエト連邦は崩壊

・ウクライナは独立

・ワルシャワ条約機構解体

（注） NATO（北大西洋条約） 継続

《ロシアにとって気になること》

・昔のソビエト連邦だったエストニア、ラトビア、リトアニア、ルーマニア、ブルガリア、アルバニアモンテネグロ、クロアチア、北マケドニアなどが次々にNATOに加入。

ロシアは

・寒すぎるから、凍らない港が欲しい

・広すぎるから緩衝地帯が欲しい

・ウクライナの欧米への接近

《ウクライナを失いたくない理由》

・ウクライナは凍らない港、ヨーロッパへの水路である黒海の北にある

・ウクライナはロシアとヨーロッパの狭間にあり、緩衝地帯として必要

《ウクライナが気になっていること》

ウクライナの東部地域は親ロシア派が多かったこともあり、「ドネツク人民共和国」「ルガンスク人民共和国」と独立を名乗りでる。

← 当然ウクライナは認めず、内戦状態に発展

← ウクライナは、和平プロセスであるミンスク合意を結んだが落ち着かない。

← 2020年に停戦合意に至るが、2021年に入った頃からまた衝突

先日、国際俳句交流協会の本部に電話をかけると「ウクライナでは地下室に身を隠しながら俳句を作っている俳句愛好家がいる」と中日新聞で報道されたのよ、とのこと。これを聞いて私は以前ある本で「戦時中、海外に送り出された兵士が戦地で人間らしい楽しみとして俳句を詠んでいた」という話を思い出した。その本によると「紙も筆記用具もなく、砂浜に俳句を書いた。それが唯一の楽しみだった。俳句に助けられて戦火の苦しみに耐えられた」というのである。今となってはその本の題名も忘れてしまったが、あまりの悲惨さにこの話が忘れられなかった。また昭和初期から日本は常に戦時体制であったが、満州

はじめ東南アジアの戦場では兵士たちは俳句を詠み、戦争という異常の中の日常を記していたということも分かっている。かつて内閣総理大臣を務めた中曾根康弘氏は、実際に戦地で激しい戦闘を体験した旧日本軍兵士の一人であったが、戦争の体験から「戦友を焼く鉄板かつぐ夏の浜」の句を遺しているのは有名なである。俳人の鈴木六林男も戦争体験者で「負傷兵のしずかなる眼に夏の河」「銭湯に眼つむり笑い上陸兵」など詠んでいる。

また令和4年函館市文学館文学の道しるべ第1回「箱館戦争の旧幕臣たちが遺した詩歌とその背景」講師田原良信氏（市立函館博物館友の会会長）の講演も思い出された。田原良信氏によると箱館戦争中에서도咬采園で句会が開かれ、俳句が作られていたという。例えば

中島三郎助（箱館奉行並）

「われもまた 死土で呼ばれん 白牡丹」 俳号（木鶏）

甲賀源吾（軍艦回天艦長）

「和田津海の 底にも咲か 桜鯛」

土方歳三（陸軍奉行並）

「たたかれて 音のひびきし 齋かな」 俳号（豊玉）

川村録四郎（會計奉行）

「包丁の 切味見せん 初鱈魚」

伊庭八郎（第二大隊長）

「猛る気の 満て勞れし 若鷄かな」

また7月17日の夕刊には「日本のマンガが激戦地に癒し 恐ろしい現実から逃避」という記事もあった。また新型コロナウイルスによる世界的なパンデミックが医療現場の混乱を招き、ご自分の身を削って、家族が受ける偏見にも苦しみながら患者の治療にあたった医療従事者に一服の安らぎをとヴァイオリンを演奏したヴァイオリニストもいた。3・11の時も多くの音楽家や芸能人が被災地を訪れ励ました。

人は 体には食べ物、心には芸術が、人の優しさが

俳句は紙と筆記用具さえあれば、砂の上でさえ、5・7・5のリズムで、たった17文字で自己表現できる、そして今や世界50カ国以上の国々で詠まれている。しかし中日新聞で報じられていたように「ウクライナの戦時下で地下に身を潜めながら俳句を作っている」という話は本当なのだろうか。毎日悲惨な戦況を見ていると信じられない。もし本当なら俳句が明日への生きる力になっているのだろうか。もし俳句を作っているとしたら、どんな俳句を作っているのだろうか。

という疑問が湧いてくる。そんな疑問に答えるかのように、偶然に「京都×俳句プロジェクト」が発信している「ウクライナの防空壕から届いた俳句」というページを見つけた。「京都×

俳句プロジェクト」の許可を得て、最後に紹介したいと思う。

—京都×俳句プロジェクト—

「ウクライナの防空壕から届いた俳句」より

2月のロシアの軍事侵攻開始から防空壕で避難生活を続けるウクライナ・ハルキウの俳句愛好家・ウラジスラバ・シモノバさんが俳句を寄せて下さいました。彼女が紡いだ17音節に、私たちは日々報道されるニュースとは違った角度からそこに広がる風景に思い駆せることができないのではないのでしょうか。ご本人とご家族のご無事を祈りつつ、俳句を紹介させて頂きます。

In an empty room.

誰もいない部屋

Flowers on a carpet are
under shattered glass.

カーペットの花模様は
ガラスの破片の下

I will never place

二度と置くことはないだろう

The one thousand paper cranes
on this bedtable

千羽鶴を
このミッドテーブルに

These city ruins

街の破壊

Little baby drops of rain
crying in silence.

赤子のよつな霧雨が
静けさに響く

The calls for "Glory!"

「栄光!」の叫び声

Eternal sleep under flags.

国旗の下の永遠の眠り

Skylark's lullaby.

ヒバリの子守歌

On a cold evening.

寒い夜

I see stars in the sky and
recall happiness

夜空に浮かぶ星
幸せな日々を思い出す

For the whole evening

夜の間ずっと

a cricket has been mourning
victims of the war.

コオロギが哀悼を捧げ続ける
戦争の被害者に

Scooping up water;

水を汲む

I reach into the barrel
and touch the bottom...

樽に手を伸ばし
底に触れる

Japanese poets

日本の俳人たち

with me in the bomb shelter
In this stack of books.

防空壕に私といる
本の山

Children are playing

子供たちは遊んでいる

Flying their paper airplanes
In the bomb shelter.

紙飛行機を飛ばして
防空壕の中で

Instead of thunder 雷の代わりに

the rumbling of explosions. 爆破の轟音

The sounds of springtime. 春の音

With curfew, blackout. 外出規制と停電規制

Never in my life have I 人生で初めての経験

Seen so many stars 空の数多の星

The drought in wartime 戦時中の物資不足

Nothing left but withered plants

On the windowsills 窓辺の枯れた植木が残るのみ

I apologize 私は謝った

for the entire frail world このはかない世界すべてのことを

to the plum blossoms 梅の木に

英語は原文。日本語はスタッフによる直訳です

参考文献

1. 黒田祐次著 「物語ウクライナの歴史」 中央公論社
2. 京都×俳句プロジェクト 「ウクライナの防空壕から届いた俳句」

出稼ぎ哀史

―層雲峡水路ダム―

齊藤 満

運命、宿命の谷間を彷徨しながら、気がつけば相応な年齢を重ねてきた。昭和恐慌の時代に生まれ神仏に見放されたように、世の激流にもまれて生きてきた。

古来、蝦夷地の時代から南西部海岸一帯に本州から、漁のあつた時期だけ出稼ぎ者がやつてきた。後に、先達が集落を形成し住み着いた。

出稼ぎの歴史は古く、明治の初期から、一年に二回は出稼ぎに出ることが続き、昭和の終わりまで一時期を除き常態化していた。

季節的には春はニシン漁場へ、戦前の蟹工船の船団、昭和二十七年五月の北洋漁業の再開により、函館を基地に出稼ぎ者は母船式船団所属の独航船が出漁していた。さらに南氷洋へ捕鯨母船団が向かうなど、イカ釣り時期と並行して出稼ぎに精を出していた。

津軽海峡に接する沿岸の主な漁獲はスルメイカの漁場であったが、昭和二十年後半から不漁が続き、漁民の生活が苦しくなるばかりであった。そのような時代に、戦後の復興には、国策で

電源開発が計画され、道内各地区でダム建設が高度成長期の、電力の需要に因應するため進められた。

出稼ぎ者には地元の漁業者の雇用の機会が盛んになり、海から陸へと働き場所が変わつてきた。北西の風が強く吹くころになると、前浜の沖での漁獲高は極端に少なくなり、正月を迎えることのできないほど、収入は落ちてくる。主な漁獲はスルメイカにゆだねてきたが、一時期は豊漁の年もあつたが、長くは続かなかつた。その日暮らしに事欠く漁師は増えるばかりで、船主も船の維持費に悩みを抱えていた。せめて年末ごろまで働く場所を探さなければならぬ。

そんな折に、電源開発のダム工事の建設人夫を募集しているという話が流れた。働き場所は旭川方面の山奥の工事現場で、募集する人が村に来ているらしい。

ある日の夕方、誘いがあつたのでまとめ役の家に、何人かの同級生たちと行つてみたが、すでに話を聞くための人が来ていた。仕事内容を簡単に説明し始めている。早い者勝ちではないが、その場で意思を確かめて、手を挙げていないと採用されな

いこともあるという。

採用数に限りがあるというので、決まると出発の日が指示され、切符の手配などがあるので意思を確認する仕組みになっている。気心が変わらないうちに即決してしまうのだ。わたしはお願ひしますと言った。

行き先は、旭川駅から石北本線に乗り換え、上川駅で下車、そこから山奥の層雲峡というところに現場があるという。旭川は子供の頃に、村から招集されていく、旧陸軍の第七師団の駐屯地があるところと、うすうす知っていたが(現在の第二師団)上川盆地の中にある上川は全く知らなかった。

出稼ぎに行くが決めたが不安だったので、帰り道一緒に出かける年長の人に、さらにどんなところか聞いてみた。旭川駅から約五十キロ先の北にあり、上川駅で降りてから山奥に入り約二十キロ先に、層雲峡という温泉地があり、その周辺だと言ってくれた。みんなで行くから心配するなといわれた。

要は黙ってみんなの後をついていけば間違えないのだ。仕事の内容は山のなかにトンネルを掘る仕事だという。採用されたら出発の日を知らせてくるだけだ。健康状態を聞くこともなく、面接のとき相手の顔を見て判断しているようだ。小さな村だから、誰の体調が良いか悪いかよく分かっている。

それにしても一般道路のトンネルを掘るのは全く違うようだ。

この春、ニシン場から帰って来たばかりだった。どんなに疲れても翌日には、バネのように体力が回復する体験をしてきたが、生来仕事の要領が悪いので、仲間にあざ笑われてばかりであった。できるだけ仲間の足を引つ張るようなことをしないこと、不器用なのでいつも悩んでいた。それでも人前では弱気を見せてはいけないという、気持ちだけは持っていた。「〇〇力」はあった。「〇〇の二つ覚え」と揶揄された日もあったが、沈黙もまた身を守る大事なことであった。

国策の電源開発へ

昭和二十四年十一月、国策は具体化して戦後の産業の原動力となる電力の需要を急ぎ始めた。日本再建の基礎となる経済力をもつためには、特に農業開発を含め、ダム工事建設はにわか喫緊の問題として、電源開発の啓蒙が盛んになった。企業は人材確保を急いだ。日本を代表する大手建設会社は、人材確保を傘下の企業に働きかけた。電力不足解決のためには、水力発電所の建設は、北海道の宿命であるといわれ、昭和二十八年一月、厳寒期のさなかに、そそり立つ断崖の中を掘り抜き、溪谷の水雪をおかして、層雲峡発電所水路の突貫工事が始まった。

上川郡上川町議会では、層雲峡ダム建設問題に相当な時間をかけ議論を重ねた。大雪山系国立公園内であり自然景観の保護と景勝地の破壊に繋がることが問題であった。上川町長(佐藤

晴男)は天下に誇る溪谷美、その層雲峡の自然を守るために、電源か観光かで論議を尽くした結果、水路発電ダムは北海道電力(北電)との工事協定における諸問題に相互に妥協するに至った。

時の道知事(田中敏文)は電力増強を掲げていただけに、積極的な援助を惜しまないという確証が得られたことは、工事に弾みがついた。

層雲峡の概要

上川町は石狩川の上流に位置し、明治二十八年宮城県人、本田喜市が農業の目的で字越路に、翌二十九年に石川県人他四名が移住した。当時は隣村の愛別村の管轄に属していたが、大正十三年一月愛別より分村し、上川村となり、昭和二十七年九月町制施行された。

工事のはじまる一年前のことであった。

昭和三十六年の市町村行政区画便覧によると、上川町は人口約一万五千、世帯二千九百に至り、二十一の集落で成り立っている。

令和四年人口は約三千五百となったが「北の山岳リゾート」

(道新、四月二十四日収録)この地では、四季を通して古くから観光に力をいれている聖地である。道央に位置し、北海道の屋根といわれる大雪山連峰系が連なり、大雪山という独立峰はな

く、旭岳(二千二百九十メートル)クラスの二十の山々の総称である。その中でも黒岳(一九八四メートル)の中腹までは層雲峡温泉から現在ロープウェイが動き、夏は高山植物、秋は九月の中頃に全国一早い紅葉が満山を染め、冬はスキー場で観光を兼ねた客で賑わう。

これらの山々は即、水力資源であり、日本屈指の大河川である石狩川も十勝川も大雪山系を座視するわけもなく、当然開発の対象になっていた。層雲峡溪谷が選ばれるのも自然のなりゆきであったといわれ、前述のとおり問題は名高い天下の景勝地、千古の姿そのままの大雪山国立公園の中核であることに、近隣の町村含めて自然美保護が、電力かの問題が提起されたのも不思議なことではなかった。

石狩川は石狩岳源泉とし、千五百七十の支流を合わせて、北海道の穀倉地帯上川盆地、中枢地帯石狩平野を貫通して日本海に注ぐ。長さ二百六十八キロメートル、日本で信濃川につぐ大河である(現在、第三位)。北電ではこの石狩川の上流に、調整池水路式の層雲峡水力(二万三千八百キロワット)の開発計画は、奇抜な工事であったのだ。景勝の「大函、小函」に水路を造りだすという発想は青天の霹靂であった。

日本のイエローストーン公園と称される溪谷美をもつ断崖の中を十キロメートルのトンネルを貫通させ、石狩川の水を二百メートル落下させてその水力で発電させるといふ、無謀とさえ思われたのも無理はなかった。

層雲峽を発電所にする二つの命題の調和、矛盾併せて発電所の設計は、溪谷美にふさわしく観光期に必要な水量など観光客の駐車場、水飲み場などを新設するなどを条件にした。

『工事完成は翌年の昭和二十九年十月一日「層雲峽発電所本流ダム」とコンクリートの銘板が管理所のすぐ並びに取り付けられた。このことは、社史のなかに「電力の鬼」と称される松永安左工門が、藤波収（電源開発総裁・北電社長歴任）に、「あのようなどころに、よくも発電所の工事ができたものだ、兜を脱ぐ、天晴だ」その勇氣と情熱がうかがえる。電力会社は力や資本力にまかせて強行したわけではなくそれは辛抱強く頑張ったものだ」と評価された』

これが当時の感想であった。この現場に辛抱強く頑張ったその中に、出稼ぎ者もいたのだ。この間、殉職者十二名の犠牲を出している。十年史には記載はなかった。

いかにして出稼ぎ者がこの建設に命を懸けたか、命を懸けたドラマがあったことを、わたしは五十一年前の昭和四十六年に記録と追憶を元に、次のように書きとめていた。

出稼ぎ先で親子の対面

仲間たちと現場に入ったのは同年八月過ぎであった。そのトンネル工事に、かつて漁場の鬼ともいわれた巨漢で、サケマス

の北洋船団に所属し独航船の乗組員を集め、世話役に当たっていた倉吉オド（父、おやじの意）がいた。大柄で怖い顔をしていたが、「気は優しく力持ち」であった。若い時には大食漢でホツケの頭を五十個、三平汁にして食べたという村では笑いを誘うユニークな人柄は語り草になっていた。

そのオドが、陸にあがり河童となり、長男の働く、同じ層雲峽の奥地に、出稼ぎをすることになったのだ。オドが五十歳の時だった。

息子と会える楽しみがあった。どこの親も「俺に似る、俺に似るなの親心」だ。長男「源吉」に、自分の若い時のように頑張つて、俺を乗り越えてくれ、親子は言わず語らず理解しあっていた。親父のような生き方に叶わぬと、源吉さんは自覚していたが、いつか親父に分かる日も来るだろうと、すでに源吉さんは、別な建設会社の工区の先導坑で掘削をしていた。延長十キロメートルを三社の一工区で主にダイナマイトを仕掛けて、削岩していく発破士の補助者だという。

採用が決まり、仲間は集団就職のように出稼ぎに向かった。三時間近くをかけて函館駅に到着した。休憩時間は一時間ぐらいいであった。市電が走っている、それも次から次と往来している、駅前から繁華街が見える、左側に駅前交番があり、目の先は音羽町、棒二森屋百貨店が右側に高く見えている。松風町は大門通りともいわれ賑やかだ。人の往来が多く、飲食街の店の暖簾が浜風に揺らぎ、この周辺で働く人たちの時間がやってきた

ようだ。

駅前から大森稻荷神社まで、吹き抜ける風の通り道だ。繁華街が別世界に見えた。函館は都であった。

「おーい、遠くに行くなよ、はぐれたら終わりだぞ」引率者の野太い声が聞こえた。

しばらくして改札が始まり、急行列車に乗るのははじめてであった。見送る人はいない函館駅を、発車ベルと汽笛が鳴り、蒸気機関車が動き出した。列車は満員に近く小樽周り札幌経由「函館本線」は旭川駅までとなる。

車窓から眺める山々はすでに秋の気配が漂い旭川駅をめざしている。札幌駅で少し停車し、車窓から眺めるホームの人波に驚きながら、汽車は再び動き出した。出稼ぎは未知の地で見学をしているような気がした。

ようやく旭川駅に着いた。石北本線に乗り換えて四十八キロ先の、上川駅にようやく着いた。長い時間がかかった。引率者が懐中時計を見ながら到着時刻を確かめている。

はじめて見る上川百万石の盆地の大きさに驚き、朝夕海ばかり眺めて暮らしてきた者には、不思議な感じがした。駅前に出迎えるトラックが待機していた。募集の時に聞いていた上川町はここなのだと周りを眺めてみた。

トラックは溪谷の砂利道国道三十九号を、砂塵をあげて山奥へと走っている。

高さ二百メートルに及ぶ桂状節理の断崖が両岸から、覆い被

さり圧迫感に襲われた。岩石の屏風がそそり立っているのに驚いた。

この情景は「溶結凝灰岩が石狩川によって浸食されたことにより、二万年前に形成された」といわれる。幕末の安政四年（一八五七年）石狩役場に勤めていた足軽の松田市太郎や探検家・松浦武四郎によつて発見され、アイヌ語では「ソウウンベツ」と呼ばれていた。

『ちなみに、大正十年、山岳の景勝地の探勝家でもある、四国・高知の旧土佐藩士の三男、明治二年生まれの文士・大町桂月が、層雲峡を訪れた際に宿泊した折に「層雲峡」と「羽衣の滝」のほか、「銀河の滝」「流星の滝」の名付け親となり、その返礼に大雪山連峰にある無名の丸い山を「桂月岳」（一九三八メートル）と命名したとある』

後に桂月は本籍を青森、十和田湖畔の薦温泉旅館に移し、その庭に胸像と歌碑が建立された。大正十四年六月十一日、胃病で行年五十七歳を一期とした「戒名、清文院桂月鉄脚居士」ことなく酒を愛した文豪は、下北半島、仏ヶ浦極楽浜に歌碑を、かつて大正七年に三十八年ぶりに故郷の土を踏んだとき「見よや見よみな月のみのかつら浜海のおもよりいづる月かげ」桂浜に碑があることは有名である。

大きな温泉街を通過して間もなく、大函というところに到着した。わずかな平坦地に工事会社の事務所と飯場の棟が並んで

いる。日本を代表する大手のS建設会社の社旗が翻っていた。

飯場は寝起き場所と同じ棟にあり、小休憩した後に現場の係から工事の概要が話された。明日から三交代で働くことになった。すでに食堂の壁板に勤務表が貼りだされている。

作業着は持参したもので、食事の後は明日からの準備をして早寝をすることにした。寝もやらぬ思いであった。寝返りする動きが気にかかる。大部屋の寝床は板の間にゴザを敷いている。持参の煎餅布団の温もりがいつか眠りを誘ってくれた。

現場作業始まる

飯場から徒歩で二十分ぐらいの細い山道を登り、トンネルの掘削現場に向かった。初仕事はトロッコに削岩した岩石を積み込み、登り口のわきの沢に投棄する。

「いいか、いま教えるからその通り投げればいいんだ」「分かったな・」係の声は大きい。一方、削岩機の音がトンネルに響き、穿孔の中に導火線を雷管装着しニッパで締め付ける、それに味噌に似たような、ダイナマイトをホットドッグのような形にする、甘い香りがするのが特徴であった。発破士は導火線に着火する前に長さど芯が燃える時間を計算して穿孔の中に木製の棒で押し込んでいく。危険を避けるため、発破士は周囲に「発破・」と大きな声とサイレンが鳴り退避させる。

岩盤を爆破しなければ前進はできない。トンネルのわきに機

器資材置き場と退避場所に大きな円形の空洞ができていた。そこに避難するのだ。前に進むに従って避難する場所が適所に設けられる。

それにしても防塵マスクもない、ヘルメットも安全靴もない。自前の長靴を履き、破れたら組頭に頼んで購入してもらおう。

労働の安全掲揚の旗がひらめき安全第一と緑の文字を見かけたが、そんなに事故もある訳ではないので、黙認されていたのかもしれない。元来ヘルメットをかぶっても岩石の落下には強度がないものであり、発破士以外は重要視していないようだ。

定期的に更新することになっているが、安全を意識の高揚と労働事故月間を掲げているだけで、現場の抜き打ち監査がなく、担当者に一任しているようだ。

戦後八年目、ダム工事にかかわらず安全意識、労働災害防止などは短期雇用には安全対策は簡略されていたかもしれない。

「怪我弁当は自分持ち」とは古くからある言葉である。いわれた通り発破で掘り出した岩石を二人組でトロッコを押し、その要領をつかんだ。次から次へと運ばないと先導の掘削の工程に狂いが生ずるので、組頭も作業の流れに気をとめていた。

朝の交代勤務の時は、飯場の食卓で大急ぎで食べなければならぬ。そのあとアルミニウムの弁当箱を受け取るのだが、蓋がへこんだ弁当箱は量が少なく見えるので、われ先にと目をつけている。浅ましい思いたが「腹が減っては戦が出来ぬ」の根性

が生まれてくる。出稼ぎに出た時でなければ、白米の飯が食べられない時代であった。

仕事に慣れたころ、配置が代わった。円形に掘られた岩盤と木枠の間に、小型三輪車（ネコトロ）で生コンクリートを運び、小型スコップで投げ入れて詰め込んでいく。段々天井に入れていくので、中間に足場がその都度組み立てられ、体をそり返させなければ頭にセメントをかぶることになる。

作業中生コンクリートのなかに、碎石を意図的に詰めることがあった。セメントの節約のためだと感じたが、知らぬふりをしなければならぬ。こんなことをしていいのだろうか。良いわけではない。下請け組の手段の一つなのか、黙っていたほうがよいと判断した。コンクリートの円形の外壁が、後に水圧により出水しないだろうかと心配であった。

トンネルは高さ三・二メートル幅三・二メートルの円形に造られていく。工区あわせて十キロメートルを貫通しなくてはならない。地質的にも膨張性の悪質岩盤に当たり様々な層に直面した。スコップで土を掘るような作業ではない。岩盤に亀裂が入り、水が出てきたときは、壁と木枠の間に硬めにしたコンクリートを注入する。緊急の場合はグラウトという、圧縮装置で穿孔に生コンを注入して固めなければならないときもある。工事は計画通り進まない日もあった。

作業の中にトンネルとの隙間を残すという、特殊な空隙工法を採用して、きり抜けることに成功したという。調整池から取

水量を十キロメートル離れた、発電所での遠隔制御はわが国でははじめて、水口設備に採用されたものとして注目された。

出稼ぎ者には専門的な知識はいらないという風潮であったが、概要を示してくれたほうが、仕事に対する理解と張り合いが出てくる気がした。

作業にも慣れてきたころ、ある日、倉吉オドは立ったまま、仲間に「短気を起こすなよ、気に食わぬことがあっても『ハイ、ハイ』』ということを聞くんだぞ、我慢するのも仕事のうちだ。」オドの思いはこうだった「魚が獲れていたら、こんな山奥に来ないで済んだのに」北洋漁業が再開したが、年齢的に出番がなかった。「組頭が時折あれこれと文句を言っているが、気にするな」と、氣遣ってくれた。さすが漁場で若い者を使ってきた人だけあって、話が分かりやすい。

道南と違い雪が降るのは早く寒い、トンネルの中は常に冷え冷えとしているが、体を動かしているの、直接寒さを感じることがなかった。ただ履いている長靴の底が減ってきたときは、荒縄を二重に巻き滑らないようにする。慣れているので苦にならなかった。ただ、岩石が落ちてこないかと、天井を見ていることが多かった。炭坑夫の人たちのことを想像してみた。やはり臆病者なのだ。

ある日オドのところに、作業現場から三、四キロ離れた工区

で働いている長男が、父に会うために飯場にやってきました。二人はともに満面笑顔に包まれて、照れくさそうな顔をしていた。親子の語らいはわずかな時間であったが、みんなとも会った。常用で勤めているようだ。出稼ぎでも格が違うような気がした。みんなより賃金が多いらしく、オドも喜んでいた。うらやましく感じた。

事故のしらせ

昭和二十八年十一月三十日、夜勤の作業現場に大きな声が響き渡った。見知らぬ二人の若い男が血相変えて小走りですべてきた。離れた工区の菅原組の男らしい。

「オドー・オドー・源吉さんのオド・」泣き叫びながらやってきた、不吉な予感がした。「オド!・源吉、源吉さんが・逝ってしまった、死んだああ・」悲痛な大きな声がトンネル内に響き渡った。仲間は立ち尽くし呆然となった。オドは「ナニ?・なに?・」。「死んだって・落盤?・」オドの手からツルハシの柄が足元に落ちるのが見えた。

若い者をつとにらみつけたまま、その場に座りこんでしまった。仲間は作業をやめてオドを取り囲んだ。無言が続いたあと、落盤事故の原因は発破をかけたあと、退避する距離が近かったのか、落下の岩石が亀裂に連動して逃げ場を失ったのだろうか、オドは悪夢を見ているような姿で両目をつむり、涙がと

めどなく頬を伝わっているのが見えた。何人かの仲間も涙を浮かべていた。

男は泣かないものだ、生きてきたオドは、息子と年に一・二度しか会う機会がなかったが、少し前に会ったばかりなのに、二十一歳の息子の死は余りにも切なく、驚きと悲しみにくれるばかりであった。

気を取り戻したオドは起き上がり、組頭らと大急ぎで現場を後に山を下った。仲間は動揺して仕事がかたつかず身震いがするばかり、間もなく工事の一時中止の指示がでた。雪の夜更けの崖道の下り坂をわれ先にと飯場に急いだ。

雪が降りやまず、十一月末の層雲峡は寒さが厳しい。親子の対面ができて喜んでいた姿が最後であったのだ。仲間は亡くなる前に父に会いに来たのは「虫の知らせ」があったからだろうか、この世に不思議があることを思い知らされた。明日は寺に出かけ葬儀の手伝いに行くことになった。なかなか眠れなかった。

夜が明け、飯場にはわかに騒々しくなり、トラックに分乗して上川町内の寺に集まった。一本の水路トンネルの掘削に働いている他社の人の姿も何人か見えた。読経の続く寺の中はひときわ寒さが身にしてみた。喪服姿ではなく、村から出た時の服装で合掌した。参列者のうち四十六人の集合写真がとどけられたのは、後のことであった。

落盤で死傷者

昭和二十八年十二月二日の「北海道新聞」の朝刊は、次のように報じていた。

(旭川発) 国警旭川地区署の報告によると、

三十日午後九時四十五分ころ、上川郡上川町字層雲峡奥地の北電発電所隧道工事、菅原組小笠原班第五号現場で、同班土工夫 田中昇さん(二二) 福島県、同 斉藤源吉さん(二二) 松前郡大島村字原口、同 川目与四郎さん(二四) 原籍不詳の三名が、ハツパ作業中、落盤があつて斉藤さんは岩盤の下敷きとなり即死、田中さんは爆風のため両眼失明の重症を負い、川目さんは顔面、両腕に軽傷を負つた。

菅原組は直ちに留守宅に電報を打電した。訃報は二回打つことが例である。それは、留守宅に驚きを防ぐため「ゲンキチサン、キトク」その後、時間を置いて「ゲンキチサン、シス」郵便局の窓口で「電報頼信紙」に書き込んで依頼する。受信局で配達をする仕組みになっている。

訃報は、留守宅に届けられた。即刻縁者が集まり、改めて葬儀の支度をはじめた。そのあと「知らせ」という、しきたりがあり、二人で各家々を訪ねて「・・・さんが亡くなりました」と告げて歩くのが通例であつた。

特に縁者が隣村にあつた場合でも、片道八キロの道を二人一

組で知らせに行く習慣が長く続いていた。村は大騒ぎになった。出稼ぎ者の家族が集まり、弔問の人たちで悲しみに包まれていた。

母親は泣き疲れ果て、その姿に村人はもらい泣きをした。慰める言葉がない、特に出稼ぎに出している親たちは、わが子と重ね合わせて重苦しい雰囲気であつたという。

仮葬儀を終えた倉吉オドは組から二、三人が同行して師走の上川駅を後にした。オドは胸に白い布に包まれた遺骨を抱き、長い汽車の旅がはじまつた。大雪山系連峰が雪雲にかすんで見えない、再び訪ねることのない上川町と恨みの深い層雲峡に涙の別れであつた。

上川町から村までの距離は、約六百二十キロあり、(同距離は本州の青森市から新潟市、茨木県の水戸までの距離になる) 函館駅で乗り換えしなければならない。

出稼ぎ者の宿命だとしても、あまりにも非情であつた。多くの村人たちに迎えられて、親子は無念の帰還となつた。村は悲しみに包まれた。オド五十歳の師走であつた。

年末に多くの仲間が帰省したが、翌年には再び現場には復帰しなかつた。わずかな期間ではあつたが、働いた場所の正式名称は「層雲峡発電所本流ダム」であつた。

その後の出稼ぎ

昭和五十年代から出稼ぎ者は、近代的な機器材の導入などで工事の施工は、労力の軽減や工期の短縮を図り、半自動や無人化の作業により稼働するようになった。

事故の防止を語り、安全第一を掲げ変革を遂げているが、当時の出稼ぎの待遇条件とは隔世の感がある。労働災害発生は、令和三年八月の死亡者二十六人、死亡者含む休業四日以上死亡傷者数は七百二十六人と前年を大幅に上回っており増加の傾向にあると道労働局長が企業へ安全意識の要望書を送付された。

かつての出稼ぎ者仲間の多くは世を去り、過去を語る人はいなくなり、昭和は遠くなった。出稼ぎ者は労働賃金を得て生活を守ったが、社会に貢献をしてきたこともまた事実であった。

昭和時代の終わりに

昭和五十五年の暮れに、ダム工事で一緒だった同級生のS君から、夫婦で埼玉へ出稼ぎに出るので、会いたいという電話がきた。失業保険の受給資格が付くまでの半年働いてくるという。この沿岸では珍しいことではなかった。

年が明けた、昭和五十六年一月十四日の道新「はこだて版」に、次のような記事が載っていた「道南の漁民ら、出稼ぎ者

続々本州へ」

込み合う青函連絡船、全体では六、七千人に故郷でのつかの間の休みを終えて、下海岸など道南地方の出稼ぎ者が、このところ毎日のように青函連絡船や航空機で海を渡っている。ほとんどが沿岸漁民、管内では六千人から七千人がこの時期に移動する。コンブ漁の最盛期と盆、正月以外は家族のために出稼ぎで一人ががんばる「大黒柱」も多く「前浜の漁がどんなに良くても、出稼ぎサイクルは今年も変わらない」と関係者に村では話している。

「国鉄栈橋が出稼ぎであふれるようになったのは十日ごろから。特に午後三時五分発の連絡船には両手に大きな荷物をぶら下げた一団が「占拠」するほど。同便に乗ると、上野駅には翌朝七時前に着く。船室でくつろぐ松前からのグループも「今年も横浜に行くが、この船の客はほとんど出稼ぎものだべ」と掲載していた。

S君は何もしないで村にいても、生活するだけの収入もないので、行かねば病院代もままならない、失業保険がもらえる期間行ってくる。

「出稼ぎ者の多いのが下海岸で南茅部町と、尻岸内町が千人、樞法華村四百五十人、戸井町三百人、このほか函館周辺の上磯町などごく一部の町を除く道南周辺全域からの出稼ぎ者の数は、函館職安なども正確な人数をつかみきれない、推定では六、七千人とされている」送り出す地元にとっても、出稼ぎ先からの

仕送りが、年間漁業所得を上回る町もあるといわれている。生きるための手段として、海を捨てなければならぬ、水産王国を誇る北海道は一体どうなるのだろうか、ささやきはじめていた。

棧橋で相撲観戦

この年の一月十日から、大相撲初場所がはじまった。古里の隣の福島町出身の関脇「千代の富士」は、連日白星先行で、全国相撲ファンが歓喜に沸いていた。二十五日は千秋楽、この日S君の見送りに棧橋に来ていた。偶然にも再会は相撲観戦と重なっていた。テレビでは呼び出しの声が「待ったなし」、対するは横綱北の湖と関脇千代の富士、十四勝一敗同士、決勝戦では横綱を倒し関脇に軍配が上がった。大関の座を確実にしての優勝を果たした。

S君は「これは縁起のいい日に旅立ちになった」と喜び、互いに肩を叩きあつた。最終便は午後七時出港の青函連絡船・四便、松前丸は雪の舞う暗闇の棧橋を離岸していった。厳寒の津軽海峡へ、S君四十六歳の人生航路であった。

この便の乗客は少なく、グリーン席三十七人、普通席二百六十七人と記録され棧橋駅長の日報に記載された。(各連絡船の定員は千二百名)

昭和三十年ころから潮の目が変わった。道内の出稼ぎ先は本

州へと移動したのだ。

この日の天気概況は「冬型の気圧配置が続く中を、西海上に低気圧部が残り、このため太平洋側や、上川、留萌地方は一時雪の降る程度、函館地方は北西の風強く雪が降りだしている」

皇居豊明殿へ

春の終わりに内閣叙勲授賞局から「叙勲授与の通知」が届いた。よもや榮譽に浴するとは思ってもよらなかった。平成八年十一月十一日、各地方からの受章者は妻同伴で上京し、防衛庁の講堂に集合し、防衛庁長官の祝意を受けたあと、一人ひとりに勲記と勲章をいただいた。

勲記の内容は次の通りであった。

『日本國天皇は ○○○○を

勲六等に叙し瑞寶章を授与する

平成八年十一月三日皇居において

璽をおさせる

大日本

國璽

平成八年十一月三日

内閣総理大臣 橋本龍太郎印

内閣府賞勲局長 平野治郎 印

その後定められた時刻に、担当官の案内により坂下門から皇居、豊明殿に御案内をいただき、畏くも天皇陛下の拝謁を賜わった。

「これからも社会のために尽くされるよう希望します」とお言葉をいただいた、感激を新たにしました。

六十一歳の秋深まる日であった。

過ぎし日を追憶しながら、一首を詠んだ。

「菊薫る皇居の庭にわれ立ちて

幼きころのふる里思ふ」

昭和三十一年一月十八日、当時、道内唯一の陸自・函館第二新隊員教育隊に入隊、第二師団（旭川）の隷下の部隊を経て、二年後函館部隊に転属後、現・自衛隊函館地方協力本部に広報担当二十六年間の勤務を最後に、定年退官となった。

青函トンネルが開通した昭和六十三年であった。第二の人生は、未知の世界の畜産業界に薦められ、食肉加工専門会社で、技能者と共に、白衣の作業生活を二十五年間、陣頭指揮で職務を遂行して、平成二十五年に退いた。

遠い日を思い出すことがある。終戦時は十歳であった、わが人生常に荒れ模様が続いていた。漁師になれない男、臆病で不器用な男は、もう村では生きていけない「男児志を立てて郷郷を出づ」であった。

若い日に出稼ぎで得た教訓をもとに「人に使われ方、人の上

に立った時」のことを参考にした。人格を尊重し、わたしなりの「人は企業なり」を信条とした。

思い出は続く。夢、幻のごとくの歳月が流れ、消灯ラップを聴きながら、望郷の念にかられた青春の日々、わたしの人生の始発と終着駅は函館であった。

人生訓は、文豪・吉川英治の「われ以外みなわが師也」を座右の銘としている。

（東京の尋常小学校二年で中退、昭和三十七年七十歳で永眠）

（三六）

参考文献

北海道新聞

上川町史

北海道電力十年史

函館市中央図書館

PCによる検索

ジュール・ブリユネと箱館戦争

木村 裕 俊

一、仮装舞踏会の夜

慶応四年（一八六八）三月中頃のある晩のことであった。その日イタリア公使館で仮装舞踏会が開かれていた。この舞踏会に、日本のサムライに扮した二人連れの外国人も参加していた。正確にいうと、この二人のサムライはフランス人であった。彼らはこの群衆の中では、多少おかしなサムライであっても、仮装舞踏会が前提なのだからそう違和感はないのだが、舞踏会が終わって会場から品川沖に停泊中の軍艦「開陽」に乗り込むまでの道中はまさしく「おかしなサムライ」であった。夜道のサムライの格好だから編笠でもかぶって堂々と胸を張ってゆつくりと歩を進めればよいものを、やたら警戒しながら西洋人と判る顔つきを丸出しにして目だけギョロギョロさせて、物陰に身を隠しながら小走りに駆けているのであった。まるで喜劇の一場面を見ているようであった。

この碧い目のサムライがフランスから来た軍事顧問団の副隊長であったジュール・ブリユネと下士官のアンドレ・カズヌーヴ伍長であった。彼らは、日中の時間に堂々と「開陽」に乗り込む

ことが出来なかったことから、夜のしかも目立たないサムライの格好をしたつもりなのだが、最も目立つ格好で来てしまったようである。開陽に乗り込んだとたんに「ジュールさんは何を着せても良く似合う。途中、深川あたりで姐さんたちに捉まられませんでしたか。」と後ろから声がした。振り向くと、榎本武揚が笑顔で立っていた。

二、ブリユネと榎本の出合い

諸外国との交易を、何とか断り続けてきた徳川幕府であったが、安政元年（一八五四）遂に、アメリカの強力な押し込みにより「日米和親条約」が結ばれた。そして、これ wait っていたかのように他の西欧諸国もまた同様の条約締結を強力に要求してきた。海外圧力に屈した形で開国した徳川幕府には、大きな課題が残った。海外と対等に付き合うためには、近代的な軍制改革を行って対外防衛力を強化しなければならない。また国内の政策を安定的に維持し、尊王攘夷運動を鎮静化させることも必要であった。

こうした徳川幕府の要求に応えたのがフランス皇帝ナポレオン三世であった。ナポレオン三世は、開国したばかりの新生日本との関係を二層深めるために、徳川幕府に軍事顧問団を派遣することを決めたのであった。

軍事顧問団一行は、慶応二年（一八六六）十二月に横浜に到着した。メンバーは総勢で十九名であった。隊長はシャルル・シャノワース参謀大尉であり、副隊長にはジュール・ブリュネ陸軍砲兵大尉が当たった。他に上級士官四名と下士官十三名の構成であった。軍事顧問団の訓練はその後一年ほど続いたが、慶応三年の暮れに国内状況が一変するような事件が起こったのである。薩長連合が新しい政府を作り、旧幕府勢力に戦いを仕掛けてきたのである。「戊辰戦争」の始まりであった。

慶応四年（一八六八）一月に「鳥羽・伏見の戦い」が起り、優勢であるべきはずの幕府軍が劣勢に立たされた。そして何日も経たないうちに、將軍慶喜は幕艦「開陽」の船長榎本を大坂城に置き去りにしたまま、その艦船で江戸に帰ってしまったのである。大坂城の作戦指令室に残された幕閣以下の幹部たちは、為すべきことも出来ず、不満と怒号をあらわに飛び交わしていたが、やがて自然散会して誰もいなくなった。

この時一人残された榎本は、敗戦者の習いとして、残された書類や重要什器、それに大坂城の金蔵から金十八万両などを見つけ、黙々と整理したのであった。そして観戦武官として参加していたブリュネ一行も、同じように取り残されていたため、一

緒に待機していた艦船で江戸に向かった。これが二人の最初の出会いだったのではないだろうか。

ブリュネの来日は慶応二年十二月であり、榎本が艦船「開陽」でオランダから帰国して来たのは翌・慶応三年三月のことであった。四ヶ月ほどしか違ってはいないのである。オランダで国際法や造船学を学び、デンマーク戦争には観戦武官として参加したという、ヨーロッパの軍事知識に精通した日本人であるという。今は幕府の海軍副総裁であり、ブリュネは日本に来てから、この人の存在に大きな関心を持っていた。

一方の榎本もまた、旧態依然として戦国時代からさして変わらない幕府軍の兵力を、西洋の新しい軍事教練によって劇的に生まれ変わらせたという気持ちはあった。海軍副総裁として榎本は、そうした思いの中で軍制改革に取り組んでいたのだった。そうした時に同じ思いを持って、わざわざフランスからやって来たという、フランス軍事顧問団とは、どういう集団だったのか、大きな興味があつた。彼らの厳しい訓練の繰り返しは、徳川幕府軍「伝習隊」を育てあげたのであつた。榎本とブリュネのこの共通の思いの中に、二人は期せずして同じ流れの中に流れ進んでいくことになったのであつた。

ブリュネは、エゾ地で「開拓と北方防衛」の目的を持って旧幕臣の生活救助を主張して旗揚げした榎本軍に、なぜ参加したのだろうか。ブリュネと榎本が大坂城で最初に会った時、榎本の口からは愚痴らしい言葉は全く出ていなかった。淡々と城内整

理をしていた。ブリュネはその態度を將軍の行為と比較して、榎本の行為が「日本の武士道」の潔さだと理解して、胸の中に納めたようであった。

四月に入って幕府中枢は江戸城を明け渡したが、榎本にとつて、まだ戦いは終わっていない。旧幕臣たちの生活を守り、武士としての面目を守るために「賊軍」というレッテルを外さなければならなかった。榎本はブリュネに引き続き自分たちの軍隊にフランスの厳しい軍事教育をして欲しいと要望した。ブリュネは自身の心の中に、榎本の「武士道」ともとれるような態度に感銘した自分を見つけ、また自分が教育した「幕府伝習隊」の成果を見てみたいという気持ちもあつた。ブリュネは、自分が榎本軍に参加するということは、自分が教えた「伝習隊」がどこまで出来るのか確認するべき「義務」があるのだと感じた。そしてブリュネは榎本と同じように「自分には自分のフランスの武士道」があるのだと、自分を納得させたようであった。フランスの軍事顧問団は新政府側から、日本からの退去命令を受けたのであつた。しかし、ブリュネと何人かの下士官はそのまま日本に残り、榎本軍を支援することとしたのであつた。

三、ブリュネの手紙

ブリュネは、開陽丸に一室を借り落ち着いてから、フランス皇帝閣下・ナポレオン三世と陸軍大臣、それに隊長のシャノワ

ースの三人に長い手紙を書き、こうなつた事態の経緯を事細かに説明した。そしてブリュネは、今回来日した十九人の軍事顧問のうち、自分と行動を共にする五人を除いた残り十四名の軍人たちは、何があつても無事に本国に送還しなければならぬのだという思いを強くしたのであつた。

そのためにはまず、フランス皇帝閣下に「辞表」を提出し、自分の行為とフランス軍との関係を解き、はじめを付けたうえで、榎本軍に参加することとしたのであつた。

「辞表」には、次のよう書き記した。「フランス皇帝・ナポレオン三世閣下殿、私・陸軍砲兵大尉シユール・ブリュネは、私事によりフランス軍を辞することと致しましたので、ここに届出を致します。一八六八年八月〇〇日。」と書いた。心の中は意外と落ち着いていた。そして続けるように、別様の用紙にこうなつた事態のあらましを整理して書き残し、説明書きとして添付していた。

それによると「今、日本では『戊辰戦争』という革命が起つて、大君將軍方の幕府が倒れてしまいました。そのため我々フランスの軍事顧問団も、新しい政府から国外退去を命じられ、本国に帰国せざるを得ない状況になつてしまいました。こうした状況を見る度に、自分としてはたとえ一人だけになつても日本に残り、新しい日本の姿をこの目で確かめたい衝動にかられています。日本の東北地方には、大君將軍を中心とした政治を今もまだ持ち続けたいと考えている各藩の同盟体があります。

東北戦線もこれから、戦いの成果が発揮されるものと思われる。この戦いには、私たちが日本で軍事訓練をした軍人が沢山参加しているのです。どのような戦いぶりをするのか、その成果を見てみたいというのが正直な気持ちです。」とつづられていた。

その上で「しかし、四月に入って江戸城を開城してからは、反幕勢力の薩長連合の制圧力は日増しに高まって来ているのがよく分かります。旗艦『開陽』の船長で、旧幕府海軍の副総裁でもある榎本武揚という人物が、薩長を中心とした新政府側に『旧幕臣によるエゾ地開拓と北方警護』を提案したのですが、それには無視して返答を全くしなかったのです。それ故、榎本は自分でエゾ地に向かい、自らの手でその政策を実現することを考え始めているようなのです。エゾ地では、自分を守るために最小限の軍事組織も必要であり、引き続きエゾ地で軍事指導者としての力を貸して欲しいとの要請を受けました。榎本副総裁からこの申し出があつてから、何日か考えていましたが、自分の心の中では、日毎にこの申し出を受けたい、という気持ちが強くなつて来ていることが分かるのです。」と、自らの気持ちを正直に書き表しました。

『鳥羽・伏見の戦い』を勝利し、江戸まで攻め上がつて来た薩長連合でしたが、このところ彼らの勢いも少し衰えている様にも見えます。それでもしかし全体として見ると、大君将軍方の旧幕府軍の方が苦戦していることは認めざるを得ないでしょ

う。それには、アメリカ軍やイギリス軍の士官たちが、自国の軍隊を表面上辞職したような形で薩長連合の軍隊に加担していることが考えられるのです。」とブリュネは自分の思いを述べた。そして「このような他の西欧諸国の動向は、私たちフランスの国益に反するものです。」と悔しさをにじませた呻きのような言葉を発した。

ブリュネにとつては、「自分たちフランス軍と敵対する軍事指導者が敵の薩長連合軍に存在しているのです。こうした体制を続けながらこれからも戦いを続けることは、我がフランスの政策に良い影響を与えるはずはないのです。そこで私は、これから北に向かう榎本軍に参加して、敵方である薩長連合軍の諜報活動に力を注ぎ、その調査した内容をフランス皇帝閣下にご報告したいと思つております。」と、ブリュネの本心を忌憚なく伝え、ナポレオン三世・皇帝閣下に忠誠を誓った。

ブリュネは隊長のシャノワール大尉と陸軍大臣にも、皇帝閣下への内容と同じ内容に加えて、自分としての情勢分析と日本への思い、榎本軍の新政府へ要求と純粋な行動に対する思い、などを合わせて長い手紙文を、それぞれに宛てて書き上げた。特にシャノワールとは親交が厚く、本来であればフランス軍・軍事顧問団の副隊長であつた自分がシャノワールを助けて、軍事顧問団を本国まで無事脱出させなければならぬはずであつたが、自分はそれをしなかつたのである。ブリュネは自分の取

つた行動が、自分の直接の上司であるシャノワールに大きな迷

惑をかけたことに心から謝罪したのであった。

この手紙は、榎本武揚の手を介してフランス公使の手に渡り、フランス軍艦の艦長から祖国に届けられたという。

四、軍事顧問団と榎本軍

フランスの軍事顧問団は、明治元年三月に江戸から横浜に移って待機していた。その間「戊辰戦争」の行方をジッと見守っていた。しかし、その後ほどなく明治新政府が成立し、軍事顧問団は新政府から、正式に日本から退去するように勅命が下された。フランス軍事顧問団はこの勅命に随うべく、シャノワール団長他一同は、日本を離れる準備を進めていたのであった。

しかしブリュネと一部の団員は、日本に残る決意をしていた。ブリュネは当初、榎本軍には自分一人で参加するつもりでいた。ところがどうした訳か、ブリュネが榎本軍に加わるという計画が、事前にどこからか漏れていたのであった。これに触発されて、どうしてもブリュネと行動を共にしたいと願い出てきたのが、下士官のアンドレ・カズヌーヴ伍長であった。ブリュネも根負けして、仕方なくカズヌーヴの同行を認めたのであるが、今度は榎本艦隊が仙台に着くと、仙台の『奥羽越列藩同盟』に参加していたジャン・マルラン軍曹とフランソワ・ブッフイ軍曹、アルテュール・フォルタン軍曹の三名が、自分たちも同行するといつてきかなかつた。これで榎本軍に参加してエゾ地に向かうフランス軍事顧問団（私設）は、五名になった。

後に、ブリュネの志を知り、ブリュネを訪ねてどうしても仲間に入りたいとさらに参加してきた仲間がいた。フランス海軍の士官候補生であったアンリ・ポール・イポリット・ド・ニコールとフェリック・ウーージェーヌ・コラツシュの二人であった。二人は、横浜に停泊中のフランス軍艦から脱走して参加したのだという。また、元フランス海軍の水兵で横浜に住んでいたというクラトーと、元陸軍軍人だったらしいというトリポー、それに横浜在住の商人であったオーギュスト・ブラディエの五名が加わってきたのであった。

結局は、ブリュネのフランス軍事顧問団は十名になっていた。彼らは後に詳しく話すこととなるが、榎本軍の陸軍軍事組織を改編し、四つのレジマン（連隊）を作つて、その連隊長には日本人が、司令官にはフランス顧問団がそれぞれ当たることとした。フランス軍事顧問団と榎本軍の関係は、概ね良好であったといえるだろう。これは、双方の代表である榎本総裁とブリュネ大尉との間柄が良好であったことが大きかつたようである。二人は互いにその人柄を認め合い、尊敬していた。ブリュネは、榎本がオランダで軍事教育を受け、高等な海軍技術を身に着けた軍人であると認めている。その上で、物事の一つひとつに筋を通して、はじめを付けながら解決していくやり方に好感を持っていた。

かつて大坂城で將軍に置き去りにされ、誰もやらなかつた城内整理を行ったことをブリュネはその一部始終を見て知ってい

た。江戸城開城の時も、榎本は新政府軍の理不尽さを指摘し、開陽から何度も繰り返し要望して意見を述べ、要望が折り合えば新政府に協力する旨迄表明しているのである。

ブリュネは、榎本の要望の内容も知っているし、新政府軍が榎本軍にどこまで譲ってきたら互いに協力できるのかも、およその見当はついている。しかし薩長新政府軍が「大政奉還」で政権を朝廷に返還し、恭順の姿勢をとっていた徳川家に対して、虚を衝く様にクーデター紛いの新政権を樹立し、旧幕府側を排除し「戊辰之役」に持ち込んだ新政府軍の行為は許せなかった。

それでも榎本は、エゾ地平定後も新政府に「一緒に北方開拓と警備を行おう」と提案しているのだが、反応は全くないのである。榎本が新政府からの返事をジツと長い間、何も語らずに待ち続けているのをブリュネは理解していたし、これまでの榎本の進み方に疑問はなかった。むしろこうした榎本の筋の通し方には、心の中で賛意を送っていた。ブリュネは、シャノワーズ大尉への手紙に「私は総裁エノモトを信頼しているし、彼の態度を見ているとその中にある日本人の気高い精神にいつも同調させられている。」と書いていた。

榎本もまた、ブリュネについては「エゾ地に一緒に来て欲しい」とは言ったが、こんなに本気で考えて引き受けてくれるとは思ってはいなかった。ブリュネがフランス皇帝に辞表を書いたということは、フランス国の命令に従わないということである。これは、自分と自分の家族の将来を、著しく不安に陥れるこ

とになるのである。それをすべて飲み込んだうえで、日本に残ったのであろう。旧幕府軍の「伝習隊」に教えた教育がどの程度理解できていたか、日本に残って確かめたいという心もあり、伝習隊や旧幕府軍への「義」に連なる心であり、「武士道」に似た心意気でもあろうと感じた。榎本にとって、ブリュネはまさしくフランスの「碧い目のサムライ」であった。

ブリュネが見た榎本軍であるが、中でも最も印象が深かったのは、「ヒジカタ」であったという。彼は「陸軍奉行並」で、四つのレジマンの総司令長官である。かつては江戸幕府京都守護職の「新選組・鬼の副長」として、恐れられていたそうだ。今はそのようなことはないが、抑える所はきちんとしており、さすがであった。海軍では「イクノスケ・アライ」が優秀だと思っ。海軍のジェネラル（奉行）である。陸軍の総司令官は「ケース・オオトリ」であるが、彼については「頑固者だが、優秀な人材である」と評価している。

一方、大鳥は大鳥で、自らの著書『南柯紀行』の中で、ブリュネ評を「未だ年齢（とし）壮（わ）かけれど、性質恰憫なり」と評している。そして、フランス顧問団のカズヌーヴについても「すこぶる勇敢であり、松前進軍の時にも、屢々功ありたる。」と、好意的に評価していた。

五、榎本軍の組織改編

明治元年（一八六八）十一月二十二日にエゾ地を平定してか

ら榎本は、軽い疲労感に悩まされ鬱々たる気分になられていた。組織内は相変わらず揉め事が多く、ギクシヤクしており、平定後に出した新政府への「嘆願書」には、これまでと同じように何の反応も示してこなかった。おそらくは天皇の目に触れることなく、岩倉具視の所ですべて停止されているのだろう。「榎本」の名前があるものは開封もされずに岩倉の所で却下され続けているのだろう。今度の戦いで、何よりも頼りにしていた開陽が江差沖に沈んでしまった。あれから運氣が下がったようで、何もかもうまく回らないように思えた。

ある時榎本は、ブリュネを自室に招き「エゾ地から新政府軍を討討して以降、すべてがうまくいかないように感ずる。一体何が原因なのだろうか。」それとなく話してみた。ブリュネは少し考えこんで、榎本の入れてくれた紅茶をゆつくりとすすった後、静かに口を開いた。「あなたはこの二ヶ月で当面の難しい課題をすべて乗り越え、落ち着いてしまったからですよ。今はその疲れが出ただけです。ここから先の目標が少し見えにくくなっただけです。本当の目的が何であったのか見失わなければ、やがて新しい世界が見えて来ますよ。」と、少し謎めいた言葉であったが、なんとなく分かるような気持ちもあった。それから数日間、榎本は自室に籠り、悶々と考え続けていたようだ。

その後のある日、榎本は「士官」以上の者たちを集め、「今から榎本軍は、我々の集団の代表を決めるのに、西洋の方式を取り入れて『入れ札選挙』を行う。その後に関職についても選挙を

行い、それを参考に決めたい。」と宣言した。榎本軍は元々軍艦「開陽」のもとに集まった武人の集団であり、榎本がリーダーであることはみな頭では理解しているのだが、榎本軍の構成として江戸幕府時代には榎本より上位の元・藩主や元・老中など、大名格の人たちも参加しており、この人たちの扱いには榎本も苦勞していた。また組織内では「海軍派」と「陸軍派」の派閥があり、陸軍の中にも「新選組」や「遊撃隊」「彰義隊」といったグループ同士で先陣争いや作戦上のいさかいなどがあり、全体としてまとまりに欠けた集団であった。これを「入れ札選挙」という方法を実施して組織の結集を図ろうとしたのであった。

投票の結果は、総数八五六票であったが、そのうち一位は本命の榎本であった。しかしその結果は得票数一五六票であり、圧勝どころか、わずか十八%しか集められない辛勝であった。それでも榎本に決まった。皆で決めた「榎本総裁」であった。各役職も選挙の投票通りとはいかないが、結果を参考に榎本総裁が決めている。まずは榎本の懸案であった「組織固め」の一つに切り込むことが出来た。

特徴的だったのは、海軍の開陽グループが新しく「開拓方」として生まれ変わり、「開拓奉行」として開陽の艦長であった澤太郎左衛門が就任していた。開拓方は早速室蘭で、開拓事業の準備から始めることとしたのであった。

六、ブリュネの作戦

次に榎本軍の組織改革を行いたかった。また、来年の雪解けの頃には、新政府軍が攻め上がって来るだろう、その時の防御体制をどう取るべきか。施設面と組織面からの検討が必要であった。榎本はブリュネを呼んで「早速検討してくれないか」と指示を出した。ブリュネはこのことを見透かしていたかのように「分かりました、私の案がうまく出来れば当面の目標は定まると思います。あなたの軍隊にうまく合うといいのですが。」と自信あり気であった。

この組織改革案が出来上がり、榎本は幹部以上を集めてブリュネ案の説明会を行った。ブリュネは日本語に多少難があつて聞き取りにくいのが、ゆつくりと丁寧に説明していた。その考えとは「まず施設面でエゾ地の主要ヶ所に台場や塹壕、土塁などの防御施設を配置する。」ことから始めた。そして「榎本軍には今、三千人の兵力がある。この兵力を厳しく鍛えて各所に防衛軍として機能的に配置すれば、新政府軍が例え六千人で攻めてきても、防ぐことが出来るだろう」と、施設面・組織面から強化して行くことをまず主張した。この主張はブリュネには自信があつた。幹部たちもやや安堵したように、表情が少し緩んだように見えた。

「具体的に防衛施設を作り、拠点とする陣地は、峠下地区、大沼と小沼の間、それに七重浜、鹿部、川波の各所と陣川（四稜郭）の少なくとも六ヶ所には必要だろう。」と続けた。さらに組織面についても「新政府軍が六千人以上の編隊を作つて、箱館

に侵入することを許さない体制を作るためには、今の榎本軍三千の兵士にフランスの厳しい軍律を理解させよう、難しいが高度な連隊組織を作る必要がある。」と説明した。後にブリュネは、榎本軍兵士をグループ分けして、フランス軍事顧問団による軍事訓練を五稜郭大要塞訓練場で行っているが、足並みはなかなかそろわず苦勞していたようであった。

榎本軍・陸軍部隊の組織を四つの列士満（レジマン）に分けるのだという。レジマンは、フランス語で、日本語に訳すと「連隊」の事だという。それぞれが七百人〜八百人になるように調整したものだという。そして列士満の連隊長には榎本軍が就き、司令官にはフランス軍事顧問団が就くこととした。連隊長の下には大隊長が就き、その下に各小隊が配置されていたのである。「この連隊はヨーロッパの連隊に比べると、やや小規模ではあるが、新政府軍にとっては大きな脅威となるだろう。」とブリュネは胸を張つてみせた。

そして最後に、第一列士満から第四列士満までの人員構成を発表した。勿論ここまで来ると、ブリュネ一人では無理であり、人員を配置するための何人かの手伝いが入っていたのである。

この説明会では、ブリュネの具体的で分かり易い説明が功を奏し、幹部たちには概ね好評であった。そしてその後、士官・下士官へと説明が繰り返されて降りていったが、彼等にも分かり易く評判は良かった。ブリュネにとっては、第一関門突破であつた。

ブリュネは戦鬪になった場合の作戦についても考えていた。守備的に考えると、最も危険だと思われる地域は箱館・松前・大沼・江差・鷲ノ木・そして室蘭だろうと考えられる。だからまず箱館には二百人を配置したい。ここは五稜郭要塞と並んで重要な拠点である。また、有川・大野方面の境界線と、さらには鷲ノ木・磯谷・川汲などにも防衛が必要である。これらの地域と周辺沿岸に合計で二千人が配備されることになるだろう。亀田の五稜郭要塞には二百人以上は必要ないと思うので、残る八百人は自分とオートリがそれぞれ四百人ずつの機動隊を編成して使うことを考えていた。

七、宮古湾海戦

明治元年まで「開陽」を所持していた榎本軍は、その圧倒的な強さを背景にエゾ地近海の制海権を握っていた。しかしその年の暮れ、暴風雨で沈没し、制海権を失って劣勢に立たされてしまった。中でも新政府軍の旗艦「甲鉄」は、当時日本で唯一の装甲艦であった。

「甲鉄（ストンウォール号）」はフランスで建造され、アメリカ南北戦争に使用された艦船であったが、これを江戸幕府がアメリカから購入したのだが、日本への到着が遅れたため、アメリカは「戊辰戦争での局外中立」を理由に幕府には渡さず、中立解除後に新政府側に渡したのであった。榎本軍は、再び制海権を取り戻すため、この最新艦「甲鉄」を手に入れようと「アボル

ダージュ作戦」を執行したのであった。これは、敵艦に接舷し、乗り込んで敵艦を奪い取るという、近世までの古い作戦で、近代以降その実施例は世界でも数少なくなった。

作戦は、回天、蟠龍、高尾の三艦で行う予定であったが、ここでも榎本軍は天候に味方されず、嵐のため、蟠龍は参加できなかった。その上高尾も蒸気機関を故障してしまったため、作戦にはほとんど参加できず、回天のみで作戦を実行することとした。

三月二十五日早暁、回天は宮古湾に突入すると、掲げていた米国の星条旗を日章旗に変え、全速力で「甲鉄」に接舷した。奇襲作戦は、まずは成功した。だが外輪船の回天は横付けに出来ず、船首を甲鉄の横腹に付ける「丁字型」になってしまった。船高も三メートルほどは異なっており、回天の艦首から飛び降りた兵たちは、新政府軍の小銃的となって、次々と撃ち落されていた。

この戦いは、三十分も続いたであろうか、それでも榎本軍の死傷者は五十人を超え、新政府軍も三十人余りに及ぶという大激戦であった。しばらくすると、戦闘準備を整えた他の艦船からも反撃が始まって来たことから、榎本軍の作戦は、完全に失敗に終わってしまったのであった。

この海戦にはフランス軍事顧問団のニコル、コラツシユ、それに元水兵であったクラトーの三名が参加していた。もともと宮古湾での「甲鉄奪取作戦（アボルダージュ作戦）」は、ニコル

ルの発案であった。ただ、残念ながら作戦は失敗し、高尾に乗船していたコラツシユは捕虜として捕まつてしまったのであった。

八、新政府軍の逆襲と最後の戦い

明治二年（一八六九）四月九日、新政府軍は「甲鉄」を旗艦として、第一陣・五隻の艦隊に兵員千五百人を乗せて、乙部沖に到着していた。乙部村は、江差の北わずか十軒米程の小さな村であった。榎本軍は、乙部への上陸を全く予想していなかったため、乙部に迫っていた艦隊の発見が遅れてしまった。そのため、江差奉行の松岡四郎次郎と第二列士満の司令官・マルランが一連隊百五十名を率いて現地に向かった時には、新政府軍はすでに上陸を開始していた。最初の部隊は昨年戦った因縁の松前藩の軍隊であった。

松岡隊は、松前軍の兵力に押され気味であったが、何とか小競り合いを続けているうちに、沖の艦隊から砲撃が開始されてきた。強烈な艦砲射撃であった。松岡隊もこれに反撃するものの、砲弾は敵艦に全く届かなかった。新政府軍の艦砲距離は榎本軍のそれとは全く違っていた。江差まで後退し、鷗島の砲台から反撃を試みたが、それでも全く砲弾は届かないまま、江差の街が無抵抗に敵弾を浴びているのである。この艦砲距離の違いに逸早く気付いたのがマルランであった。自分たちの砲弾距離と相手のそれとの間に大きな差があることから、このままでは危ないと見て、松岡に退却を進言した。

新政府軍は、江差から箱館に向けて四つのルートから進んでいった。一つ目は江差から海岸沿いに松前に向かう「松前口」であり、二つ目は上ノ国から山越えて木古内に向かう「木古内口」であった。さらに三つ目は乙部から厚沢部の鵜を経由して大野に向かう「二股口」であり、四つ目が乙部から噴火湾側の落部を目指す「阿野呂口」であった。

松前を守っていた第一列士満の伊庭八郎とフォルタンは、急ぎ五百名の兵を率いて江差方面に向かい新政府軍を撤退させたが、新たな手勢が木古内口方面から向かってくるとの情報が入り、急ぎ松前に撤退することとした。榎本軍はよく戦ったが、新政府軍の兵力は八千人で、榎本軍より圧倒的に多い。また、海上からの艦砲射撃により、どの戦場でも新政府軍が有利に兵を進めていた。

木古内を守っていた第三列士満の春日左衛門とカズヌーヴ司令官に大鳥率いる五百名が合流し、激戦となった。大鳥隊は、この戦いで七十名以上の死傷者を出して、泉沢まで後退した。その後知内の榎本軍は、木古内の奪還に成功したが、大鳥はこのまま木古内に留まるより地形的に守備が有利な矢不來で戦うことを決意して、木古内を放棄した。大鳥もまた新政府軍と榎本軍の砲弾距離の差にまだ気づいていなかった。

土方歳三の指揮下にあった兵三百人と、ブツフィエ司令官は、大野二股口の台場山に早くから入り準備を整えていた。土方隊は、ここに二日がかりで十六ヶ所の塹壕と土塁を築いて新政府

軍を待ち受けていた。土方隊はこの塹壕と土塁を楯に小銃で応戦したのであった。戦いは雨の中であつたが、土方隊は銃を撃ち続け、銃身が熱くなりすぎて、猶も水で冷やしながらさらに応戦を続けていた。この戦いは十六時間に及ぶ激戦であつたが、遂に新政府軍が撤退し始めた。しかし、この後すぐに矢不來が新政府軍に突破されたために「二股口」は退路を断たれる危険性が生じ、土方隊はやむを得ず五稜郭に撤退したのであった。

矢不來での戦いに当たつて、新政府軍は「松前口」から進んできた一隊と「木古内口」の一隊が合流するのを待つて矢不來に進軍した。そして後方体制を整えた後、陸軍を街道本道・海側・山側の三方から攻撃を開始してきた。

榎本軍は、兵力戦でも苦戦していたが、海上の艦隊から打ち込まれる艦砲射撃に大打撃を受けていた。この戦いで、天野新太郎や永井蟻伸齋など多数の死傷者が続出した。大鳥は富川・有川まで撤退して立て直しを図ろうとしたが、果たせないまま総崩れとなり、榎本軍は五稜郭に潰走してしまつた。

この矢不來での戦いで、カズヌーヴは重傷を負つて危険な状態に陥つていた。そしてこれを境に、敗戦を認識したブリュネは、箱館港に停泊し、戦局観察中のフランス軍艦に連絡を取り、救助を求めた。フランス軍艦から乗船許可を取つたブリュネは、五稜郭で榎本を訪ねた。そして「戦局は決したようだ。ここにこれ以上私が残ると、イギリスやアメリカは、榎本軍はフランスの力を借りて政府の転覆を考えたと言いふらさうだ。これが

ら先は、私がいるとかえつて面倒になる。」と言つて、これ以上、榎本の足手まといにならないよう、日本を去る決意を榎本に告げた。榎本はブリュネのこれまでの協力に感謝を告げ「今回の戦いでも『開陽』があつたなら、戦局は大きく違つていただらう。全ては私の責任なのだよ。」と言ひ、「カズヌーヴのこともあり箱館を離れるなら早い方がいいだらう。」と別れのことを告げた。

九、軍事裁判と名譽回復

ブリュネは、フランス軍の軍艦で箱館を離れ、横浜へと向かつた。そして、昨年無断で軍を脱走した罪により、横浜のフランス公使館で逮捕され、本国で軍事裁判にかけられるために強制送還されることになった。また、この件ではブリュネが脱走してから一ヶ月間も軍に報告しなかつたシャノワーズ大尉(当時)も管理責任が問われた。

フランス本国で軍事裁判にかけられた二人であつたが、どういふ経緯か、ブリュネが「開陽」の中で皇帝以下三名に書いた、あの「軍艦離脱に際しての長い手紙」が新聞に掲載された。そしてこれが世論の支持を一気に高め、ブリュネは新聞で英雄扱いにされてしまつた。結局裁判では、無罪になつてしまひ、元の砲兵隊に復帰することが出来たのである。誰が仕組んだのか、手紙の持ち主の誰かであり、すぐに想像がつくだらう。

シャノワーズとブリュネは、その後も出世を続け、シャノワ

ーヌは陸軍大臣に、ブリュネも彼の下で陸軍参謀総長にまで上り詰めた。

最後に榎本とブリュネの友情の逸話を話して終わろう。一八九五年(明治二十八年)に、ブリュネは明治政府から勲二等旭日重光章を授与されている。この時、シャノワーヌも一緒に受賞していた。こちらは勲一等旭日重光章で、外国人に授与される勲章としては、最高位のものであった。受賞の理由は表向き「日清戦争での日本への貢献」ということになっているが、この時期の榎本は明治政府の重要閣僚であり、外務大臣や農商務大臣を歴任しており、二人の受賞を強く上奏していた。また受賞の理由も「フランスに留学していた日本陸軍の留学生を、シャノワーヌとブリュネの二人が長年世話をしていたことに対する感謝」であったともいわれた。ただその留学生の世話も、元はといえば榎本からの頼み事であったという話である。だとすれば、この受賞は二十八年前の友情への感謝だったのではないだろうか。

(丁)

林住期の譚

小島 栄樹

「私の林住期」は古代インドで言われていた林住期(五十歳〜七十四歳)の最後にあたる年齢から始まった。ものの本によれば林住期とは、現役を退いたあと質素ながらそれまでのしがらみから解放されて自由になる時期、とある。私は七十四歳の三月に職を退いてフリーの身となり「私の林住期」に入った。それからというものの現役時代にはおよそ想像もつかないような日々を過ごすことになる。

そもその発端は退職して初めての正月に息子一家が来たことだった。息子はそのとき当時流行っていた一眼レフカメラを持っていった。それを借りて手に取りシャッターを押してみたところあのなんともいえないガシャツという重厚な音と手ごたえ、すっかりその魅力に取りつかれてしまった。早速買い求め、それからいつも散歩のお供をすることになった。

五月のある夕方、自宅から程近い五稜郭公園の散策路を散歩していたとき、その当時夏になると野外劇の舞台として使われ

ていた広場の少し北寄りの石垣の上に一羽の鳥がいるのを妻が見つけた。赤くて長い脚、黒くて長くちびし、羽の色は胸から腹部にかけては白だが背中から尾までは黒、大きさは中型である。今まで見たこともない鳥である。散策路から濠を挟んだ対岸におり夕方でもあったので少し薄暗くなってきたはいたがとりあえずお供のカメラに何枚か収めた。

翌日朝食もそこそこに再び五稜郭公園に。この日はこの鳥がいてくれたら少し腰を落ちつけて写真を撮ろうという心積もりでやってきた。濠の内側から観察しようと思いい、土手を下りてあらかじめ見当をつけていた場所に辿り着くと、いたいた。濠の石垣の縁に近くで草か何かを啄みながら右へ左へと歩いている。なるべく刺激しないように土手を下りたすぐのところシートを敷いたがその鳥は一向に動ずる気配もなくマイペースで動き回っている。七、八メートルの距離だったのでまずまずの写真を撮ることができた。散歩にきている人たちが背後を通り、あの鳥は何という鳥ですか、と聞いてくるのだがそれはこちらが聞きたいくらいで、自分たちにはわかりませんが見

たこともない珍しい鳥ですね、などと答えるのが精いっぱいであつた。

公園からの帰り道、図書館に立ち寄り図鑑で調べたところ「セイタカシギ」ということが分かつた。

地域の情報を提供しようというくらいに気持ちでこの写真に短い説明文を添えて新聞社に送つた。こんなことは自分の人生で初めてのことだつた。それから数日後記者さんから電話インタビューを受け、さらにその数日後の道新夕刊「みなみ風」に「珍鳥飛来」の見出しで写真と記事が掲載された。自分の撮つた写真とそれに関連する記事が新聞に載るなどということとは私にとつては前代未聞の出来事であつた。

それから三年ほど経つた三月の終わり頃、大沼を覆つていた氷は半分くらいなくなつていたが、湖畔一周道路の駒ヶ岳がきれいに見える湖畔に立つて写真を撮つていたところたまたま風がピタツと止み、湖面に見事な逆さ駒ヶ岳が現れた。単なる逆さ駒ヶ岳ではなく駒ヶ岳本体と逆さ駒ヶ岳の間に太い氷の帯があるという滅多に見ることのできない珍しい光景であつた。ほんの一瞬のことだつたが無事これを写真に撮ることができた。

五月のある火曜日の道新夕刊「読者の写真」欄を見ていると駒ヶ岳と湖が写つている写真が掲載されていた。世の中には自分と同じような写真を撮る人もいるのだと思ひながらそのままやり過し、いつものように一通り新聞を読み終えたあと何

となく気にかかつていたのでどなたが作者なのか見てみようと思つて先程の写真に戻つてみたところ何とそこには自分の名前があるではないか。びっくりすると同時にうれしかつたなあ。

二年ほど前からこの「読者の写真」欄に投稿していた。しかしボツに次ぐボツで一向に掲載される気配もなかつたが投稿している写真の未熟さ故のことと思つていたのであまり気にしないで投稿を続けていた。掲載されたときはすっかりボツ慣れしてしまつていたのか自分の写真が掲載されるなどということには思ひが及ばなかつたようである。この写真を見るたびにこのときのおかしかつたことが思い出されてついつい頬が緩んでしまう。これが「読者の写真」欄に掲載された第一号であつた。

次に掲載されたのが「青函トンネルの三本のレール」。北海道新幹線が開通してから三カ月が経つた六月、所用で東京に行つたとき物珍しさも手伝つて新幹線に初めて乗つてみた。帰路東京駅を出発するときにはほぼ満席だつたが仙台、盛岡と北上するにつれて次々とお客さんが降りてゆき、新青森を出るときにはほんのガラガラとしかいなくなつてしまつた。自分たちの座席は進行方向に向かって左側だつたので青函トンネルに入つてしまふと窓からはトンネルの壁しか見えなかつたが通路をはさんだ右側の座席には誰もいなかったのでもちらに移動して窓の外を見たところそこには車内からの光に照らされた上り線の青白い光を放つ三本のレールが見えた。青函トンネルには新幹線

の他に在来線を使う貨物列車も走っているので広軌と狭軌とが混在することになり三本のレールが必要となる。

他では見られない珍しい光景なので写真に収めようとカメラを向けたが外は真つ暗でレールだけが青白く光っている、室内は煌々と室内灯がついている、そしてその光が窓ガラスに反射して写り込んでくるので写真にならない。その光を遮るための特別な用意をしているわけでもないので右手にカメラを持ち左手を窓にあてて何とか光を遮る工夫をしながら何度かシャッターを切った。思うように光を遮ることができず悪戦苦闘しているうちに列車はさつさとトンネルを抜けてしまった。それでもラッキーなことに窓に反射した光が少しは入り込んでいるもののギリギリ何とか見れる写真が何枚かあったのでそのうちの一枚を投稿した。幸いにも掲載していただくことができたがこれは青函トンネルに新幹線が走るようになってから間もなくのことだったので話題性もあつたのかなと思っている。

後日談、それからしばらくして行きつけのラーメン屋に行つたときのこと。いつものように雑談をしている中でこの写真の話になった。その店のタイショーは新聞に掲載されたこの写真を覚えてくれていて、真つ黒い画面のなかに青白い線が三本だけ不思議な写真、目にしたときは星の軌跡かなにかと思つたと言っていた。写真としての良し悪しは別としてやはり印象に残る写真だったようだ。

年が明けて三月の終わりころ大沼の白鳥台セバットに行ったときのこと。そろそろ白鳥たちが北へ帰る時期なのでセバットには白鳥は五、六羽よりいなかったがその中に首飾りが際立つて美しい水鳥一羽が白鳥と一緒にいるのを妻が見つけた。今までに見たこともない鳥である。写真に収めて大沼国際交流プラザに持ち込んだ。ここには常駐のガイドさんがいてこういふときにはいつも親切に教えて下さる。このたびも凶鑑やインターネットで調べて下さり、この鳥は「ハクガン」という名称で絶滅危惧種に指定されているとのことであつた。これが記事つきの写真として「みなみ風」に掲載された。先の「セイタカシギ」に続いて二回目のことである。

それから数日後大沼国際交流プラザに立ち寄つたところ館内の掲示板にこの新聞が掲示されていた。プラザを訪れたときにたまたまこの新聞をご覧になつた観光客の一人が、どこに行つたらこの鳥が見れますか、とガイドさんに尋ねたところ語り口が軽妙なそのガイドさん、白鳥台セバットにいたんだけれども鳥には羽がありますからねえ、と応じられたのでお客様もそりやそうだと納得された様子で帰られたとのこと。ハクガンの新聞記事にまつわるこのような楽しいやりとりの一端を聞かせていただくことができた。

そうこうしているうちに「読者の写真」欄と「みなみ風」に掲載された写真が全部で十点になった。こうなつてくると人間変

な欲が出てくるもので、これらの写真にあと何点かを加えて写真展をやってみようかなどという身の程知らずの妄想が浮かんでは消えてゆく。

自宅から徒歩で五、六分のところにギャラリーを併設している写真店がある。ここでは先輩諸氏の写真展が常時開かれており、自宅から近いのでしょっちゅうお邪魔しては素晴らしい作品の数々を見せていただいている。

その日もいつものように写真展の作品を見せていただいた。そのあと店主に件の妄想の話を持ちかけたところ拍子抜けするほどあっさりと承諾してくれた。妄想が妄想でなくなり現実となった瞬間であった。何しろこういうことは初めてのことなのであれやこれやと思いを巡らせながらやつとの思いで話を切り出したのにこのあっけない結末、案ずるより産むが易しとはよく言ったものだ。日程は順番待ちということで八月三十一日から九月十二日までの二週間と決まった。偶然とは面白いもので、申し込んだ時点で空いている日にちが割り当てられただけのことなのにこの日程でいくと写真展の最中に私は八十歳の誕生日を迎えることになる。

写真展には新聞に掲載された十点と自選十二点の計二十二点を出展した。大沼をはじめ函館市内や近郊の行楽地を散策したときに目にした動植物や景色などを撮影したものが大半である。どの写真を見てもその光景にたまたま出合った時のことがなつかしく思い出されるので写真展のタイトルを「たまたま」とし

た。また妻が長年短歌を詠んでおり、時・所を同じくして詠んだ短歌を併せて展示した。

写真展が無事終了し、ホッと一息ついていた頃残念な知らせが、それまで投稿していた「読者の写真」欄が廃止されることになったのである。十月終わりの火曜日の夕刊、いつものように「読者の写真」欄には二枚の写真が掲載されていたがこの日はその右に四角い枠がありそこには、「読者の写真」は今回で終わります、と書かれてあった。

「私の林住期」に入ってから大沼には年に三十回から四十回ほど行くようになった。

林住期前半では朝起きたときに空の様子を見てどちらが言い出すでもなく、今日はいいい天気だね、の一言で大沼行きは決まり。春から秋にかけての季節は真夏の本当に暑い時期を除いて今までどおり自転車で湖畔一周することがほとんどだった。ところが林住期も後半になると朝のあいさつは、今日はいいい天気だね、に続いて、体の調子はどう、が加わる。自転車での湖畔一周は夫婦ともさすがに体力的にきつくなってきたので小沼散策路を散策することが多くなった。

大沼の春は水芭蕉から始まり、夏の睡蓮につながっていく。春から夏にかけては野鳥の恋の季節、子育ての季節であり、大沼が賑やかなる。湖畔を自転車で走行中にキャンプ場に立

ち寄ったときに見かけたエゾフクロウの幼鳥、小沼散策路を散策中に出合ったシマエナガの巣作りの現場、カンムリカイツブリの営巣と子育ての様子などなど次から次へと思いがけない場面に出合う季節である。

夏が過ぎて秋がくると湖畔一周道路の景色は通るたびに変わっていく。秋が深まるとともに木々は思い思いに紅葉してくる。赤や黄色になった葉が輝いて見える。錦秋とはよく言ったものだ。この時期になると木の葉がだんだんと落ちるので森の奥まで見通せるようになってくる。キャンプ場から大岩園地を通して月見橋に至る道路は大小のカーブが連続して現れる。ひとつひとつのカーブを曲がるたびにそれぞれに異なる錦秋の素晴らしい光景が眼前に広がる。

冬場は白鳥台セバットに行くことがほとんどである。セバットにはオオハクチョウはもとよりいろいろな水鳥が集まってくる。新顔が多く見られる年もあればそうでない年もある。新顔に出合ったときにはカメラに収めて大沼国際交流プラザに立ち寄り、ガイドさんに教えを乞うことになる。はじめのうちは野鳥の知識はほぼゼロに近かったが覚えては忘れ忘れてはまた覚えていくうちに少しずつではあるが姿と名前が一致するようになってきた。

このようにして大沼に足繁く通っているうちに撮りためた野鳥の種類もそれなりの数になった。こうなってくると大沼で出会った野鳥たちの写真展を大沼で開催できればいいなあと思う

ようにもなってくる。

ことあるたびに何かとお世話になっている大沼国際交流プラザは室内の一部がギャラリーになっている。ここでは月替わりで大沼や七飯町をテーマにした写真展や絵画展、地元の陶芸家による陶芸展、ハンドメイドの作品展などが開かれている。

自分が非力であることは百も承知の上でこの会場をお借りできればと思いきスタッフの方にお願いをしたところ快諾していただくことができた。期日は会場の予約が半年後まで埋まっており、前回の写真展から一年半が過ぎた翌年の二月に決まった。

野鳥の中でも水鳥を撮った写真が多かったので今回の展示は水鳥に絞り、タイトルを「大沼で出会った水鳥たち」とした。また前回と同様妻の短歌も併せて展示した。

写真展が開かれる二月は厳寒期で大沼も厚い氷に閉ざされるがこの季節だからこそその大沼の魅力がある。

白鳥台セバット、広い大沼の中でもここだけは真冬でも水面が開けている。オオハクチョウをはじめとして色々な水鳥が羽を休めている。オオハクチョウはその時にもよるが三十羽から四十羽くらいいてくれることが多いので、ごく間近でこれだけの数の白鳥が一望のもとに見ることのできる場所として貴重な存在である。ただこの白鳥台セバット、冬の季節は冷たい西風が吹きつけてくることが多くとにかく寒い。二十分もいると体が芯から冷えてしまうしシャッターを押す指もかじかんでしまう。こういうときには少し先に行ったところにあるコジヤレた

喫茶店の温かいコーヒーでゆっくりすることに。

写真展が終わった後も今までもおり大沼通いは続く。大沼では自分たちにとっては幻の鳥だったクマガヅラに出合ったり、北帰行を前に白鳥たちが三百羽四百羽と集まっている様子を目の当たりにすることもできた。その白鳥たちの群れと一緒に行動していた絶滅危惧種に指定されているシジュウカラガンという水鳥を湖上に見ることもできた。

新聞への投稿はといえば夕刊の「読者の写真」欄が終了してしまつたので専ら朝刊の「読者の声」欄に投稿していた。いつの間にか一回目の写真展が終わつてから「みなみ風」の記事つき写真を含めて掲載していただいた写真が十点になつた。

こうなつてくるともう一度写真展をやつてみたいという気持ちがあつたぞろ頭をもたげてくる。やるとすればメインテーマは大沼の野鳥にしたい、そうすると展示会場としては大沼がいいとなつてくる。十一月の終わりに大沼国際交流プラザを訪れ大沼での二回目の写真展開催の願いをしたところ最短でも翌年の六月ということであつた。

大沼で前回開催した写真展「大沼で出合った水鳥たち」では文字通り水鳥の写真だけを展示したが、凶鑑にあるような構図の写真も何枚かあり全体として単調だつたときらいがあつたようにも感じている。そのような反省もあつて今回は野鳥を主とするものそれだけではなく少し幅を広げた写真展にしてみ

てはと考え、タイトルを「大沼で出合った野鳥たち十(プラス)」とすることに。この十には野鳥の写真に加えわずかではあるが他の写真も展示しているという思いをにじませてある。今回の写真展でも今までも同様、展示している写真を撮つたときに共に見た情景を妻が詠んだ短歌を併せて展示した。

写真展へは初日は勿論のことその後も天気と相談しながらではあるが三日に一度くらいは顔を出した。そうなるや自然の成り行きとして行くたびに小沼や大沼を散策することになる。

六月は野鳥たちの子育ての季節である。写真展初日のことであつたが小沼散策路でカンムリカイツブリが抱卵しているのをたまたま見かけた。何日か経つとヒナたちが親のまわりで遊ぶようになり、最初に見かけてから二十日ほどが過ぎた日の夕方親鳥が背中ヒナを乗せて沖の方へ旅立つていった。

カンムリカイツブリの旅立ちを目の当たりにしたりそここに咲き始めてきた睡蓮を眺めているうちに写真展も終わった。

その年の秋、十一月の終わりにいつものように大沼に出かけ、小沼の散策路をひと回りしたあと大沼を車で一周することに。湖畔一周道路を反時計回りに進み、東大沼の木道から少しキャンプ場寄りに行つたところで左手に湖と駒ヶ岳を見渡せる場所がある。ここに差しかかったとき湖上に二十羽ほどのオオハクチョウの群れがいた。この場所にはこの春北帰行を前にした三百羽とか四百羽とかの白鳥が集まっていたのだがその同じ

場所にこのたびは南下して来たであろう白鳥の群れがいたのである。そして驚いたことに幼鳥が半数ほどいた。例年白鳥台セバットで見る幼鳥の数は全体の1割とか多くても2割くらいが思い浮かぶのだがこんなにたくさん幼鳥がいたことは意外であった。今年はいつになくさんのヒナが誕生したのだろうかとか、ここにたどり着くまでの幼鳥の生存率が高かったのだろうかなどと勝手に想像を巡らせてみたものの本当のことはわからない。

大沼に行くたびにいつもお世話になっている大沼国際交流プラザ、ここを運営している七飯大沼国際観光コンベンション協会では毎年七飯大沼カレンダーを発行している。月めくりカレンダーで、上半分には七飯町や大沼の写真が印刷されており、下半分がカレンダー部分になっている。今年からミニ枠が新設され、カレンダー部分の一部を割いて小さめの写真が掲載されることになった。今年のテーマは「私のお気に入りの場所」とのことである。このカレンダーに使われる写真はカレンダーフォトコンテストの形で公募した作品の中から選ばれる。

七月のある日、いつものようにプラザに立ち寄ったところ日頃からお世話になっているスタッフの方からこのカレンダーの応募用紙をいただいた。参考までに例年発行されているカレンダーを見てみると素晴らしい作品ばかりが並んでおりとてもじゃないが自分の作品が採用されることなど考えられないことで

はあったがこのような催しには協力したいという強い思いがあり入選云々ということはちよつと横に置いて何点か応募した。

九月の半ば頃プラザを訪れたとき、カレンダーのミニ枠に採用されたという思いもかけないうれしい知らせが待っていた。本来ならば郵送で受け取るはずの通知であったがたまたま発送直前に自分たちがプラザを訪れたために手渡ししていただくことになった。ほんの微力ではあるがこのような形で協力できたことは本当にうれしいことであった。

ミニ枠では写真とともにそれにまつわるエピソードが掲載される。

自転車に乗ってキャンプ場付近を通った時、道路から少し入ったところに見事なルピナスの庭が広がっていました。庭内はきれいに整備され奥には小屋、手前の芝生には椅子とテーブルが用意されており、ここで一休みさせてもらいました。

このエピソードからどのような風景が想像されるだろうか。

「私の林住期」に入ってから始めた写真、いや始めたとはいっても大袈裟なことではなく新しく買った小型一眼レフカメラを散歩のお供にして気に入ったシーンがあるとそれを撮っているというレベルの話である。私の撮影スタイルについて大沼でお世話になっているこの道の先達がいみじくも名付けて下さったのが「散歩写真」、とても気に入っている。大沼に限らずあちら

こちらを散策している道すがら気に入った光景に出くわすたびにシャッターを切る、それがごく普通のことなので散歩写真という言葉はピッタリなのである。

大沼を散策しているときの撮影スタイルもこの散歩写真の域を出るものではないのだが何度も通っていると散策中に野鳥に出合う機会も増えてくる。野鳥は二十メートルとか三十メートル先にいるのが当たり前で少し離れているときは百メートル、二百メートルということもよくある。手持ちのカメラではこのように距離が長いときには野鳥自体が小さいこともあってカメラの機能を総動員している工夫をしてみてもほんの小さくしか写らない。大沼には四季折々いろいろな姿を見せてくれる野鳥たちがいる、渡り鳥もいれば留鳥もいる。だんだんと野鳥を撮る機会が多くなりそのたびに何かもどかしいものを感じていた。

大沼や香雪園を散策していると口径が十センチもあるうかと思われる望遠レンズ付きのカメラを持った方に出会うことがよくある。このようなカメラでは遠くの被写体を大きく写すことができるという。実際にカメラのディスプレイを見せていただく機会がありそのときは遠くの梢にいたクマガラを撮ったという写真、大きくくつきりと写っており見るからに素晴らしい。

こういう写真を見せつけられるとつい食指が動きそうになるのだが、みなさんのお話をお聞きしてみると価格の面では百五十万円前後がひとつの目安のような感じで、重さはざっと三キロ

グラムとか。財力的にも体力的にもとてもじゃないが手に負える相手ではない。

しばらくして時折立ち寄る量販店のカメラ売り場でたまたま見かけたカメラ、大きさや重量は手持ちのカメラとほぼ同じだが望遠の倍率が件の大型レンズに勝るとも劣らない。俄かには信じがたいことではあったが画像の記録部分の性能を落とすことよって小型ながら高倍率ズームを実現しているという。

望遠の倍率が高く、散策の途中で野鳥を撮るのには手頃なカメラに巡り会えたというような感じ、早速買い求めた。初代の一眼レフカメラを使い始めてから三年が経ったときのことであった。二代目のこのカメラ、小型軽量ながら高倍率の威力を遺憾なく發揮してよく期待に応えてくれた。このカメラのおかげで撮影の幅がグンと広がった。一回目の写真展では初代の一眼レフで撮った写真がほとんどだったが二回目、三回目の野鳥を主とした写真展ではすべて二代目のカメラで撮影したものである。撮影後にプリントした写真の画質も素人目にはまずまずの出来に思われた。使っているうちに何かと不自由な面も目についてくるが望遠の高倍率が最優先だしそれがある程度実現できたと今、欲を言い出せばきりがないこの世界、そのほかのことについてはあまり不平不満は言わないことにしている。

そうそう、そういえばカメラの他に忘れてはならない大事なお供がもう一台あった。どこに行くにも必ずお世話になつてき

た愛車、長い間よく仕えてくれた。走行距離は既に十二万キロを超え、いつの間にか地球を三周もしていたことになる。定期的に点検整備をしてきたこともあってとりたてて運転に支障をきたすこともない。大沼に通じる函館新道では制限速度いつぱいの時速百キロで走ってくれる。外観はドアまわりに少し錆が出てきてはいるがオンボロ車などと失礼なことを言って機嫌を損ねてしまっても困るのでわが家ではクラシックカーと呼んでいる。車も褒めながら使うと長持ちするし調子よく走ってくれる、か。

「私の林住期」に入ってから早いものでもう十年が過ぎた。私も妻もすでに後期高齢者の仲間入りをしているがありがたいことに二人とも自分の足で大沼小沼の散策路、多少の高低差のある匠の森公園や香雪園などの散策を楽しめている。

こんな強がりを書いてはいるもの時とともに体力の衰えは隠すべくもなく、出かける回数は徐々に減ってくるし、行った先での行動範囲も自ずと狭まってくる。まあそれもいだらう、何も無理することはない、自然の摂理に抗うことはない、と自分に言い聞かせている。このような現実をあるがままに受け入れ、これからも自分たちができる範囲で日々穏やかに過ごせたらと思う今日このごろである。

選評

竹中 征機

この度皆様の作品を拝見し、選考とその作品評をさせて頂きました。

先ず全体的に見ると、例年より向上の傾向にあり喜んでおります。やはり、入選された方々はそれなりの準備の跡が見られ、個々の分野を取り扱い、内容が充実し、甲乙付けるのが難しかったです。

入選

「ウクライナ戦争と俳句」

末永 玲子

今回特に、注目したのは、「ウクライナ戦争と俳句」末永さんの作品だった。人間生活における必須は衣食住が大切だが戦時下の厳しい中にあつても癒されるもの、それは詩歌で有ることを如実に教えて呉れるのである。

特にロシアのウクライナへの侵攻は旧ソ連の崩壊後も燦る周辺国の複雑な事情

を露呈していると同時に独立を守るのも大変である。

例えば、作者が挙げた留学生は、エストニアが母国だが他に、ロシア語、フィンランド語、英語ができた。

これが、この周辺で生き残る道であることを良く教えて呉れる。

わが国の特攻隊の遺書も切ないが、ウクライナにあつての句の端々に見る威圧と核の脅しをもって屈伏させようとする大国主義には限りない恐怖感と同時に怒りを感じる。

塹壕や地下で息をひそめて生きるウクライナの国民に一日も早い平和の訪れ願う作者の願いが良く伝わって来ます。

「出稼ぎ哀史―層雲峡水路ダム―」

齊藤 満

齊藤さんは出稼ぎの歴史について詳細に書かれ印象的でした。近年有りませんがタコ部屋や朝鮮人労働者への不当な使役を聞いた。

出稼ぎの原因として、沿岸漁業の不漁による生活の困窮をあげている。また一つに、戦後高度経済成長の電力需要の高まりをあげている。特に北海道では層雲峡のダム建設に当たつての賛否や地元住民との摩擦もあるが国策として進められた経緯を分かりやすく説明し好史料となっている。

「ジュール・ブリュネと箱館戦争」

木村 裕俊

木村さんの作品は箱館戦争、いわば戊辰戦争の官軍と幕府軍のほぼ最後の戦いとなるわけだが、幕府軍の軍事顧問団のブリュネとの関わりを彼の人間的魅力にスポットを当て興味深く読ませてくれた。当然榎本武揚が蝦夷共和国を統括し、幕府軍の最後の砦として箱館の五稜郭に立て籠もった。幕臣としては土方歳三、大鳥圭介、荒井郁之助他で、幕府軍は箱館湾の海戦に敗れた。

日本では函館市の五稜郭星型の城址だ

が毎年桜の時期には観光客溢れる。

木村さんが、単に写真でのフランス軍事顧問団としてより一人の生き方に光を当てたことは大きな収穫だった。

佳作

「林住期の譚」

小島 栄樹

小島さんの言われるように、インドから伝わったらしい。若い順に言うとうち、学生期、家住期そして七五歳からは遊行期に入る。

作者は息子さんのカメラを借りちよつといたずら半分からのマニアぶりを面白く描いている。鳥等の写真を撮るために幾度となく大沼通いをし、その写真が新聞に掲載され喜んだり欄が無くなって、がっかりしたり、また写真仲間や何度かお世話になった七飯町の大沼の展示場での作品展の思い出等林住期の充実した日々の思いを書き、退職後の生活に多くのヒントを与えてくれた。

詩

入選

眠る街

玉掛 公恵

草や

樹や

虫達が

お喋りの声を 慌てて潜め

そればかりか

月でさえ

雲から出るのを 躊躇うほどの

闇夜

其其の居場所で

上質の眠りを求める 家達

その家達を気遣う夜気も 又

その家達に

木の葉一枚落とさせまいと 息を止める

スミクロ
墨黒の闇夜――

昼間笑って

その口を大きく開けて居たであろう

其其の家の窓達

それらの窓達も

今となつては

其其の家の壁に溶け込んで

その存在すら主張しない

片や

今日一日の 役目を終えた

門戸や

ポストや

車達などなど――が

誰に氣遣う事もなく

闇の中で

夜気と共に 横たわって居る

街灯——

銀の十字の光線を放つ

帽子を被ったジェントルマン——街灯は

墨黒スミクロの闇の中に在って

尚

墨黒スミクロの闇とは 一線を画し

其其が

その凜とした姿を

道沿いに

林立させて居る

嗚呼あゝあゝ
—

此所ここには

もう

夜気よけさえ

存在存しないかのようだ

詩

佳作

ある一日が僕にのこしてくれたもの

梅村 美保

引きこもりの僕は

僕の部屋から空を見て

一日、ボーツと過すはずだった

が、

窓から「小バエ」が入って来て

頬を二度、三度、ツン、ツンされ苛立ち

つい、手が出てしまった……いつものこと

そう思っ、体の向きを変えたら隅に、

黒く丸い小さいものが……

「だんご虫」？

微動だにしない君と、息をひそめる僕

僕は、又空をみ上げる

相変わらず雲は気ままだ

風が、僕の頬をソオーツと優しく撫でて

くれたから

我に帰り

「だんご虫」をメモ用紙ですくい

窓の下へ

「小バエ」の、なきがらは

ティッシュにそっと包んで

共に並べておいた

「だんご虫」はじっとしていた肢体を

ゆっくり伸ばし悠然と

進んで行く

自由自在な「小バエ」は、もう……僕が……

“我は善人か 悪人か”

みあげる空は 無言で僕の心を打ち砕いた

そうだ！ 外へ出て 風の速さを感じよう！！

選評

鷺谷 みどり

今年度は、九名の方による十八作の詩作品が寄せられました。例年よりやや少なくて寂しい気持ちもありましたが、それぞれの個性が存分に発揮されており、その熱量に頼もしい函館の文学の力を感じました。

詩という文学を成立させる最も重要なものは、《詩的なことば》がそこに用いられているかどうかです。詩的なたくらみ、と言いつてもいいでしょう。ことばには、《日常的なことば》と《詩的なことば》があります。《日常的なことば》は、私たちが普段から出来事や感情の伝達的手段として普遍的に用いていることばです。それは当然、理解し易く共感性が高い、一方でそれだけに頼ってしまうとそれは随筆やノンフィクション等に近いものとなってしまい、詩というジャンルの独自性を失ってしまいます。

対して、詩を詩たらしめている《詩的なことば》は、比喻や寓意性、または偶発的

な表現を付与することによりことばを通常の伝達の文脈から逸脱させ、時には意味を転倒させ、ことばが元々持っているイメージをずらし新しい世界を生み出しているのです。しかし当然、《日常的なことば》の力を借りなくては《詩的なことば》は読者の理解を阻む難解な記号の羅列になってしまうリスクを常に孕んでおり、どちらかだけでは詩として成立せず、《日常的なことば》と《詩的なことば》どちらにより比重を置いていくかで書き手の詩風が決まっていきます。

今回は、《詩的なことば》を駆使して独自の世界観を創り上げた二作品をそれぞれ入選と佳作に選ばせていただきました。

の印象を裏切った、生き生きとした躍動的なイメージに満ちた一作にしています。どこかコミカルな風情すら感じさせる「上質の眠りを求める 家達」を彩るものたち、なかでも第三連の「昼間笑って／その口を大きく開けて居たであろう」という窓の表現は秀逸。詩人の個性と力量が光っています。

終盤では「帽子を被ったジェントルマン」である街灯が登場し、闇夜に対し一切その存在を揺るがせない、夜にあり夜に染まらない唯一の異質な存在として読み手に強い印象を与え作品は幕を閉じますが、この終わり方であればこの作品の真の主役は街灯であり、街灯を中心に据えそのあり方の内奥を深くさぐっていけば、更に読み応えのある作品が出来るのではないかと感じました。

入選 「眠る街」

玉掛公恵

登場する全ての事物に擬人的な性格を与えており、それが見事にこの作品を題名

佳作 「ある一日が僕にのこしてくれたもの」

梅村美保

いつもの日常が劇的に変化を遂げる小

さな出来事を、丁寧に、繊細に掬い上げた作品です。「僕」の心情に寄り添いそれを揺さぶった「自由自在な」小バエの死と「微動だにしない」だんご虫の生の対比はありきたりではないオリジナリテイがあり、十分なドラマ性を持ちながらも感傷過多にならない抑えられたリアリテイのある描写の妙に梅村さんの筆才を感じます。

特に後半は勢いよきことばの伸びやかさがあり、「みあげる空は 無言で僕の心を打ち砕いた」は鮮烈の一言。ただ、序盤は説明的な部分が多く思われました。

今回の応募作品は、恐らくご自身にとつて身近で差し迫った問題について書かれた作品が多かったように思います。詩を書く上で、それは大事な動機ですし、その切迫感が自然とことばの迫力となり、私も拝読して何度か圧倒されました。私も長いこと自分自身をテーマにして詩を書いてきた者です。その切迫感はそのままに、体験をナマのままことばにして差し出すのではなく、例えば、別の事象や事物に変換してみる、独自の表現方法を随所に散り

ばめる、一般的・倫理的な見方ではなく敢えて捻じれた見方でその出来事を眺めてみる、そんな風に自分の原稿に少し手を入れてみると、作品は驚くほど鮮やかに、独立した世界を私たちに見せてくれます。詩は短い分、書き手にとって必然性のあることばのみで構成されるのが理想です。来年、また皆様の多種多様な必然に触れるのを、心から楽しみにしております。

山縣庸美選

入選

五百円の豆腐は旨し湧き水の溢るる丘の木陰に掬ふ

菊地利春

力ある限りを尽くし子のために米を作りしその父も亡く

清水法雄

ぶどうガム露命を繋ぐ叔母が乞うそつと忍ばすスポンジ水と

開沼京子

佳作

さらさらと小川流るる行く先へ枯葉にのつて吾も行きたし

石寄章枝

山鳩が頻りに鳴ける一日をば過こせる我は後期高齢者

竹田光彦

誕生日誰か気付いてくれるかな吾子のラインを何度もチェック

柴田泰子

晩ご飯今日のメニューは天ぷらで私のテンション超アゲアゲよ

三好漣

過ぐる時忘れてつつじを摘みにけりその蜜吸いたるふるさと思ふ

清水牧子

選評

山縣 庸美

入選

五百円の豆腐は旨し湧き水の溢るる丘
の木陰に掬ふ

作者が五百円の豆腐の味を知っていたからこそ詠めた歌で、下の句の動きを捉えることよって作品が生まれた。

力ある限りを尽くし子のために米を
作りしその父もしく

上の句に亡き老父の生きざまが子に読み手にも伝わってくる歌。何時の世も親は子のため力を尽くされる。

ぶどうガム露命を紡ぐ叔母がどうそつ
と忍ばすスポンジ水と

「紡ぐ」は「繋ぐ」としたい。スポンジ水と共にぶどうガムの味を。叔母と作者の気持ちが一途となり本来はそつと忍ばす介護の一齣であろう。

佳作

さらさらと流るる小川行く先へ枯葉に
のつて吾も行きたし

第二句は「小川流るる」とリズムを調えたい。時には力をぬいて詠むのも一考。作者は現代仮名遣いか、それであれば「のつて」は小文字になるが。

山鳩が頻りに鳴ける一日を過こして我
も後期高齢に

第三句から「一日を過こせる我は後期高齢者」としたい。なお「一日」をひとひと詠むのであれば「一日をば」としたい。のんびり過こすのも一興だと思われるが。

誕生日誰か気付いてくれるかな吾子の
ラインを何度もチェック

母親なればの一首。女のお子さんがおられれば尚更のこと。下の句が上の句を補って動きがなんとも微笑ましい。職人育ちの私どもには父母も妻子も記念日は縁遠いものであった。

晩ご飯今日のメニューは天ぷらで私の
テンション超アゲアゲよ

女子生徒さんの作品。下の句の「私のテンション超アゲアゲよ」は見事。結句の漢字とカタカナの調和が辞書にはないが読み手には伝わってくる。口語短歌の散文的表現は賛否両論だが読み手に作者の感動が伝わればと思う。

過ぐる時忘れつつじを語りしけりその
蜜吸ったふるふと思ふ

「過ぐる時忘れてつつじを摘みにけりその蜜吸いたるふるふと思ふ」と添削。つつじの花を詠まれた歌は多いが蜜を吸われた歌は少ないので採り上げたが、もう少し言葉を大切に。

今年度も二十三名、九十四首の応募の中から選ばせて貰ったが、今回も常連のかたがたの壁を破ることができなかった。入選佳作は甲乙つけがたく採りたい歌を選外にしたのも紙一重。これに懲りずに来年も良い歌を。

選者詠

山縣庸美

雪搔きしか能なき老人の仲間入り冬には冬の挨拶も楽し

あの月に人類がゆきしと見上ぐるも地球はいまだ戦のさなか

沈む日に黄色く咲きゐし福寿草萎み始めぬ元の形に

「ちよつと痛いですよ」と足の胼胝小刀で切り取る君は女医さん

独り立ち出来るまで親は子を育つその子は親の老後を見るや

熊澤三太郎選

入選

学童と別れ征く師や敗戦忌

あおしくれ
青時雨田の真ん中に母ひとり

陽のめぐみ受くる胡瓜きゅうりを丸かじり

石岡繁雄

清水法雄

太田満喜子

佳作

幾たびか羽根ふるはせて蝶の羽化

とんぼうや夕日は翅にとけ初む

古稀の子と白寿の父と初詣

リハビリの公園に咲く辛夷かな

落日の染み込んでゐる赤とんぼ

千葉誠一

住吉紀美子

伊藤静子

竹田光彦

斉藤ふじお

選評

熊澤 三太郎

入選

学童と別れ行く師や敗戦忌

季語は「敗戦忌」。昭和二十年八月十五日ですね。第二次世界大戦が終りました。毎年この日には、戦没者追悼の催しが全国各地で行われていますね。

戦争が闖になって教員も戦に行かざるを得ない状況にあった時代でした。句は、その事を詠んだのです。私は、その時小学生の二年生でした。この句でその頃のいろいろな思いが駆けめぐったのです。

青時雨田の真ん中に母ひとり

「青時雨」とは夏に降るにわか雨のことですね。作者は、「稲を刈る音響き合ふ母と来て」との投句も書いています。広い田圃に、にわか雨が降ってきて「母ひとり」その雨を凌ぐことも出来ず立ちつくしておられる様子を詠いました。おそらく作者も同じように田の隅に立って「青時雨」に打

たれていたのでしょう。

陽のめぐみ受くる胡瓜を丸かじり

面白い句ですね。「胡瓜」は一年中出回るようになったが、元来は夏のもの、と歳時記にあります。「丸かじり」がいいですね。りんごより食べやすく、このような景をよく目にしますね。「陽のめぐみ受くる」の表現もいい。

佳作

幾たびか羽根ふるはせて蝶の羽化

単に「蝶」と云えば春ですね。「羽化」は昆虫のさなぎが変態して成虫になること。私は庭から蝶が生まれて飛んでいるのをよく見かけますが、「羽化」はまだ見たことがありません。上五・中七の表現がいいので頂きました。

とんぼうや夕日は翅にとけ初む

「とんぼう」は秋の季語。なんと云っても中七・下五の表現がすばらしい。「とんぼう」は歳時記では秋の季題になっ

ていますね。北海道では六月の中頃以降に飛びはじめます。そして赤とんぼになると秋ですね。

古稀の子と白寿の父と初詣

「初詣」は年があけて神社仏閣に詣でることですね。「古稀」は七十歳、「白寿」は百の字から一を取ると「白」になって九十九だから、それを「白寿」と云ったのです。それにしても、九十九歳の父と七十歳の娘が一緒になって「初詣」のお参りしたとは、おめでたいことですね。

リハビリの公園に咲く辛夷かな

「辛夷」春の花ですね。青空に群がり咲く白い花は眩しいばかりですよ。その辛夷のように「リハビリ」で厚生復帰なされるよう願っております。

落日の染み込んでゐる赤とんぼ

「とんぼ」は秋ですね。この句を読んで「ゆふやけこやけの赤とんぼ」と云う唄を思い出しました。古語で「あきつ」と云う、

と歳時記にあります。また「澄みわたった
空に、流れるように群れをなして飛ぶ赤と
んぼ」とも説明しています。この句は「落
日」と組み合わせましたね。

選者吟

熊澤三太郎

白鳥

青空を旋回しつつ白鳥来く

白鳥の着水滑走勇ましく

さざ波に深眠りせし白鳥も

大白鳥のっしのっしと陸歩おかみ

呼子鳴らしつつ白鳥へ餌を投じ

白井靖孝選

入選

切るたびに同じ顔して冷や奴

足腰に消費期限を囁かれ

漁火も波の谷間でかくれんぼ

水関清

水島悦子

鍋倉英諒

佳作

四季咲きの花に活気をもらう日日

駅弁のおかずが動く夫婦旅

一言えげ十言い返すだんな様

古傷が声を出してる今朝の冷え

トタン屋根下手な演奏聞く寢床

岩本真穂

犬石恭子

森美紀子

滑川昌子

本間総子

選評

白井 靖孝

市民文芸川柳部門で第59集・第60集・第61集の選考をされた人生かつ川柳の先輩だった中村晋星さんが亡くなられて、とても残念な気持ちでいた時に、第62集の選考者を依頼されました。

函館山の麓谷地頭町で生まれた私にとつて市民文芸に特別な思いが有り、川柳部門に入選入賞する喜びを全身で味わっていました。

それがこの度は投句する側から選をする側へ変わることに不安が有りましたが、ちょうど函館の川柳界が組織的に大変な状況ということも有り、川柳愛好者が少しでも増えるためのお手伝いならと、力量不足を承知で引き受けさせていただきました。これまでに培ってきたことを生かし、誠心誠意努めさせていただきま

入選

切るたびに同じ顔して冷や奴

日常の何気無いこと、他の人なら見過してしまふことに目が行きましました。これぞ川柳。同じ顔して冷や奴を見付けた作者のお手柄です。『自由吟では常にアンテナを張つて、五感を研ぎ澄まし、それに引つかかってくるもので、パツと詠む。』という先人の言葉通りの句になりました。

足腰に消費期限を囁かれ

高齢になると、少しずつ体の不調が現れてきますが、足腰にそれは顕著なようです。歩き方がゆっくりになり杖を使うようになって、ついには足腰から、「もう少し労つて。」と囁かれました。

今年の最高齢者の句ですが、行動力の有る作者は、足腰と折り合いをつけながら、更に活躍されることでしょう。

漁火も波の谷間でかくれんぼ

国道278号線通称漁火通りから、函館山

からそして東山方面からと市内のいたる所から見る事が出来る津軽海峡の漁火。昨今のイカ不漁で元気がないように見える漁火ですが、市民にとつてはあの「イカ、イガー!」というイカ売りの朝の風景が再び戻って欲しいと願っていることでしょう。そして必ず見つかるのが「かくれんぼ」。きつと戻ってきます。『も』には、イカと共に不漁になつているサンマ棒受け網も含まれることでしょう。

佳作

四季咲きの花に活気をもたらす日

四季咲き花を含めて北海道でも春から秋まで咲いている花がたくさん有るようです。庭の一番お気に入り場所の咲いている四季咲きの花。気分が落ち込んだ時でも、視線を向けると咲いていてくれる姿に、溢れるほどの活気を体内にいただいています。

駅弁のおかずが動く夫婦旅

コロナ禍で遠出もままならない日が続いていましたが、政府の方針変更で国内旅行に出る方が増えているようです。「あの駅あの駅弁。」という狙いをゲットした夫婦旅。心も浮き浮き、おかずも浮き浮き二人の仲立ちをします。

一言えは十言い返すだんな様

川柳には句材が必要です。その句材をどう料理するかで、巧い川柳・拙い川柳が決まってきます。掲句のような場合は、ほとんどの句で十言い返すのは奥様と相場は決まっています。そこを、斜め横からの視線でだんな様も言い返しますよ、と詠んだところがお手柄です。しかも「夫」とせず「だんな様」としたところに作者の深い心を感じます。

古傷が声を出してる今朝の冷え

人間を長くやっていれば少しづつ古傷が積もってきます。それらを看めながら日常を過ごしていますが、季節の変化で思わ

ぬ時にそれが現れる時があります。特に、冬日・真冬日に際立つてきます。厳しかった今朝の冷え込みに古傷が叫び声を上げた、という擬人法が効きました。

トタン屋根下手な演奏聞く寢床

夕方から降り出した雨が夜半頃には本格的になりました。なかなか寝入ることが出来ない耳にトタン屋根からの雨の音。よく聞くと楽器を習い始めた孫の演奏にも聞こえてきて、ハミングしながらつい応援したくなってきました。

選者吟

白井靖孝

人差し指と友達のキーボード

忘れられても僕を待つ忘れもの

良いことばかり繰り返す思考力

やり残し無いよう上る八十路坂

老いては来たが末路には程遠い

追悼 竹中 征機 先生

函館市民文芸ノンフィクション部門の審査委員の竹中征機先生が令和4年11月27日にご家族に見守られ、ご逝去されました。函館市民文芸第46集（平成18年度）から16回にわたり、審査委員をお引き受けくださり、今年度のノンフィクションの選評もいただいた後、先生の訃報に接し、函館市民文芸編集スタッフ一同、悲しみにくれました。

竹中先生は技術科教員でおられて、函館文学学校の講師のほか、水墨画、俳句、詩など多方面にご活躍でした。市民文芸に応募される方は竹中先生に審査していただけるのを楽しみにしておられる方も多くいました。温かなお人柄で、包み込むような選評に魅了されたからでしょう。

函館市中央図書館が平成17年11月27日に開館して、その歩みとともに審査員をしてくださいました。これまでの市民文芸に対するご協力、ご厚情に心から感謝し、謹んで哀悼の意を表します。

審査員紹介（*本紙各部門受賞作品の掲載順）

随筆

函館文学学校講師

対馬 俊明

小説・文芸評論

北海道教育大学名誉教授

安東 璋二

ノンフィクション

函館文学学校講師

文芸誌『海光』代表

竹中 征機

詩

日本現代詩人会会員
日本詩人クラブ会員

鷲谷 みどり

短歌

新アララギ会員
道南歌人協会顧問

山縣 庸美

俳句

函館俳句協会会長
『ホトトギス』同人

熊澤 三太郎

川柳

はこだて川柳クラブ代表
道新文化センター川柳教室講師

白井 靖孝

あとがき

『市民文芸』第六十二集をお届けします。

今年の各部門の応募作品数は、

随筆 二十一編 小説七編 文芸評論二編 ノンフィクション九編 詩十八編 短歌九十四首 俳句百十七句 川柳百句 計 三百七十点となりました。昨年度と比べますと投稿数は減りましたが、一つ一つの作品の質の向上が見られます。更に市民の皆様方に広く浸透するよう係として取り組んで参ります。各審査員の先生方には、ご多用中にもかかわらず、厳密なる選考とご講評、貴重なご意見を賜りましたことを心より厚くお礼申し上げます。

【追悼】 昨年の十一月にノンフィクション部門の審査員を長く務められた竹中征機先生がご逝去されました。体調が悪しいのに、選考・選評を締め切り前に仕上げてくださり、それから間もなくして天に召されました。いつも「素晴らしい仕事をされていますね。がんばってください」と温かいお言葉をかけてくださいました。先生のことを思い出すと、優しい先生にまたお会いしたい気持ちでいっぱいになります。文芸だけではなく、教育や芸術方面でも活躍されました。竹中先生、長い間ありがとうございました。担当者一同、ご冥福をお祈りします。

函館市民文芸 第六十二集

発行日 令和5年3月18日

編集・発行 函館市中央図書館指定管理者図書館流通センター・マルエイヘルシーサービス共同事業体（函館市五稜郭町26-1）

TEL (0138) 3515500

題字 木下順一

表紙 五稜郭の桜と函館市中央図書館（撮影・丹羽秀人）

印刷所 有限会社 日孔社

【 応 募 要 項 】

募集作品

1. 随筆	400 字詰原稿用紙	5 枚以内
2. 小説	同 上	4 5 枚以内
3. 文芸評論	同 上	4 5 枚以内
4. ノンフィクション	同 上	3 5 枚以内
5. 詩	同 上	5 編以内
6. 短歌	同 上	5 首以内
7. 俳句	同 上	5 句以内
8. 川柳	同 上	5 句以内

【 応 募 規 定 】

1. 応募資格は函館市民であること（函館市内の学校に通学している児童、学生、生徒、また函館市内に通勤している者を含む）
2. 原稿は未発表のものであること。
3. 原稿には ①応募部門
②住所
③氏名（ふりがなを必ず付記のこと）
④年齢・性別
⑤職業（児童、学生、生徒は学校名・学年も必ず記載のこと）
⑥電話番号 を明記してください。
4. 400 字詰め原稿用紙に手書き、またはワープロ・パソコン原稿によるもの。
原稿用紙に手書きする場合、ボールペンもしくはインクで誤字脱字のないように、読みやすい字（楷書）で記載してください。
ワープロ・パソコン原稿の書式は、原稿用紙（400 字・20 字×20 行）設定で、規定枚数内であることをご確認のうえ、ご応募ください。
短歌・俳句・川柳は、すべての漢字にふりがな（読み方）を記入してください。
ふりがなについては、作品集掲載の際に表示を希望する箇所に（ ）をしてください。
5. 応募原稿は返却いたしません。
また、入賞（入選・佳作）作品の著作権は、すべて函館市に帰属いたしますので、ご了承願います。
6. 作品の中では個人情報保護に配慮し、個人・団体を誹謗・中傷するような内容の記載はご遠慮ください。